

川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成十七年八月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九三九号

日川協加盟



No. 939

路郎忌・薫風名誉主幹追悼
川柳大会特集号

八月号

第11回 川柳塔まつり

《同人総会》

と き 10月10日(月・祝日) 午前10時～11時半
ところ ホテル・アウリーナ大阪 3F 生駒
(近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車・TEL 06-6772-1441)
議 事 平成16年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成17年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《各賞表彰式・記念句会》

と き 同 日 午前11時開場・午後1時開会
ところ ホテル・アウリーナ大阪 4F 金剛中・西
表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・茴香の花賞・一路賞・
各地柳壇賞の表彰式を午後1時から行います。
おはなし 「世界遺産・紀伊山地の霊場と参詣道について」 三宅保州
兼 題 「若い」 (奈良) 大内朝子 選
「栄える」 (大阪) 前たもつ 選
「のぞみ」 (東京) 播本充子 選
「例えば」 (鳥取) 新家完司 選
「つくる」 (岡山) 濱野奇童 選
「つばさ」(事前投句・8月31日締切) 河内天笑 選
◎各題2句・欠席投句拝辞
出句締切 正午・午後4時半終了予定
会 費 2,000円(記念品呈)・当日いただきます。

《懇親宴》

と き 同 日 午後5時～7時半
ところ ホテル・アウリーナ大阪 3F 葛城
会 費 7,000円
宿 泊 ホテル・アウリーナ大阪 8,000円(朝食付)
◇事前投句および懇親宴・宿泊の申込みは本誌同封のハガキに明記の上、
8月31日(休)までに本社事務所宛お願いします。
◇懇親宴・宿泊のご送金(句会費をのぞく)は同封の払込用紙でお願い
致します。
◇記念句会・懇親宴には同人・誌友にかかわりなく、一人でも多くの方々
のご参加をお待ち申し上げます。

主催 川柳塔社

ことしの七月七日

河内 天 笑

今年之路郎忌は、期せずして橘高薫風名譽主幹の追悼句会と、ごく自然に重なる運びとなりました。これも薫風先生の路郎師を一途に慕う気持のなせるわざであつたのかも知れません。

川柳大会に先立ち一時から「偲ぶ会」が開かれました。川柳塔社の皆さんは青森から米子まで全国各地から駆けつけて下さり、近畿一円の結社の主幹および会員・同人の皆様百七十名の出席で、薫風先生を偲んでいただきました。

先生のご子息、橘高充氏の挨拶にはじまり、先生の偉大さ、存在の大きさを称えるスピーチが続き、惜しい人を失った残念さが深くなるばかりでした。

先生はいつも紺の背広でお洒落され、何事にも緻密で繊細な感覚をお持ちの上博識で筆まめ、行き届いたお方でした。たくさんの方々のどのスピーチも、薫風

先生の素晴らしさを偲ぶもので、思わず感涙を誘われるほど、真に迫ったお話もありました。

それに引き替え自分を振り返りますと、荒削りでおつちよこちよいで、傲慢なところもあり、先生との落差の大きさには我ながら啞然としてしまいます。

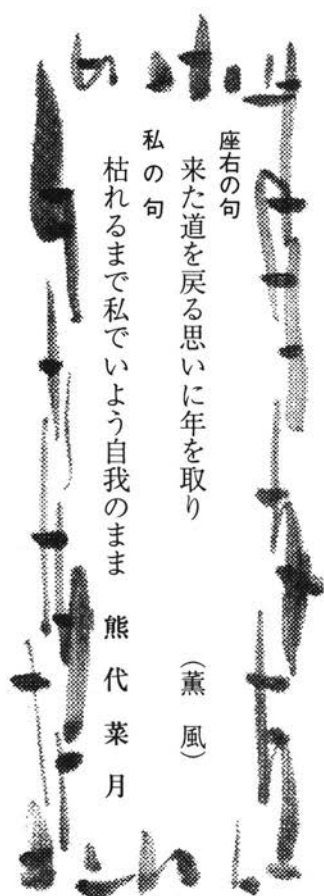
とは言つても、長年の生き様で身についた考え方や行動はおいそれと転換出来るものではありませんが、これまで先生に教えていただいた様々なことを肝に銘じ、自分の欠点を一つ一つ直して行きたいと思っております。

川柳塔の表紙の絵柄が一新されます。『川柳塔』創刊以来四十年間にも亘って南画界の重鎮・直原玉青先生に、親しみ深い水墨画で塔誌の顔を飾りつづけて頂

いた事がどれ程有り難かつたかは言葉に言い尽くせません。先生には厚くお礼申し上げます。

七月号で発表しましたように、六月十二日、広島市広島郵便貯金ホールで開催された、第29回全日本川柳二〇〇五年広島大会で、本社の川上大輪氏（理事・和歌山市）が、昨年十一月十三日福岡二〇〇四年国民文化祭川柳大会に引続き、文部科学大臣賞を受賞しました。「六十年まだ広島はヒロシマで」。これは、全国の柳人をアツと言わせた偉業で、まさしく川柳塔の誇りです。

もう一つの誇りは、ジュニアの部で広島県知事賞を鳥取市鹿野中の坂本由佳さんが受賞したことです。「生きてゆく長い廊下を一歩ずつ」。この中学の川柳指導は中原諷人氏（理事）で、毎年大会で受賞者を出しています。薫風先生がご存命なら、この快挙をどんなに喜ばれただろうとあらためて残念に思いました。



座右の句

来た道を戻る思いに年を取り

(薫風)

私の句

枯れるまで私でいよう自我のまま 熊代 菜月

川柳塔 八月号 目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「通天閣と河底池」

■巻頭言 ことしの七月七日

私の震災十年

河内 天笑 ……(1)

川柳塔(同人吟)

西口 いわゑ ……(2)

川柳塔の川柳讃歌 (6)

河内 天笑 ……(4)

自選集

木津川 計 ……(51)

水煙抄

奥田みつ子選 ……(52)

各賞選考規定

奥田みつ子選 ……(56)

橘高薫風名誉主幹を偲ぶ会

橘高薫風名誉主幹を偲ぶ会 ……(78)

路郎忌・薫風名誉主幹追悼川柳大会

路郎忌・薫風名誉主幹追悼川柳大会 ……(81)

愛染帖

波多野五楽庵選 ……(87)

私の震災十年

西口 いわゑ

一月十七日 晴 街がつぶれた 一夫

この句は、故小林一夫氏が平成七年度の、「川柳塔」各地柳壇賞を受賞された句である。

「阪神淡路大震災」平成七年一月十七日午前五時四十六分。

あれから十年、新装なった西宮北口の駅に立って、出入りする人々を見つめている。それぞれどんなドラマを背負って、生きてきたのであろうか、走馬灯のように、あの当時のことが思いだされる。

どーん・轟音と共に体が浮いた、電気スタンドが私の頭をかすめていった。なにが起こったのか分らないままに布団をかぶった。夫に声をかけても返事がない。

うす明かりの中で起き上がってみると、夫の上の小袖簞笥が倒れていた。私は無意識の内に簞笥を起こしたのであろう。重かったと今にしてその記憶はない。幸い夫に怪我はなかった。二人で恐る恐る階段(二階が寝室)を下りて茫然とした。置いてある物すべて倒れ、壁に大きな穴が開き、寒々と月が見えていたのが強く印

茴香の花 政岡日枝子選 (90)

「水着」 森村美花選 (94)

一路集「溺れる」 城多喜選 (94)

「水平線」 角野仁清選 (95)

初步教室「線」 三宅保州 (96)

秀句鑑賞「同人吟」 早川棲世 (98)

水煙抄 村上玄也 (100)

■新刊紹介『青空もうひとつ』 木本朱夏 (101)

各地柳壇（佳句地十選／清水絹子） 田中正坊 (102)

柳界展望 楓葉・朱夏 (103)

八月各地句会案内 (117)

■編集後記 (120)

座右の句

八十歳さあこれからが反抗期

私の句

縁の下言いたいことはたとある 福永ひかり

(とみお)

象にのこっている。

これは夢だ、夢が覚めれば元のとおりになるんだと、今思えば信じられないようなことを本当にそう思い、遠い知らないところへ来ているような錯覚におそわれていた。

でも現実には厳しいものであった。家は西宮市の審査により、全壊のレッテルが貼られた。

助かった命だんだん欲が付き いわゑ

この句はふたりとも無事でよかった、あとは何も要らない等と思ったものの、落ちていくと、家も物も失った哀しさからふつと飛び出した句である。

西宮市はこれを機に町の区画整理をもちだした。壊れた町を整理する絶好のチャンスである。運の悪いことに私の家の辺りが道路になることになった。そのため、換地か市にすべてを委ねるかの選択肢をかかえてしまった。

結局、換地などということは長期戦になりかねないからと息子たちの意見もあり、後者の方を選び、現在マンション住まいに至っている。

そして町は、面影もないほど美しく生れ変わったが、生きてきた歴史に痛く刻まれた歳月でもある。幸い私は川柳と、かけがえのない柳友に支えられてきた。これからも、麻生路郎先生の「いのちある句を創れ」をモットーに川柳を続けていきたいと思っている。



河内天笑選

西宮市 西口 いわゑ

すっぱりと切って捨てたいことがある

咲いて散る方法神に与えられ

嬉しさと背中合わせの忙しさ

予定から外れ生き甲斐つかみとる

磨いたらきつと光ると信じてる

毒くすり如何ようにても酒うまし

河内長野市 村上直樹

巢立ちゆくつばめの明日にあこがれる

いい老後カネもなければヒマもない

一行詩添えた便りに託す思慕

観自在はまだはもうとや命の灯

人生という吊り橋をあと数歩

あれこれと妻はやっぱり名コーチ

河内長野市 坂上淳司

大人ぶる青い実揺れる戎橋

背伸びして悪ぶっている十五歳

おやすみとベースメーカーが言っちゃ駄目

スーパールの値と比べるなマイ胡瓜

自家茄子の原価一本ウン百円

自慢料含めて配る自家野菜

羽曳野市 徳山みつこ

ササユリに恋をしましたスニーカー

無反省の威儀が玉串持ちたがり

この国の脱線転覆気にかかり

皮の近くに栄養も真実も

ドリンク剤よりも家族の笑い声

なぜ戦するかと叱る夾竹桃

鳥取市 徳田ひろこ

天秤にかけたくはない薔薇と百合

まだ恋のいろはに惑う花時計

コンサート終りこの世にまた戻る

客去ってからの空気が軽くなる

夕風のひととき過去を忘れたり

夏の章やはり蛙の大合唱

大阪市 西出楓楽

天神祭父母がいませば鱧と蛸

もつたいない 孫に通訳いりますな

昼寝ふと覚めわたり誰こは何処

物おもいほうれん草を茹ですぎる

紫の似合う女にまだなれぬ

ボーカーフェイスしつかり二の矢つがえてる

大阪市 古今堂 蕉子

大阪弁こんぶかつおの味を出す

育てない夢いつまでも夢のまま

許そうと夜明けに思う軽くなる

ばらにとげ私にはキバがあります

デュエット歌う少し肩触れ

孤独やない気楽やねんと母けなげ

鳥取県 新家 完司

お座りと言われたままで定年に

にんげんのことば齋く耳の奥

悪口をフアイルしている耳の奥

褒められて喜ぶ内はまだ甘い

平均寿命以下はもつたいないいのち

人を蹴るための足ではないのだが

吹田市 山本 希久子

八月の郵便受けに波の音

バラ園のバラに饒舌寡黙あり

緑色の絵の具が足りぬ都市砂漠

古稀の絵に少しピンクをあしらおう

たてまえを言う靴音がひびかない

古寺巡る洗いざらしのジープで

羽曳野市 三好 専平

首のない鰻ばかりを食うており

みぎ向くとひだりのことを忘れてる

灰汁ぬけてほとけのような顔になり

棚経もテープとなった過疎の村

月見草休耕田を埋めつくし

チャンバラが好きでたまらぬ男たち

堺市 加島 由一

冷え切った真実よりも温い嘘

星ひかる訳説く君にもの足りず

ジャンボ当てキンキラキンに飾りたい

年金の中から払う受信料

飼い主に似てプライドの高い犬

母にもある男気のようなもの

鳥取市 福西 茶子

一万歩歩いて今日の憂い消す

靖国へ笑って逝った二十歳の灯 (特攻資料館を觀て 5句)

特攻の手記に涙は止めなく

靖国へ行ったホテルも還暦か

出撃に母は万歳など言わぬ

ここから平和は尊いと思う

倉吉市 松本 よしえ

弁解をして面倒になる話

お元氣ですか月が覗いてくれる窓

欲しいものがあるうちが花生きられる

誰よりも君が欲しいと言わせたい

通院のイエローカードまだ続く

産みたての玉子プルスと黄味が跳ね

鳥取県 佐伯 やえ

サフランが忘れ得ぬ人つれてくる

それ食べはよ食べとありがたいこと句やさい

馬齢重ねてもなんだか赤が着てみたい

恋をしてやさしゅうなったごんたくん

不器用が器用を抜いて所長さん

無言の握手男の美学かも知れぬ

佐倉市 岡井 やすお

いざこざは海から 四方海の国

仲良しはお隣よりも遠い国

情報保護会員名簿作らせず

宿題が親に勉強させてくれ

亡き妻の足音したか盆の入り

高齢者五人に一人中に僕

倉吉市 米田 幸子

減反の崇りじわじわ不況風

懐炉より温いハートを差し上げる

ジャジャ馬も今日はしずしず高島田

ばあちゃんは口にラップをして出かけ

大臣も乞食もいずれ土になる

飽食に慣れてみにくい豚になる

茨木市 藤井 正雄

心配は酒に溶かして早寝する

でかい声力不足をカバーする

チューリップ園児が描けば屋根を越す

驚いたふりして孫の話を聞く

美人保母うしろ歩きホイッスル

朝寝坊誰も叱らぬ歳となる

大阪市 川端 一歩

備前の旅薫風庵というお店

お夢二きみ一流のおんな好き

八月は国の歴史を思う月

拗ねたとて味方はいない小家族

読書する訳ではないが雨が好き

信号待ちちよつと離れた樹の陰で

和歌山市 古久保 和子

ミシン目を外れ動揺する切手

五線譜から転がり落ちた父の歌

風向きを変えるジョークが空振りに

真剣に描く子描かぬ子写生会

衣更え街もいつきに軽やかに

夕焼けがきれいとかタイで知らず

神戸市 木村 貴代子

芦屋市 黒田 能子

三食をおいしく食べるまだいける
ものさしを換えて格差をのりこえる

予定表なぜか重なるいい誘い

一仕事一休みでの予定組む

悩む子を見捨てた罪が世に還る

神戸市 山口 光久

腕組んだ師の温もりが常に在り

渾身の力で夢に立ち向かう

何時までも燃え続けたい自分色

人柄を買われた方にお金

貧乏と仲良くできた子に感謝

神戸市 山口 美穂

五月雨を欲しいと紫陽花うなだれる

色づいてトマト所在を主張する

閑中忙疲れを明日へ持つて寝る

よう働いた証 年金ありがたく

同窓会若さ加減を見比べる

相生市 中塚 礎石

骨拾うお箸がなんとなく重い

出世とは何ぞや今もボランテニア

手術してメガネ無しでも小皺見え

人間の愚がごろごろと落ちている

ゆつくりと沈む夕陽のタイムとる

思い切り汗を流した日の眠り

説教は短い方がいいようだ

結んだり解いたり絆くたびれる

逆風に遇うとかえって出る力

ちよつとした段差の方が恐ろしい

尼崎市 春城 年代

多情多恨そのうち月はかくれたまま

腕のしびれがほんものになるおそろしさ

クラス会久方ぶりのマニキュア

日永かなど忘れをする日本語

揺れるもの目ざとく子猫じゃれている

尼崎市 春城 武庫坊

海からの風を両手で受け止める

走つたら間に合ったのはもう昔

八十五歳の青春集う同窓会

生きている証がつまるゴミ袋

昼の月行き先忘れ姿消す

尼崎市 田辺 鹿太

呑みすぎの欠伸がうつる朝の駅

罪深い音だビールのコマーシャル

ご好意に甘えて使う無料パス

のはほんと生きてしまった悔いがある

抜群の記憶で妻に責められる

尼崎市 長浜美籠

納得がいかず揺れてるティーカップ
純真な声コロコロと一輪車
酸欠の街で泣いたり笑ったり
生きている実感ときに来る胃痛
いい感じなんて人形に背を押され

尼崎市 林 昭三

近頃は鬼より恐い人が増え
どこでどう津波国際語となつて
ニート君若年寄にならぬこと
無差別でなく狙つて下着泥
チケツトが丁度二枚と誘われる

伊丹市 山崎君子

朝ぐもをそつと逃がしてひとり言
カレンダーぎつしりうめる老いも春
あじさいのむらさき今日の顔をする
今日もまた汗拭きながら花の守り
サッカー戦選手と共に君が代を

川西市 西内朋月

一面のれんげ畑に蜂が舞う
羽衣が舞い降りそうな松並木
独り居はパントマイムをして暮らし
買わされた塩漬けの株持つている
百均の傘を買つてにわか雨

川西市 米原雪子

梅雨晴れ間 緑仰いで深呼吸
新緑に弾んでいるよ万歩計
繰り返すゴール瞬間観るテレビ
交流戦 相手選手の美技を観る
内科外科眼科脳外科受診増え

三田市 久保田千代

やさしさが心の扉開かせる
暑い日は手抜き一番冷奴
一瞬の喉ごしに見る暑氣払い
スピードを語る電柱折れた事故
寄せ書きのハガキに一句自己主張

三田市 北野哲男

フーと息吐いて一杯目のビール
寄付という一すじの糸故郷から
人は森カラスは街にあこがれる
趣味拡張道具ストレスばかり溜め
母を看る相談に出た遺産分け

西宮市 門谷たず子

おばあちゃんも何を着ようか結納日
ちよつといい旅テレビが写すわが故郷
完熟のトマトひとりの夏を愛で
亡夫と見た景色に今日は波が立つ
渡す人なき合鍵が重くなる

西宮市 山本義子

ひとつふたつりボン結んだ嘘がある

風もきつと言葉もつて花はらり

砂時計わたしは粒の一つかも

氏素姓の正しいたまご木箱入り

シンデレラ今は可愛いおばあさん

西宮市 秋元てる

無事定年フットライトに縁ないが

病歴の高さが自慢兄卒寿

心配りに勝る妹先に嫁き

おかたは忘れて居たが故郷の唄

行く当ての無い背を並べ日向ぼこ

西宮市 亀岡哲子

バラソルの風にふわふわ浮く散歩

苗はむらさき茄子は長いかまあるいか

ピアノの音聞いて窓辺のバラ育つ

築九年次々花が咲いている

沢蟹が恋をしました茜雲

西宮市 坪井孝一

卑怯にもすぐ寄りたがる大きな樹

人生にせせらぎあれば淵もある

地球儀の深部に潜む人のエゴ

個性ある人と言われる頑固者

口下手と判つてもらう永い年

西宮市 緒方美津子

けんかはすまい二本残った歯刷牙子よ

おしゃべりのおまけ嬉しい乾物屋

ほなちよつとそれから話ながくなり

トップより以下同文の生き上手

ジーンズの穴ふさぎたくなるわたし

西宮市 井上松煙

事故予見できぬトップのあぐらかく

風下でトップを追っているゆとり

とんび舞い忙しそうな下界見る

戦犯は死んでもさらに苦しめる

風船の舞いに酔うてるトラ仲間

姫路市 古川奮水

花ことば笑顔で活ける誕生日

実習生ティッシュを添えてピラ配る

通勤車足踏まれても生きている

梅雨空へゆつくり登る観覧車

義太夫に招かれ隅で舟を漕ぐ

兵庫県 大谷幸次郎

一枚の舌ではつきりノーと言う

取りどりに咲いて道草誘う花

内視鏡限なく探る腸の壁

朝ごはん碗豆飯のいい香り

ビタミンを摂れと重たい足が言う

奈良市 米田恭昌

ぬくもりを仏に貰う数珠をくる

省エネのクールビズにもあるおしやれ

姿見にギョッ僕というご老人

紫陽花の梅雨を彩る三室戸寺(歩こう会宇治 2句)

藤原の栄華を偲ぶ平等院

奈良市 天正千梢

一人旅足のむくまま ちぎれ雲

物忘れ今日は茗荷を食べました

奈良の絵だやっぱ隅に鹿が居る

笑い袋で一隅を照らしてる

ちち母のねむる所や本願寺

奈良県 渡辺富子

あじさい寺逢う約束と雨に濡れ

うす味のドラマで満ちる妻という

退屈な時計進める友が来る

反論がワンテンポ置き攻めてくる

老いふたり会話もゆるりクールビズ

生駒市 飛永ふりこ

たかが風邪されど音域バスになり

パンダ君なわ飛び一緒にかがです

誉められてうれし恥ずかしこそばゆい

万博の轟く熱気酔わされる

真夜中にピエロの涙人知れず

橿原市 安土理恵

厚い胸よりも静かな背をおもう

頼り切る背中縮んできたような

毛筆の封筒一瞬身がまえる

切れ味を試されているプチトマト

あと戻りできない橋に立ちすくむ

橿原市 居谷真理子

教えてはくれぬ人から学ぶこと

ころころと難儀を避けるダンゴ虫

豚児しか遺せなかつた独裁者

平穏な夫婦の庭に黒揚羽

ご自分に酔えるあなたは下戸でいい

和歌山市 福本英子

城壁の白さ落書き待っている

たとえばの話着色多すぎる

癒やされに行く旅先で孫の守り

恍惚の近くに住んでいる不安

見回せば年下ばかり通夜の席

和歌山市 桜井千秀

どの部屋も片付いたまま一人住む

茶さじ一杯ほどでよろしい褒め言葉

ゆすらうめ熟れて窓辺にくる小鳥

真夏日を避けて藪蚊に攻められる

右脳左脳に喝入れたくて百度石

和歌山市 田 中 み ね

幸せの原点だろう医者知らず

ふつくと婚家に馴染む姫だるま

役者交代どこの世界も言える事

才媛へ書くお便りが畏まる

試着室で三段腹へ八つ当たり

和歌山市 牛 尾 緑 良

シナリオがここから変わる父の死後

正論はもう私を庇わない

一徹を少し崩してゆく老後

変身をした気にさせるペンネーム

伝説は消えた巨人軍の不滅

和歌山市 松 原 寿 子

遠き日の夢が弾けて揺れ動く

いじめとは思わないから受け流す

追伸の指が哭いてる雨の午後

叩かれても黙す女の意地がある

分岐点すでに方向決めている

和歌山市 木 本 朱 夏

流れ星あれは恩師の片便り(薫風先生を偲ぶ)

はんなりと大阪弁の匂いたつ

初盆の君へレモンの匂うなり

面影に花橘の芳しき

たてがみを靡かせ君は蒼穹へ

和歌山市 玉 置 当 代

風薫る季節師は逝き給うなり

運を天に任せて丸木橋渡る

幸運を祈る娘たち渡米

説法を素直に聴けるようになり

三食をしつかり食べて痩せてはる

和歌山市 上 地 登 美 代

さんすうに弱いがジュゲム丸暗記

孫の名が思考回路で纏れだす

肩たたき一〇〇回券のプレゼント

モッタイナイ風が世界へ翔けて行く

あなたには匙投げました畑の草

和歌山市 榎 原 公 子

風座るベンチへお相伴をする

あじさいが揺れ省る身嗜み

才能の一つぐらいは信じたい

引力に素直になった日のトホホ

娘の苦勞思う一歳二歳半

和歌山市 木 村 初 子

転がって遊んだ浜辺月見草

淋しさへ月がやさしく窓のぞく

感謝して生きよう今日の幸せを

さわやかな大空仰ぐ車椅子

人生は喜怒哀楽の夢芝居

和歌山市 堀畑靖子

海南市 三宅保州

情報の波かきわけてかきわけて
言うじゃないけれども今は言わせとく
節約の裏技会得いたさねば
まだ御呼びかかる日があるコンバクト
助手席でスピードチェックする私

和歌山市 楠見章子

海南市 堂上泰女

ケータイが鳴ったら起きてくる少女
ヤジロベエのかたちに孫がいてくれる
図体の割に小さな肝っ玉
長男のひと癖しかと但し書き
窓全開運も黄砂も寄つといで

和歌山市 山口三千子

鳥取市 土橋はるお

詐術してまだ反論をする怖さ
悪夢から心によろいつけたまま
身辺整理するのが恐いまだ未練
母の日に血圧計を息子から
裏庭のビワの初なり数をよむ

和歌山市 松尾和香

鳥取市 岸本宏章

神様がくれた一生試される
泣き笑い一生巡る夫婦道
雑草の根引きに負ける力瘤
幾星霜人間癒す樹の命
わくわくとポストを開ける定期便

私をさらけ出したら盛り上がる
うまくいけば散らせますがと言う主治医
振り逃げという冒険に賭けてみる
着メロはあなたと同じ曲にする
潮騒が聞こえるような握り寿司

歌い踊って心はいつも五月晴れ
大声で笑って福を招いてる
条件反射の腕はゲームで磨いてる
パソコンで夢探してる午前二時
鶯の千里の声に癒される

溪流の一本橋にある息吹き
花束を貰えるような努力せず
誇らしく新札出して買う女
ろくでなしの割りに面倒見はいいな
露払いばかりしぶしぶさせられた

失敗も思い出となる旅の恥
点数が付くと挑戦したくなる
雑魚もいいこっそり行けるとこがある
日曜日ねじは緩めに巻いておく
核ゼロの六十年は無駄でなし

鳥取市 岸 本 孝 子

苦勞性 人の分まで苦を背負い
簇する孫が告げ口して困る
香水がほのかに匂う妻でいる
ダイエット楽天家には荷が重い
下手な字の便り何度も読み返す

鳥取市 近 藤 佳 子

知恵の輪を解く挑戦はつづけてる
好きなこととして長生きをしています
母のこと想うと母の声がつる
影法師も一緒に知恵を絞ってる
化粧品揃えて老いをちよつと止め

鳥取市 国 森 武 子

一人いてあれこれ思う初夏うらら
子も孫も皆それぞれに家を出る
私にはもう二度とない此のくらし
いつてくるー それぞれ走り家を出る
上向いてああい天気何しよう

鳥取市 中 村 金 祥

還暦を迎えた平和かみしめる
ちぐはぐな夫婦どちらも耐えている
常備薬あつて安心して眠る
失札を詫びて遺跡を掘り返す
菜園の中で人間取戻す

鳥取市 植 田 一 京

南風にうっかり仮面はずされる
ばあちゃんの話昔へまた戻り
手加減が簡単そうで難しい
きっぱりと別れ未練もまた残り
退屈な日はコンビニを見て歩く

鳥取市 録 沢 風 花

平和には遠い路線をゆく不安
深緑の候胸痛む記事ばかり
父母逝つて里の絆も細くなる
景品の口紅魔女のようになる
生きてゆく意欲笑えば湧いてくる

鳥取市 倉 益 一 瑤

一匹の蠅を叩いてけりが付き
脳にかび生えたか知恵が出て来ない
正解が出ぬまま父は星になり
ちぐはぐな夫婦で喜劇まだ続く
魔女の一撃若い気分をへし折られ

鳥取市 乾 喜与志

老齢の頭脳やつぱり軽くなり
軽いほど頭は天に近くなる
入浴に外した時計かくれんぼ
夕食のお膳に妻の手が伸びた
散髪に行けば居眠りありがたや

鳥取市 平尾 菜美

終着の駅で待つてる親父越え
厚い壁破り息子が出城する
大殺界死んだ振りして切り抜ける
緊張がとけてゆらゆら脱ぐ甲
まろやかな月に心を奪われる

鳥取市 春木 圭一郎

懸命に生きる姿にある魅力
ぐうたらに時にはなつて息を抜く
逃げ出さず手を差し伸べる強さ持つ
荒っぽい言葉やさしさ底流れ
なりたいたな強く格好いい男

鳥取市 土橋 睦子

手作りの蕎麦でもてなす盆の月
炎を抱いて黄色のバラを買う女
一粒が万倍になり秋実る
名産のそばと脚湯で町が富む
人生も遊びも母の背で学ぶ

鳥取市 有沢 せつ子

登校の列カルガモに似て可愛い
褒め言葉ビタミンにして子が伸びる
洋風の食器がいつか増えている
叩かずにハエを追いつく白い壁
セバ交流野球を五倍樂します

鳥取市 西川 和子

答弁の軽い言葉が舞い上がる
軽い口重たい風を呼んでいる
老いの坂下る時計の早送り
ふたありの時計微妙な時間の差
蟬時雨木洩れ日浴びて墓洗う

鳥取市 上田 俊路

春雨も濡れてはゆけぬ酸性雨
握手した十指覚えていた誓い
ゴーと出た占いだけで老い疎む
春風に浮かれうっかり手を握る
言いたいのがこは黙って金になる

鳥取市 林 露杖

鉄線の鋭い花弁潔い
紫陽花の毬未だ固く梅雨に入る
牡丹咲くこの家も嫗独り住む
危惧つる烏蛙の声が無い
止まらない出生率と温暖化

鳥取市 杉本 孝男

恥と汗かいて惚けなどつゆ知らず
風びたり止めて見事な逆さ富士
風向きに人は泣いたり笑ったり
監督が吠えろと勝ちが見えてくる
雨男来たとみんなにからかわれ

鳥取市 美田旋風

鳥取市 森川あらた

雰囲気が違うしばらく貝になる
肩書きが重荷になった人もいる
生真面目で仮面ひとつも持たぬ友
捨てないでどうか庭の母子草
使うことはないもつたないがゴミに出す

鳥取市 吉田弘子

砂丘ラッキョウ鳥取の香を届けます

応援席黄色い声が交差する

倉吉市 山本玲子

談合の指定席です天下り

日中の靖国観へ度が合わぬ

電話よりファックスが好き物忘れ

たっぷりのビタミン吸った中性脂肪

鳥取市 福田登美

磨きたいどうにもならぬ石なのに

無器用も笑えば少し軽い肩

幸せの振りにも影にある涙

淋しさを知られたくない鰯雲

老いて子に歩幅を合わす日々孤独

鳥取市 永原昌鼓

極楽は孫の昼寝にご相伴

コンビニへ夜は眠れぬ人が寄る

ちぐはぐな船頭国が蛇行する

胸つき八丁凌いだ汗は美しい

じわじわと地球オンボロ化が進む

スリッパを四季にあわせて履き替える
気の毒だわたしを好きになるなんて
我慢などせずに翼を広げよう

束縛をするな反抗したくなる
溜め息をつくほど悩み事はない

リフォームでやれやれ陽の目みた着物
タイムサーピスわたしを待っていたようだ
体内時計狂いだしたら認知症
鍵あけて軽い溜め息ひとり者

倉吉市 最上和枝

面倒な渦なら横に身を躲す

面倒な手料理味はもう一つ

花々を妖しく渡る紋黄蝶

エンジンを切ってやれやれ戦終え

結んだ手滑った口に崩される

米子市 政岡日枝子

独りに馴れてこのおおらかな大あくび

もう峯を越えたか亡母のいい笑顔

空白があつた母にも謎がある

見えすぎる眼鏡はかけぬことにした

握手する手に何もかもしゃべらせる

米子市 青 戸 田 鶴

一生を賭けても何も残らない
他人すぐ信じてしまっておばあさん
どの路地の名前も記録しておこう
私を支えてくれる母の声
夕暮の影はことさら頼りない

米子市 林 瑞 枝

赤トンボ丸い眸をして彼を待つ
鳴き砂の浜会食に虹が立ち
親戚より篤き故郷という他人
ふた股大根に今年をかけている
おびただしい太陽を抱く草の露

米子市 澤 田 千 春

人生のツボを知るためながくのた
もう少し待てば発酵するだろう
荒海に止り木さがす渡り鳥
野の花は誰にも負けぬ花をつけ
ジーパンの洗いざらしもファッションか

米子市 白 根 ふ み

無観客それでも勝った美酒に酔う
仏さま神さま大黒さまさま
骨肉の争い金がありすぎる
むずかしい話にメガネ曇りだす
ペランダで航空ショーを目のあたり

米子市 中 井 ゆ き

ボウボウと風泣きながら人さらう
タンポポも大人になってとび出した
花達に後押しされて誕生日
黒揚羽あんな本当にあの毛虫
ナイターの虎に老女の応援歌

鳥取県 谷 口 次 男

惚れちゃって麻薬のような声になる
冷やかな視線に遭ったクールビズ
終戦日忘れないよう蛍飛ぶ
蹴られても平和信じているボール
憲法が崩しちやダメと首を振る

鳥取県 蔵 本 悦 子

告げ口をされても愛は崩れない
温暖化地球の脈が早くなる
休耕の土がサラサラしてござる
魂が黒煙り吐くまで生きる
神だつてとつさに答え出て来ない

鳥取県 山 本 正 光

耳垢を落してくれたい話
仕合わせな家族と思う丸く住む
彩ひとつ捨てて老人らしく生き
靖国へ神経とがすことでない
掌を合わす解脱の域は遠くとも

鳥取県 竹 信 照 彦

栗の花むんむん汗をやたら拭く
水道の水をちびちび茄子きゅうり
イベントは晴れがよし田は雨がよし
枇杷の実が熟れて蜚を捕りに行く
合併町サービス低下思い知る

鳥取県 下 田 茂 登 子

年金の暮しに茶茶を入れに来る
頑固さの抜けない石が庭に座す
病院へ行く時福祉バスに乗る
晴天が続き農婦に休み来ぬ
下り坂他人の心が読めてきた

鳥取県 山 下 節 子

顔色が変わった図星だったらし
初物は東を向いてワッハッハ
地下足袋の踵しつかり土を踏む
食べることを忘れぬうちはまだ元氣
大法螺を吹いて内心ふるえてる

鳥取県 石 谷 美 恵 子

コンビニのおかず飽きたと胃がぐずる
さんざんに困らせた子が看てくれる
ウィルスがゆらゆら人を選っている
反省のポーズ夕日に背を向けて
夕風ぎに祈る明日の大漁旗

鳥取県 澤 裕 子

面倒な写真の整理すぐにやる
ちぐはぐな心からだ持て余す
全身を支えてくれている踵
飽食のつけに泣く日がきつとくる
蟻の列方角迷うことはない

松江市 銭 山 昌 枝

皺の無い顔ねと言われほくそ笑む
行き詰まる夢ばかり見る怠け癖
二世代のB型家族奔放で
節約の夫散財するわたし
呆けない中にパソコン教室へ通う

松江市 三 島 淞 丘

新緑の森に五感が活気づく
茶畑の姉さん被り夕日さす
母は笛父は太鼓で明け暮れる
おもちゃ広げて僕の縄張り出来上がり
途中下車しては気ままなひとり旅

松江市 津 川 紫 晃

進化した街に緑の風がない
本心をみごとくるんだオブラート
丸くなる話を聞いている湯呑み
汗の手で掬うと水も甘くなる
妻よ手を離すな坂はまだ続く

出雲市 吉岡 きみえ

出雲市 森 茂美

しあわせと思えばごはんまで美味い
母元氣大根煮しめしています
生玉子のんで今日を生きぬこう
泣きごとをかす枕を裏返す
無為無策日記の余白多くなる

出雲市 城 多喜

お陽様の好きな順からトマト熱れ
ポケットからばろり落したそんな恋
わたくしが歩き通した道がある
無器用なわたしの指の太いこと
踏まないで下さい影が泣きます

出雲市 小玉 満江

まだ出来る屈伸体操一二三
帰国して日本の米に舌つづみ
眠れぬ夜外は蛙の二部合唱
年寄りがしんみり恋の唄うたう
ほめ言葉貰って元氣出す私

出雲市 小白金 房子

野いちごの匂い摘みとる甘い風
堀川を縫うて遊覧初夏を見る
二階から長い返事がおいてくる
鬼よりも一匹恐い山の神
水滴々植田を渡るみどり風

磯の香を腹いっぱい旅をゆく
山鴉啼く地球は飢えている
セロテープ貼った辞典が前にある
一握りの米を研いでる私です
捨て石に甘んじ戦死した従兄弟

出雲市 多々納 テル子

輪の中で一歩引きつつ丸くする
合併に幾通りもの訛り聞く
気取らずに流れのままに生きている
玉砂利へ神を呼び出し鈴を振る
歳なのに流行の服を追っている

出雲市 岸 桂子

雑踏の都市に無言の人溢れ
古里はいいな皆が声くれる
なるようになって流れて行く川だ
掃除機が生活の疲れ見せ始め
名前には親の思いが込めてある

出雲市 多久和 敬子

すき間から覗いた福を招き寄せ
孫の守り孫と一緒におやつ食べ
バーゲンが私の財布狙ってる
行列の真ん中辺でいらいます
横文字の花の名前ですぐ忘れ

出雲市 佐藤 治代

絵手紙が笑って届く初夏の候
踊りたい相手が欲しい赤い靴
弾力の失せた裸体をさらす旅
好天気続いて遊び癖がつく
百万円貯めてハワイへ行くつもり

出雲市 青山 久子

シャボン玉割れずに飛んでいてほしい
嫁の愚痴聞いてやるのもボランティア
ふっくらの布団の下に針むしろ
のり越えた壁の向こうに壁がある
うっし世の垢が鱗になっていた

出雲市 伊藤 玲子

水馬みづうまになって五月の陽とボート
涙壺からにしてから跳んでみる
胃薬を同伴にしてはグルメ旅
朝日浴びる百二十五歳の工場
うきうきに雨が伴奏してくれる

雲南市 毛利 幸

水平線私の未来呼び寄せる
口喧嘩飛ばした泡が降りかかる
山々の緑に酔って深呼吸
少子化で淋しく泳ぐこいのぼり
世が変わり田植え囃子が風化する

岡山市 井上 柳五郎

ハルピンから引揚げ五十余年生き
缶ビールひとつで酔うた手術あと
インターホン老いの留守番とまどわせ
医者頼み無駄だよ老化なおせない
また法螺を吹いているなと聞いてやり

倉敷市 小野 克枝

御一行様の一人でつつがなし
止まる樹が無くて団地を去るトンボ
騒がれているから微笑忘れない
無事帰還告げる運転一年生
鬼の居ぬ間の約束へ鬼戻り

倉敷市 井上 富子

罪穢れ洗う司法の洗濯機
困る度に膨らんできた知恵袋
サングラスの奥で野獣の眼が光る
宮仕え終えて気楽な男下駄
デリカシーの欠片拾って来た茶会

倉敷市 撰 喜子

森の中高速道が突っ走る
ばらの棘抜き従順な妻になる
努力する親の背を見ず夢を見る
セピア色の涙の跡の古日記
飲食税しっかり払った皮下脂肪

真庭市 国米 きくゑ

全力の汗さわやかな風を呼ぶ
待望の雨新緑の輝やける
嬉しい時悲しい時も箸運ぶ
幸せなペンが運んでくる笑い
これからを刻む新市の花時計

真庭市 福嶋 智恵子

炎暑くる敗戦の日が甦る
時季ならぬ暑い六月身に堪え
助け合う日々で何時しか老い二人
四季の花あばら家守るように咲く
生涯を揉まれ小突かれ丸うなる

美作市 小林 妻子

フルムーン父は知らないまま逝った
政治家の逃げ場に鯉の池がある
ふる里はまだ谷水を呑んでいる
眼裏にひまわりが咲き原爆忌
夏草とのいくさになる草刈機

美作市 山本 玉恵

欲望と重なり合わず銭の音
河童の皿乾き生き抜くむずかしさ
梅干しも姑ののこした手順にて
神話一つ崇めて二礼二拍の祈り
淋しさは言わぬ女の細い眉

美作市 大石 あすなろ

ふところに風も嵐も抱いている
新緑のシャワーを浴びて湧く元氣
塀越しにいつか芽生えた恋心
メカ音痴すっかり孫にリードされ
叱るより誉めると湧いてくるフアイト

竹原市 岩本 笑子

犯人は風です洗たく物が
桜貝打ち寄せられて思うこと
五丁目のタンポポ今日も咲いている
草笛よ草の根っこよ夏が来る
父の日へ娘から十枚の宝くじ

竹原市 石原 淑子

世界の瞳集めて裁く拉致被害
大きめのサングラス美人のつもり
泣き虫を脱皮笑いの虫になる
倅のサイコロ妻が振っている
疲れのバロメーター瞳の下にある

竹原市 時 広 一路

平均を越し生命線が気にならぬ
電気釜六食分を炊きひとり
朝市もちよつと覗いていま一人
入院の妻に料理の仕方聞く
ロボットの手より私の手が凄い

宇部市 平田実男

亀岡市 井上森生

肩書きが増えて自分を見失う
日本に生まれてよかった握り飯
ルイヴィトンより風呂敷が重宝し
野菜より先ず土づくり土づくり
金婚へあと三年だなあ おまえ

美祿市 安平次弘道

文明の遺産に殺意などはない
洞穴にかくれてたのは仏様
漕ぎ出しては見たが気になる負の遺産
渚走る海の香りが吸いたくて
不滅にはあらず詩集も肉体も

京都市 都倉求芽

スピードという魔性がのさばってきたこの世
世間相手に優等生がおこす乱
血管を洗う青葉の岩清水
ライトアップ花も時間外労働
義経が勇に負けてる京の町

京都市 高島啓子

昔から知ってる人とうどん定
透明な皿ストレスを溜めている
警告のやたらに多い説明書
印籠が見えぬか女性専用車
南瓜の花幼なじみは散りぢりに

意欲十分レッサーパンダの仁王立ち
靴を買うまだ何足も履くつもり
ひとり行く新緑浴と洒落こんで
千年の彩香伝える杜若(洛北 太田神社)
魂が光の道を飛び交うか(光ヶ浦ル加人)

可児市 板山まみ子

庭木のび梅雨入りと知る湿り風
青竹のさやさやと鳴り梅雨の入り
いつのまに消えてしまった夢いくつ
サッカーのルールも知らずただ拍手
到来の新茶一服ああ日本

富山県 島ひかる

新盆へことさら花を選っている
誘われた古都へも行けぬままの恋
父性愛 父を亡くしてから思う
願わくは地獄の釜の休む日に
ささやかな夕餉食前酒に満ちる

横浜市 小野句多留

参拝を二つに割ったマスメディア
ついにくた自宅の電話言えない日
ロボットに肘鉄食らう地球博
イベントに待つ食う歩くそは女
幼児等と昔に還る潮干狩り

横浜市 菊地政勝

せせらぎに無限の音符奏でられ
胸襟を開いてとけたわだかまり
貸す本へ忘れな草のしおり入れ
ひとつずつ母も私も老い進む
本人が拘りを持つ祝辞順

東京都 岸野あやめ

叫ぶより重く鎮もる八月忌
香奠の袋に義理も包んどく
生き延びて今日は八月十五日
家訓です目立たぬことが良いことだ
人の世は一足す一が二じゃないよ

東京都 清原悦子

蟬の殻登りたそんな足の向き
約束はひとつと決めている小指
薄切りのレモンやつぱりほろ苦い
真っ直ぐに歩いた地図がぼろぼろに
足跡を汚さないよう行く余生

東京都 小川賀世子

みちのくに都会の渴き置いて来る
紫陽花が開く少女に似た青で
気合だあ自分でお尻叩く日も
青いのは私かも子の持論聞く
阪神がいいぞ東京からエール

八王子市 播本充子

雨あめ降れふれ和傘に見とれてる
走り梅雨美空ひばりを聴いている
二転三転 天ぶらを食べに行く
贈呈謹呈ノーサンキューもある
変つてる人だとお互いに思う

日高市 根岸方子

ノーと言ひ友情ひとつ失せる音
思い切り泣いて昨日と離別する
個人差を大事にしてる遅れ咲き
カルチャーの出会い歩幅の伸び縮み
体力が友情さえも踏みにじる

さいたま市 星野育子

貸したなら金 本カサは戻らない
昼下りシニアが占める映画館
クールビズのようにはいかぬ民営化
平成も産めよ増やせよくり返す
無人駅乗り降りの人みな無口

弘前市 櫻庭順風

転校は中卒までに十回で
転校に一度もぐれぬしたたかさ
わくわくすたかが予科練入隊で
高熱に呻吟し水枕飲む
予科練が消耗品になりそこね

弘前市 高瀬 霜 石

健康万歳毎日お酒飲んでます

とりあえず無駄を詰めこむ冷蔵庫

ジョーカーはいつでも妻が持っている

居酒屋にちやちなブライド落ちている

いちにちに十回は言うありがとう

弘前市 今 愁 女

胡瓜花はやいとけない実を孕み

梅雨晴れ間つりがね草が蜂を吐く

シャツ姿最高庁のクールビズ

父の日のネクタイ売れぬ言う業者

殿方のおしゃれが判るクールビズ

弘前市 宮 崎 ヒサ子

沈む夕陽昔のまんま同じ色

手の届くちっちゃな夢を追っている

飽きもせず昔話の糸を繕る

どうしよう会ってる人の名が出ない

田植え済んだか郭公しじま冴え渡る

弘前市 福 士 慕 情

懐かしや一年振りに逢った河

朝靄に包まれて気を引き締める

ここ数年お目にかかつていない鱒

きたきたきた緊張はしる鱒の引き

落着けと言ひ聞かせてるルアー竿

弘前市 高橋 岳 水

転ぶのを笑って見てる第三者

災害の多さへ軽いのちだな

上司にも天敵が居て面白し

電飾の街に憩いの色がない

哀愁を揺らし終電車が止まる

黒石市 相馬 一 花

大笑いすればストレス霧散する

番犬を飼わず夫で間に合わせ

号令に気をつけをする認知症

男性に狙い定める化粧品

専用車できて痴漢が暇になる

砂川市 大橋 政 良

履歴書に悲喜こもごもの目があった

バイブルを無心にめくる風の爪

その先の先まで読んだ枯れた脳

マネキンが夏を着ている遅い春

古いメモ金釘流の亡父がいる

高知市 小 川 てるみ

南欧のムード漂う子の新居(横浜にて 2句)

ディズニーへ孫のお供で若返る

万緑の森へストレス捨てて行く

声かけて心配性を叱られる

喧嘩する元氣を子から笑われる

高知県 赤川 菊野

松山市 古手川 光

横綱の美学寡黙と言う一字

鉢植にされて野草がヘソをまげ

伝統も時の流れに押しやられ

見てほしいだから見るなと書いておく

悠久のロマンを秘めて眠る雪（天山山脈）

高知県 小澤 幸泉

君知るや九条の傘平和な日

葬列の中に私は生きている

終章を書き継ぎ今日も暮れてゆく

赦し合う夫婦になつて枯れてゆく

悲しみも涸れて独りの米を研ぐ

松山市 宮尾 みのり

明かり消してごらんこんな星月夜

イルミネーション資源は限りあるものを

親ばなれ子ばなれ出来ず淀みだす

ちよっぴりの利子は飴玉すら買えぬ

前景気泡消えるようジャイアンツ

松山市 高橋 宏臣

朗報は寝て待てなんて何を言う

人間の不信を笑う鍵の束

今日もまた私のために日は昇る

マナーなど知らぬ男が抱く孤独

酔った振り下戸は下戸なり敵の中

夏バテに苦瓜うなぎ山の芋

目的は金ではないと儲けてる

棺桶のボクをみんなが覗き込む

大国を北朝鮮がてこずらせ

電話の声とお目にかかった日の落差

大洲市 中居 善信

古希が来る腹が立つから大丈夫

食べるのを止めた小骨のある魚

ジョギングへとつても軽いスニーカー

採算は合わぬ田植えをして五月

ナスきゅうり植えているから食べられる

東かがわ市 神保 坊太郎

あの世への飛脚たのむぞホトトギス

若い時からそうでした夜行性

ホイホイと気軽く渡る橋でない

相槌を打って抜き差しならぬ羽目

停年に鎖を持った妻が居り

東かがわ市 原 賢

最高の見せ場創つて幕がおり

口下手がメールを武器にして生きる

正論が義理人情に動かされ

朝の駅闘う貌が走り込む

竹槍の姿忘れた改憲論

東かがわ市 川崎 ひかり

ソーマンの束がほどけず湯がたぎる
曲芸の象の哀しい目に出会ふ

福祉バスはあちやんばかり乗っている

寝そびれてトイレばかりが近くなる

笑い禁止私ただ今バック中

東かがわ市 伊勢 八重子

正直な心がポロリ口に出る

妻の勘じんわり急所突いてくる

真心と笑顔でピンチ切り抜ける

麦秋にさぬきうどんが透けて見え

好きな百合咲いて母の忌また巡り

東かがわ市 池内 かおり

ゆつたりと馬籠妻籠の小半日

オッハーと童は駆ける風の中

三人目産まれてくれてありがとう

妹のおこわは旨い母譲り

体重が少し減ってる風呂上がり

東かがわ市 成重 放任

開発にふるりの道迷いおり

法要の席に故人の影が見え

お住職座って巧みに衣着け

歩道橋助け合ってる老い二人

長話今さら名前聞かれな

東かがわ市 清川 玲子

古くても写せるカメラ旅の友

おたまじゃくしに命の神秘教えられ

巻舌のセリに市場が活気づく

腹巻に全財産を詰めて旅

音痴にもみんな手拍子してくれる

唐津市 久保 正 剣

コミカルなリズムに疎いふくらはぎ

咳込んで静けさを知る孤独老

肉積んだ幌馬車日本へ出荷待ち

バイトとは思えぬ巫女の神楽舞い

ロボットの頭にはない匙加減

唐津市 市丸 晴 翠

理不尽に親子引裂く離婚劇

生きている証に疼く膝愛し

ねじ緩み甲斐のない愚痴垂れ流す

自転車が頑張ってます原油高

階段の下りが辛い茜雲

唐津市 山口 高明

搾取にも公約破棄にも蜂起せず

もひとりの自分見つける旅に出る

妻と娘が握る我が家の操縦桿

噴煙の島に槌音蘇る

確信も三度訊かれりや揺らぎ出す

熊本県 高野 宵草

老齡化困った中に僕も居る
長生きしなくていい耳近くなれ
生いたちの色が滲んだ癖を持ち
愛情は葉の色に出る和盆栽
折紙がつくと貴重種減り急ぐ

熊本県 岩切 康子

去年から決めてる旅を夫知らず
ゆつくりと疲れぬほどの日の暮し
一寸高い思いつつ買うお付合い
髪染めて元氣ふるまうクラス会
懐しい街並み多い絵画展

大阪市 前 たもつ

ふるさとを守る友から夏便り
勿体無い世界に誇るよい言葉
風呂そうじ誉められ今日も念を入れ
うかつにも感謝忘れる毎食事
菊人形ここにも悩み後継者

大阪市 神夏磯 典子

てんとう虫可愛い背中誰のもの
追い抜かれ嬉しい親と子のつばめ
樟脳と離れたい日もある女紋
高級なホテル安定剤で寝る
西瓜切るみんなやさしい顔になる

大阪市 板東 倫子

母の日に花束だけがやって来た
究極の贅山盛りの桜桃
キレ易い男に欲しいATS
北鮮の脅しはまるで猫じゃらし
靖国の神が日本の明日憂う

大阪市 津守 柳伸

オクターブ上がるトーンの宿浴衣
アイメイク何があっても泣けないぞ
当然のこととも言わねば判らない
限られた枠でエンジョイする寿命
おふくろの味マンネリで恙無し

大阪市 津守 なぎさ

変りばえしないエステへ通い出す
ウォーキング迂回したのに吠えられる
花に水一日なまけわびている
子の所作が母に似てきて見とれてる
応援に目立ちたがりの父がいる

大阪市 本間 満津子

ごろ寝良し蘭草の匂う青畳
喧嘩相手が優しくなつてつまらない
奥さんがひかって旦那の影うすい
遠いので風のたよりも聞こえない
たより来ず出さずどちらも達者なり

大阪市 津村 志華子

嵯峨野路でさやさや竹の詩を聴く

ご祈禱の神に授かる長寿箸

速効の暗示にかかる注射針

食欲にうっかりしてた血糖値

饌米の豊作願う紅だすき(住吉神社御田植祭)

大阪市 小糸 昭子

良心が凄い音立て崩れる日

盲導犬白い杖早く放したい

人形じゃないよと親に反抗す

神は何故弱き人々に試練与う

タンポポの綿毛が噂乗せて飛ぶ

大阪市 熊代 菜月

母さんの背なの丸さは努力賞

わさび田の辛さを見せぬ白い花

一目惚れさせたあなたも喜寿の人

友の声聞えるようなハガキ来る

啖呵きり後悔してるあわて者

大阪市 伊藤 博仁

湯が沸いた叫ぶケトルに買い替えた

息止めてハイよろしいと膝写真

農薬をまいた立て札避けて行く

鷺の雛やはり親似の子瓢箪

グランドの足を夢見る松葉杖

大阪市 小泉 ひさ乃

足もとを見つめ直してマイペース

やさしさを選びお金に縁がない

ちよつとした油断情けが仇になる

好奇心あるから回り道をする

一日の違いで今日は二割引

大阪市 安達 はじめ

足して二で割って結んだ夫婦の和

良心を試す財布が落ちている

着飾って賞味期限をのぼしてる

一言が多くて掘った深い溝

底辺のくらしにもある春の彩

大阪市 鶴田 遠野

恋序曲まずケイタイを教えあい

原爆忌 二世三世はつとかれ

母似だと言ってはくれぬ美人の娘

ひとりっ子我慢知らずに育てられ

哀しみに並ぶ花輪にある序列

大阪市 奥村 五月

悪女と飲めばお酒がうまくなる

赤飯で祝う白寿の野辺送り

ピラ撒いて息子の嫁を探したい

三つ指を妻がついたらどないしよう

雨つづき今日も休みの二度の職

大阪市 岩崎公誠

弱虫と読んだ相手に助けられ
肉眼で内面までは見通せぬ
年金に飼ひ慣らされて痩せたあご
人間の横暴だらう角西瓜
中ぐらいの幸せでよいパンを焼く

大阪市 小谷集一

ダイエット個性もちよつと痩せてくる
生き字引煮ても焼いても食えぬ人
隙だらけそんな自分の顔が好き
失敗を重ね自分の色になる
最後まで夫婦漫才演じ切る

大阪市 野田栄呼

健全に食欲だけは維持してる
熊にびくびく全神経で摘む山椒
下り坂ブレーキかからない七十
納豆は期限過ぎても同じ味
旅帰り家で眠りをとり戻す

大阪市 玉置英子

物忘れ自慢のように話し合い
ピーナツをこんなに食べた殻の山
人が捕る生まれた川を上る鮭
ところてん小さい頃から好きだった
音の中生きて犬鳴き鳥の声

大阪市 杉澤汀

靖国で会う約束の掌の温み
語り部も声つまらせて原爆忌
生き延びて醜い渦の中に棲む
生きるとはこんなことかと箸をおく
耐え難きことば懐し八・一五

大阪市 大川桃花

ひっそりと咲いても目立つバラの花
さながらに浄土の祭りねり供養
音立てて地球壊れていく予感
駄駄っ児拒否っ子大人がいらない永田町
ときめいて身につまされて読んだ本

大阪市 西川更紗

借景の山にひよっこり昼の月
満月に見せてあげてる露天風呂
値札つけ筆筒で眠る無駄遣い
主婦の座を譲ってからの不整脈
言い負けて何はともかく笑つとく

大阪狭山市 矢野梓

はいはいと出掛けて疲れ持ち帰り
探しものばかり置き場所変えてから
肝心なメモ見付からぬらつきよう漬
慰めの言葉失う電話口
古手紙さつさと焼いて前を見る

池田市 栗田久子

マータイさんのもつたいないにはつとなる

蟬の声あの敗戦を呼びさます

街中がうねりとなって阿波踊り

ひまわりがわたしにくれたのは希望

ことばよりほほ笑み返し待っている

和泉市 中川楓

羊羹を厚切りにして晶子の忌

青嵐めく三歳の反抗期

靖国をやめて大きな平和とる

言葉より多く伝わる笑顔好き

イケメンの医者に血圧上りづめ

柏原市 永浜加津子

路地裏の風は幼い頃の彩

病床の友へ届けと思い馳せ

脳みそはカラカラ笑う偏頭痛

八月のイメージは黒きのご雲

終戦に肩寄せ泣いた十五歳

交野市 森本弘風

姑の味舌へレシピをたたき込む

この美酒を毒だと医者は無茶を言う

老い二人小玉西瓜も食べきれず

ヤンママがミニで頑張る乳母車

焼夷弾神戸に降って六十年

交野市 田岡九好

戦友さ四十四年も連れ添えば

万博へ金と暇とを持って行く

寂しいが入れ歯も老いも受け容れる

ケータイの電源切って自由の身

無人店カメラが作動中とあり

交野市 山川日出子

金婚祝 薔薇の花束五十本

故郷がテレビに出ると目を皿に

青い目のカタコト祝辞場が和む

藁屋根に姿見えない扇風機

早くして高松塚のかび退治

河内長野市 山岡富美子

短いが悪路を走破した脚だ

物腰がソフトで油断してしまう

ほろ酔いで軽い約束する小指

今日だけの主役が嬉し誕生日

お守りのつもりで掛けるがん保険

河内長野市 水谷正子

まだまだが突然終る人生譜

納棺に最後の甘え頬を撫で

ありし日のやさしい笑顔目に浮ぶ

入院費保険が肩を貸してくれ

休み明け溜息もれる空財布

岸和田市 雪本珠子

顔見れば別れの言葉迷いだす

無理をして笑うと涙こぼれそう

太陽に誘われちよっとお洒落する

美しさ競い合ってる花と蝶

手を貸していらんお世話と叱られる

岸和田市 井伊東吉

W杯ハラハラさせたドイツ行き

セバ交流ほくそ笑んでる仕掛人

世界一目指す愛ちゃん武者修業

靖国と郵政総理の命とり

六ヶ国それぞれ違う肚の内

岸和田市 原 さよ子

達筆でないが心のこもる文字

年金がそこそこ老後報われる

世話すれば報いてくれた花の種

若い気も写真の歳はかくせない

照れている教え子長のつく名刺

岸和田市 岩佐ダン吉

多数派の中で私が瘦せていく

頼るのは私だ後ろもう見ない

頭下げ僕は偽善者だと思ふ

広島があれからカタカナになった

割り勘になると本気を出してくる

堺市 志田千代

命短しショートの髪にしておくれ

出不精に雀が雛を見せにくる

ねぎらいにお互いさまと言つてくれ

話しているうちいやになった人

八十になって喪服を買い替える

堺市 近藤豊子

蚕豆くん ふかふかの英でたがらず

莢えんどう花はま白に咲いていた

十粒ずつ豆分けあつた疎開先

あじさいのおしくらまんじゅうするつばみ

ラベンダー通りすがりの足をとめ

堺市 宮本かりん

同じ月見ながら弾む電話口

にこにこ聞かれとことん喋らされ

とばっちり通りがかつただけなのに

仏頂面笑い葉はないやろか

森の中わたしの過去に会いにゆく

堺市 村上玄也

ポーズだけ取らせて寄越さない写真

定年を機に止めました白髪染め

透明な答え気に入らない政治

奢られるつもりでいたら先酔われ

腰かけのつもりで今もフリーター

堺市 石堂潤子

うす味にお借りしてます酔の力
あんばんのおへそを隠すさくら漬
返り花忘れさせない貌で咲く
先輩の助言の刺にある情け
投げられた言葉の刺は抜いて聞く

堺市 神原文

過去の画の幸の一点見つめてる
目札にはっとしてから恋になり
飯の世と思えど捨てぬ私利私欲
酔いまわる今宵の筆はほろほろと
肥るんだ老いの坂まだ登らねば

堺市 國見蘭香

そう言っても私にだけは宝物
夏山に憧れているスニーカー
サクランボ熟れて小鳥に盗まれる
水虫が復縁せまる梅雨のとき
古里の橋は今でも同じ型

堺市 齋藤さくら

元気でさえあればと遠い子を思い
派手な傘 梅雨のいらいら吹っ飛ばす
梅ラッキョ漬けて私の夏が来た
デパートの名前で送るお中元
過疎地にも情け容赦のない政治

堺市 源田 八千代

待ち合わせ友の笑顔にほっとする
うしろから若く見えます白い服
大好きなアニメの傘で雨を待つ
ケイタイと兼用傘を手離せず
口達者 動けんままに車椅子

堺市 西村りつえ

ありがたい借り傘雨で思い出し
プール開き父思い出すちぬの海
失敗も照れずに進む楽天家
突進も休止も出来ず続く闇
不快指数ストレスたまるビワの種

堺市 和田つづや

めでたやな老人保険まで生きた
勝ち組になれたら開ける酒がある
初なりのトマトの朝露をかぶる
本分を越える勇気が身に染まぬ
謀叛心燃えたぎらせてイエスマン

堺市 矢倉五月

外出に女を意識して出る日
時折はフワフワフワとノーテンキ
ライバルと呼んでいたきありがとう
缶ビール缶から飲んで作法とか
検査入院 海外旅行としゃれておく

堺市 山 本 半 錢

早朝の公園木々の芽吹く声

あんなに買うて着る服がないと言う

大人にもなつてないのが親になる

物分りよすぎる大人増えている

ウインドーに傘の花咲き夏近し

堺市 柿 花 和 夫

席譲るビアス茶髪の目がきれい

古書店で青春の香にふと出合い

ライバルは自分自身という孤独

梅雨晴れにずる休みして海を見た

母と娘が姉妹に変わる午後のお茶

四條畷市 吉 岡 修

男から老人になる誕生日

いいことがあると父母思いだす

来る度に娘も主婦らしくなってくる

この胸を言えたらすつとするだろう

あとがない使い切ったらどないする

吹田市 穴 吹 尚 士

人間を使い捨てする国となり

見回してから賛成の手を挙げる

何とでも言える玉虫色の舌

一先ずは辞退のそぶり名誉職

トラウマで芋は食えない戦中派

吹田市 大 谷 篤 子

優しさに心が動き怖くなる

華になる舞妓の衿の抜きかげん

眠れぬ夜心臓の音確かめる

牛乳を買いに行くのもウォーキング

少女から大人にかわる花の時期

吹田市 太 田 昭

前略とお詫びで終わる筆不精

子を生まぬ罪を社会のせいにする

会見の平謝りも板につき

車輦の数かぞえる癖がつく恐さ

老いふたり一息を吐く無人駅

吹田市 岩 屋 美 明

送り火を見れば疼いてくる慕情

焚きしめて帰命頂礼茄子の馬

思い出がつまって開かぬ古机

歯ブラシ二本いつもの場所にある絆

居酒屋の隅に男の涙壺

吹田市 須 磨 活 恵

米一合酒一合で日が足りる

仮面など要らなくなった古希の坂

矢を折って余生しずかに野に下る

落せども落せど鱗なお女

華やかに女性溶け込むしうぶ園

吹田市 野下之男

これ以上悪くならない隣組

父の日は当てにしないが気にはなる

神様も美人の神楽お待ち兼ね

人並みに美人のアナの名が出ない

幼稚園出るだけで良い初舞台

大東市 南原正和

電車待つレディー絵になるポーズ取る

駅に着ききつねうどんとタコ焼屋

あと一球コールどきどき虎勝った

近未来ロボットはいとお茶を出す

夕陽射し覗いてならぬ隙間見る

高石市 浅野房子

おくすりを飲まねばならぬから食べる

痛みより痒みがつらいこともある

身内よりなさけをくれたのは他人

現状維持それがなかなかむつかしい

こじれると手が付けられぬのが身内

高槻市 傍島克治

歳かなあ二次会へ足洪り出す

癌告知病窓の月陰り出す

カンニンと言つてはいるが怖い顔

叱らないから言つてごらんに騙される

和解とは私が損して終ること

高槻市 乙倉武史

ネクタイがお暇を託つクールビズ

税金の無駄は許さじ見張り番

いびられて座り心地の悪い椅子

一と汗の楽しみ冷酒冷や奴

タイガース優勢茶の間賑やかだ

高槻市 西谷治三郎

忍耐力診察順できたえられ

老人会愛だ恋だと歌つてる

合併で市にはなつたが熊も居る

JR先頭ガラ空きあと満員

ああ言えばこう言う妻と五十年

高槻市 瀧本きよし

気づかない妻と空気の大きさに

懐に三途の川を渡る金

まだ顔に自信あつても惚けはくる

子が親を養う時代過去になり

いい運を貰い四十でやや生まれ

豊中市 安藤寿美子

横顔の薫風先生新仏

クールビズ政治がらみで暑苦し

一杯の寝酒テレビと差し向い

子が揃い井戸から西瓜上げてくる

生ゴミの日は豆の皮西瓜の皮

豊中市 吉田 あずき

あの日からレールの軋む音怖し
虚と実にトップの椅子が揺れ動く

この国の先考えてみるスリル
長生きが肩身の狭い国となる

茄子胡瓜色鮮やかに夏の膳

豊中市 檜谷 郁子

児の夢はケーキ屋さんになると言う

隣席の音が気になる菓子袋

洗濯物ラインダンスに緑風

子育ての希望を抱いて新居建つ

靴踏まれチカンでないの証で

豊中市 江見 清

女房のトップダウンで動いてる

トップ向け優秀謝罪文募集

早起きの分だけ昼寝してしまう

風鈴の音色を変えるにわか雨

介護ロボ来たら相手をしてやろう

豊中市 藤井 則彦

序之舞を観ているうちに舟を漕ぎ

口下手が射止めたトップセールス賞

他人様の痛みが分かる落ちこぼれ

不祥事で転がり込んだトップの座

手に死球受けてもガムを噛む選手

富田林市 藤田 泰子

自然消滅そんな形で散るつもり
満開に再会をした北の果て

淋しくなるまで独りで居よう電話オフ
火の玉となり雲海を朱に染める

この辺で終止符を打つ腹八分

富田林市 池 森子

糸切った風から届くエアメール

いい相手影になったりなられたり

いざという時には女脱ぎ捨てる

前向きな男にブレイキはかけず

走らねば明日の風が掴めない

富田林市 稲川 恵勇

ダーリンとアンタを使い分けている

妻のジャブ軽いが後で効いてくる

妻の知恵しやくに障るが有難い

梅雨晴れ間男手うまく使われる

老いふたり孫の頼みにすぐ負ける

富田林市 中井 アキ

まだ続く紆余曲折の自分史よ

守るものあつて谷底まで走る

吹っ切ればそこに私の青い空

煽られて潰けもの石になっている

脈々と私を充たす雨期みどり

富田林市 大橋 鐘造

寢屋川市 森

茜

閃光が走る悪夢のキノコ雲
名を付けて金魚を飼っている孤独
風の呼ぶ方へ転んで運搬む
泣き事はよそう鴉が鳴いている
名医だな歳のせいだと言うカルテ

寢屋川市 坂上 高栄

蝶になる歓喜だ天にもつれ合う
いつまでもビデオに生きる貴乃花
住みなれた所都と今日を生き
雨乞いも無駄でなかった踊りの輪
俄雨軒借る縁浅からず

寢屋川市 平松 かすみ

虹の絵もまだ満足に描けません
目を入れて猫に見えるか問うている
絵手紙でわかるあなたの幸せ度
本当に騙された贗カブト虫
父の忌が巡り追いつきそうな年齢

寢屋川市 江口 度

煮ごりの魚がうまい母の味
百均にして野菜売り場をはやらせる
炎の絵一枚抱いて逢いに行く
かぶりつき失礼なんか気にしない
坊さんもしびれきらしていたお経

デイズニールランドの鴨も雀も人が好き
断崖に建つ民宿と起きて知り
幼虫を起こしてしまいう移植銀
買物はキムチとわかるバスの客
縛られてないのも難儀ニート族

寢屋川市 富山 ルイ子

築二百徳川にタイムスリップ（略行 バイカウツギ）
バイカウツギみなに見られてうれしそう
手入れいきとどいた庭でひっそりと
徳川の風あたたかくつい長居
茄子トマト胡瓜お喋りして暮れる

寢屋川市 籠島 恵子

思ったより大きな疵になつてくる
ハンデイーをいくらもろても出来ません
私も詩人だらうか雨が好き
少しイケズ夫が折れてくれるまで
この夏も死に体で抜けるとするか

寢屋川市 太田 とし子

私でも専用車には焦がれます
わてかつてあんた好きやと叫びたい
こんな日は独りの酒がずいとよい
あじさい寺泥棒して来た花の色
コーヒーのスプーンがとまるW杯

羽曳野市 吉川 寿美

処世術作り笑いも身につけて
時どきびっくり水差しに来る次男
聞き捨てならぬ噂に握る紙つぶて
三面鏡の奥に魔性を棲まわせる
尺取り虫の腰の辺りの処世術

羽曳野市 酒井 一壺

嫁が来て家の掟を覆す

エアコンへ自然の恵みつい忘れ
自分への答欲しくて写経する
坊さんも極楽切符欲しかろう
回復の兆しか食事待ち遠し

羽曳野市 安芸田 泰子

独居老人という淋しい名を貰う
若いというお世辞が女磨いてる
烏から逃げる枇杷の頬かむり
疎開地へ記憶を辿り一人旅
夾竹桃 戦の記憶褪せて来る

阪南市 森村 美花

耐えてきた絆断ち切る印を押す
パソコンの日記本心匿してる
コーヒーの香りが癒す雨の朝
おはようの明るい声にあるゆとり
顔の運動若々しさを保つらし

東大阪市 谷口 義

目に青葉 逆さ睫毛を抜きに行く
一輪の薔薇に存在感がある
毒舌家 奥さんもつと毒舌家
誤解されたままというのも面白い
何事もなく長生きは出来ません

東大阪市 指宿 千枝子

ひよ鳥がめかして梢でラブコール
アンテナを畳み居留守の休養日
明るさと元氣もらったゴツホ展
サッカーの観戦を決め動かない
日本中喜びに沸くバンコク戦

東大阪市 安永 春

太ったらあかんやないか言われても
乗馬にもチャレンジしたい五月晴
大声でだだこね出した子の演技
雨乞いの蛙にやつと梅雨ニュース
父母よりも長生きしようダイヤ婚

東大阪市 西村 哲夫

利害抜き腹の底には計算機
お布団で寝たいだらうな回遊魚
百円ライター天寿全うして嬉し
死ぬ覚悟しても薬は飲み続け
人間ドック健康過ぎて脂肪肝

東大阪市 中岡 妙

健診に集う元気な熟女たち
深呼吸してから人の輪に戻る
ひとしきり笑ってからの軽い足
飾り気は無いが頼りになるお人
同行二人 自然と対話して歩む

東大阪市 笠井 欣子

簪を買う無駄な出費と知りながら
手抜きして今日もスクランブルエッグ
日々草にお疲れさまと声をかけ
試着室美女の積りでしな作り
舟下り夏の帽子がよく喋る

枚方市 海老池 洋

美人薄命 正にと思う花菖蒲
野良犬も近道ちゃんと知っている
電池切れそろそろ近い物忘れ
マンションを白い目で見る鬼瓦
レポートみな美味そうにする試食

枚方市 莊司 弘之

ゴルフ場カラスにいつも見られてる
古都のこと巨樹に耳あて聞いてみる
旬の味ごちゃごちゃにする近代化
Gパンのお尻で分かる健やかさ
得意げに失投と言う解説者

枚方市 丹後屋 肇

海蛇にアクアラングが脂肪汗
つまずいた布団に嘆息のギブス
よちよちを羨ましがる股関節痛
猫の爪くぐってしじみ蝶が舞う
しわがれの手でこねられるよもぎ餅

枚方市 安達 忠央

横一線トップ目指した入社式
親友がライバルである複雑さ
阿波の夜アホになりきり舞い踊る
褒め言葉利きすぎ男舞い上がり
古都の橋舞妓雲水いりまじり

藤井寺市 高田 美代子

盆おどり少し狂って夜を明かす
男らしい石だ真っ直ぐに沈む
一寸先がわからないから頭が高い
そこそこの余生へ楽しみなメニュー
口止め料が罪悪感として残り

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

風みどり軽い恋なら今がいい
怪しげなティッシュだけれど貰います
温室で育った薔薇の人嫌い
芦ノ湖の富士山麓のあかるさよ
情けかな旅の終りに梅雨の入り

藤井寺市 楠 昭子

風に触れ風に語って風を知る
体と心 何故かちぐはぐ眠らせず
このままの幸せで良し鈴を振る
案内書だけで世界の旅めぐり
足跡の残る限りの道歩く

藤井寺市 若松雅枝

有難い二人揃って見る花火
みんな留守水着で風呂場掃除する
言い訳が下手で何時でも損をする
いまいちの顔だが親に貰うたもの
子ら巣立ち茶の間二人に広すぎる

藤井寺市 太田扶美代

この僕が時代遅れになっている
瞬間が友のカメラの中にある
一心に祈れば少しずつ変る
気力体力バランスとって生きている
言にくい事をすらしという女

箕面市 出口セツ子

誕生日覚えてたのは息子だけ
夫には債権がある誕生日
いつまでも子から自立ができません
夫婦だけの温泉通い弾まない
透明な膜を感じている孤独

八尾市 宮崎シマ子

ラッピングしとこう品のない声を
恢復へひと足先に動く影
棚の上の自分 自分を見つめてる
いつか来た道昔の人ときた道だ
三日逢わぬと声が聞きたくなる友だ

八尾市 内海幸生

本代引く酒代 余ったのが教養
お隣の小さな声が聞こえるで
しつかりとしてよ横綱だったんだ
雨の音乾いた軒の花が聞く
冷凍をされて狂った百合が咲く

八尾市 吉村一風

妻が居て季節季節の服を着る
美しく老いたし今日も花をめで
寄せ書きに元気をもらう快復期
試されているなにつこり笑つとく
ネクタイはとうにやめてる万歩計

八尾市 高杉千歩

ネックレスちらちら議員さんクールビズ
初対面なのは両家の親ばかり
戦争を知らぬ世代が説く戦
すべてよし初夏のひととき花菖蒲
追伸へほのかな慕情しのばせる

八尾市 山本 宏 至

月に星 僕には君という伴侶

都合よく忘れるくせを持つ夫婦

観覧車の天辺で咲く恋の花

二人もお月さんなど見て居らず

洗濯がいつばいできた青い空

八尾市 生嶋 ますみ

ボタン押す事さえ出来ぬメカ音痴

泥くさく生きて少しは悔いがある

待ちわびた雨に紫陽花歌い出す

ニートなどいないと思う蟻の列

贅沢な時間は好きな友ばかり

八尾市 宮西 弥生

いい夢のつづきを銀河からもらう

熟年の匂を只今旅最中

狂わずに生きてる便り光ってる

身のまわりいつもきれいなゴミ袋

夕焼にいのちの予約しておこう

八尾市 村上 ミツ子

クールビズ ネクタイ屋さんブーイング

父の日は娘とお墓参りです

新茶の香聞くこともないボトルっ子

姑に仕えて嫁に勝手なことされて

いいよいいとストレスを積み上げる

大阪府 米澤 淑子

ゆとりある時はやさしい声になる

胡瓜もみ さくさく涼し夏の音

主婦業という勲章にしばらく

ITの急流老いを置き去りに

プライドという厄介な虫を飼う

大阪府 前田 ゆい

少子化に子の集まらぬかくれんぼ

着飾って犬は迷惑とも言えず

シャネルづくし塾女の衣装値踏みする

ロボットに看取られそうな近未来

さりげなく労り夫送り出す

大阪府 澤田 和重

リハーサルの時には笑顔だせたのに

あなたより愛しています預金帳

丈夫な子産めそうペダル踏むヒップ

二人きりの部屋です愛をてんこ盛り

ケイタイのおかげで指が小器用に

大阪府 初山 隆盛

もう一度師の一喝に逢いたくて

老妻も夏を乗り切るあつぱつぱ

七色のネオンはきつと誘蛾灯

ハンガーに父のよれよれした姿

交流を拡げて未知の花を知る

神戸市 伊勢田 毅

バイキング続くツアーに少し飽き
肅々と自作自演の日記書く
年金の軽さに恋も軽くなる
十九歳藍とさくらのVサイン

尼崎市 軸丸勝巳

戦友の眠る靖国お静かに
クールビズわが家甚平ステコで
畳替え青い空気を吸う昼寝
早口のテレビを耳が追いきれず

尼崎市 松下比ろ志

行き止りらしい私の運命線
人というたった一字にある宇宙
少しだが余白あるから夢を描く
年輪が出ている父の笑い皺

西宮市 牧瀨富喜子

立ち読みはこころの散歩かも知れぬ
一泊の旅に持たせる保険証
藍色の皿が夏日を連れてくる
糠床に行動範囲せめめられ

西宮市 菊池トミエ

糠漬の塩の加減や茄子の色
紫外線帽子眼鏡でカットする
高野山登る予定で靴磨く
かくれんぼアジサイの中見付からぬ

香芝市 大内朝子

お迎えの時間が未定で笑つてる
口角をキュッとあげればモナリザに
寝惚け顔映す鏡にいたお化け
昼寝する猫が知つてる風の道

大和郡山市 坊農柳弘

DNA種なし西瓜にある驕り
梅雨明けをせかす天神さんの威きり
飾らない言葉で愛は素直なり
ともすれば雲の流れを読みちがう

和歌山市 宮本三喜夫

不正ばれ幹部連中落着かぬ
時の人ひのき舞台を去る日くる
真夏ですノーネクタイに老舗消え
オイル値上げ海空陸と便が減り

和歌山市 喜田准一

激しさが疎ましい時欲しいとき
イエスマンだからリストラ告げられる
決断へ逃げ道少し開けてやる
ちよろちよろと動けば流れ弾に遭う

和歌山市 武本碧

新しい財布がせがむ五円玉
価値観を競う青色ダイオード
判決の軽さへ声が裏返る
クローンに行く手に待っている襖

海南市 谷口義男

立板に水の説教聞く気せぬ

立ち枯れの芦に似て来た老いの脳

一筋の糸で編まれている絆

十年の日記の中で逝った友

和歌山県 中後清史

札束を見るまであった正義感

友達の批評を孫は受けつけず

戦争の貌が行き交う朝の駅

喜寿までの歩みをなぞる走馬灯

鳥取市 田中懂子

うっかりの謝罪玉虫色で終え

箸を持つ指に嫉がにじみ出る

金メダルやりたいクモの糸細工

換気扇早目の掃除待っている

鳥取市 近藤春恵

肩書きが一ぱいあってややこしい

血縁がもつれ出したらややこしい

行方不明安否気づかうヘリが飛ぶ

使途不明のまま血税が消えて行く

鳥取市 山本益子

言い訳の邪険もつれる解けぬまま

犬マークベル押す手先ふるえ出す

無農薬の田舎番茶に飯旨い

バーゲンセール女ストレス整理する

鳥取市 富山 檳榔樹

水面下話が泳ぎ波が立つ

夫婦仲 落花流水情け濃し

ノーネクタイ総理率先皆習い

生きているのが下手な男の平泳ぎ

鳥取市 奥谷彩子

生き惑う闇路仏の手にする

夏大根少しにがくて妻の意地

見限らず寄りそう妻がいてくれる

いい声に美人想像する電話

鳥取市 鈴木一弘

言うことが曲がりくねって飲み込めぬ

ふところにおお穴あける当て外れ

人生を全く変えた当たりくじ

人だから土用うなぎが難にあい

鳥取市 夏目一粹

風よ吹けこころの扉開けておく

もう少し上手にこころ使いたい

時計など当てにしないが遅れない

真実を吐いてこころは五月晴れ

鳥取市 田村邦昭

声欄に同じ怒りが載っている

その声は悔し涙を隠してる

嘘だけは言わず聞かずに生きてゆく

夫も好き妻も好きだといいい夫婦

鳥取市 宮脇道子

寝坊して穏やかに亡母夢に現る
手から水漏れるばかりの蓮華草
濡れ落葉 診察室で剥ぎ取られ
たんぽぽの歩道に咲いた逞しさ

鳥取市 塔 寛子

三顧の礼うける果報に老い忘れ
言わでもの嫁の批判はいなされる
柳界を二人で背負つてのむビール
ご高説ビール十本目は宙に

鳥取市 西村 黙光

思い出にこだわり失せぬキノコ雲
健康にこだわり止めぬ酒たばこ
外観にこだわり仮面つけ替える
一筋に興味にこだわり恥晒す

鳥取市 加藤 茶人

屁理屈は分つたような事を言い
手を合わす裏でよからぬ事想う
自爆テロ アラーの神も罪な神
ゴミ捨てもします亭主で点稼ぐ

倉吉市 牧野 芳光

じつくりと見れば奇妙な牛の角
市役所の便所を借りる散歩道
好きという字をふくらます私小説
間違つたことを書くから面白い

倉吉市 野口 節子

人生の秋を知つて苦勞人
人恋し心の窓を開けて待つ
沈黙に徹した父の力こぶ
一線を退けば柔和な父の面

倉吉市 猪川 由美子

弱腰外交 総理へコルセット贈る
女性車輛おんなの痴態繰り広げ
面の皮厚なる薬買ひに行く
女性天皇ころづもりへ早よ決めて

倉吉市 山中 康子

子を産まず日本の未来暗やみだ
ミルク飲む宝は天を向きたがる
バナナならつるんと越せる喉ほとけ
賢さをほめて美人がすねている

米子市 木村 春枝

路地の風昔しので語り合う
薄暗い小路がつづくミステリー
病友が増えて心の支えとも
傷心を洗つてくれる里の水

米子市 光井 玲子

憶測でにらまれるとは心外だ
握手して別れぬくもり忘れない
こだわりがすっかり解けて空仰ぐ
傘寿すぎ少し弱気になりました

米子市 野坂 なみ

鳥取県 山宮 愛恵

リーダーの条件先の風を読む
山里に島から嫁がやってきた
エルニーニョ島は悲しみ抜けだせぬ
似た顔はあっても僕は世界に一人

米子市 門脇 晶子

六月の雨の向こうに初夏の虹
我が家にも我慢くらべの椅子二つ
新緑のシャワーで心洗います
淡い灯に水をたずねて恋螢

鳥取県 盛田 夢路

ごめんねがやつと出た時雪も解け
紫陽花に誘われ今日も迂回する
輪の中に小さなトゲが生えかけた
母逝つて実家の足も遠のいた

鳥取県 太田 幸枝

老いてなお紅一点で盛り上がる
古時計時々ゼンマイ巻いてやる
新札に自動販売うろたえる
同じ血を分けた身内の内輪もめ

鳥取県 澤田 倶久

日めくりに好事が続き夏祭
夏休み宿題の山あと三日
同窓会無用と女啖呵きる
うわっ面撫でる介護が枷となり

何ひとつ取り柄がなくて楽天家
黄色の花で幸せ誘いこむ
いただきますもので仏とすます夕ご膳
ハープ通の話 天まで続きそう

松江市 川本 畔

今は窓開けたくはない風がある
疵口のまだ癒えずして水に浮く
八十円貼れば静まる波がしら
純粹な心老いなど寄せつけず

松江市 安食 友子

済みません法華経なのになんまいだ
大それた夢いいのです ろはだから
緩やかに後戻りせよ蝮さま
結末を迷い捨てるもいいじゃない

松江市 小川 注湖

ほどほどで我慢している平和です
合併で地図屋さんにも儲けあり
九条の光を捨てる論議聞く
大食いの無駄食いテレビ社を怒る

松江市 佐野木 みえ

三度目に転んだこれで厄払い
つるバラは野放図に生き垣根越す
友の電話ストレスどこか飛んでいった
クールビズ颯爽として見とれている

松江市 松本 知恵子

白つめ草原爆ドーム囲い咲く
一年の真ん中あたり喝を入れ
海を向く浜登願は蔓太く
光り物つけて革命とは無縁

出雲市 小豆沢 歌子

合歓の花忘れた事を思い出す
波の音テトラポットが愚痴を吐く
国外の息子の予定見て眠る
針の穴覗けば見える羅漢堂

出雲市 園山 多賀子

酸欠の窓にみどりの風入れる
日脚伸び小便小僧水温む
時どきは右脳と左脳入れ替える
自惚れて川の深さが測れない

出雲市 富田 蘭水

生きているあかし新聞投書のせ
信号の赤には一目おいている
久し振りまわりの早い店の酒
ビルばかり緑にあつてほつとする

出雲市 石倉 美佐子

六十年 胸の螢はもう翔べぬ
火の川の水を求めて命果て
千匹の螢弧を描き乱舞する
私の中に白いガラスの螢塚

出雲市 持田 多輝子

合併で我が山里も市と呼ばれ
針含む言葉 意表を突いてくる
長らえて日の丸仰ぐみどりの日
金のない老いのプランはままならず

出雲市 久谷 まこと

建前と本音いずれも裏表
マイペース平均寿命無事通過
邪魔者にされて電柱立っている
深夜から蛇口ポツポツ喋り出す

出雲市 岡 あきら

客疎らでも熱演のはぐるま座
サッカーのようにすつきり決みなさい
山陰を返上したい空続き
水遣りの畑ビールを飲むように

島根県 伊藤 寿美

再入院 馬酔木の花がこぼれた日
ごつた煮の中で聞こえる母の唄
万覚帳 おはえがき 葬のあとさき書いておく
本棚に亡夫の匂いと歎異抄

美作市 福原 悦子

控え目な妻の内助が温かい
回り道母の背中にある松の陰
花持たす若者にある処世術
屋根裏で読んでいるのは古日記

竹原市 正畑半覚

大銀河 星にもきつとある出会い
さびしくて星はピカピカ光ります
流れ星 小石ひとつになりました
眼を閉じて真昼の星を見えています

唐津市 樋口輝夫

冷や汗を拭きつばなしの参観日
見てくれと言わんばかりの胸の谷
ひだるさよ外食券を握りしめ
ジントスを信じて塩が盛ってあり

唐津市 宗水笑

煩惱の多少は縮む仁王門
げんこつで涙拭く児にもう男
亀タワシ己が表と裏が言う
包丁も握れぬくせに料理通

唐津市 井上勝規

歳と共に失うものも増えて来る
不思議さは不思議のままが美しい
老いぬれば老妻を氣遣う身勝手さ
独居老 想定外のことばかり

唐津市 坂本蜂朗

朝には反省夕には酒盃
萎びてた昼とは違う酒の席
手洗いで春の異動の拾いもの
蠅叩き振って壊した飾り皿

西予市 黒田茂代

ホップステップ風のメロディー聞きながら
鳥の歌添えて自然のレストラン
かげろうのゆらぎに溶けてゆく日傘
豌豆の花蝶々になれぬまま

弘前市 相馬銀波

生き甲斐に選んだ鉄も重い日々
物忘れ妻と争う古希の坂
不協和音だけを残した酒でした
この先も酒に未練がある余生

弘前市 岡本花匠

添い寝する団扇が先に眠りかけ
海知らぬ河童の川に水しぶき
森林浴笑いが戻り揺るぎない
ランプの湯慕情につかりかじか聞く

弘前市 須郷井蛙

交流試合観客集めホツとする
毎日が日曜困った定年期
エアコンを受験の部屋に無理をする
見習生まずは研ぎ方身につける

十和田市 阿部進

善人と言われストレスばかりため
子や孫に軍靴の音は聞かせない
田植機を動かす人なく休耕田
ウグイスの初鳴き遅い山は雪

青森県 小寺花峯

やんわりと抑える虫を腹に飼う

親指の先を離れぬ運不運

日の出に起きて日の入りを待つオチョコ

地球が回ってる僕は呑んでいる

武蔵野市 亀井円女

手の中にやとつかんだ時と空

恥ずかしながら切磋琢磨はせずじまい

逝く日まで試行錯誤の連続か

八十五なのまだお若いと百の人

静岡県 蘭田猿杵

目も耳も足も達者な好奇心

生い立ちは駿河湾です金目鯛

キッチンには魚の愚痴も聞いてやり

魚ごろろわかったような釣自慢

愛知県 早川盛夫

雨もまた昔を偲ぶ熊野道

猪の泥湯の跡や熊野道

シロヤシオ咲いて遥かな雪の峰

これしきの山に弱音の膝頭

滋賀県 中宗明

母の味コンビニ出来て忘れられ

ちぐはぐに夫婦の意見かみ合わず

この歳でケータイ持って苦労する

こちこちになつてドジ踏む新社員

大阪市 岡本久峰

よくもまあ振り込め詐欺に大枚を

孫娘蝶舞う如く跳り出る

晩学のラジオに耳を傾ける

バランスのとれた女体の美しさ

大阪市 町田達子

電線から下を見ている雀たち

鳥語わかれれば楽しいだろうなと思ひ

これからのをやっぱり思う苦勞性

友達も誘つて出かけることにする

大阪市 清水絹子

デバ地下の大入り軸にブランド店

掟かもこの世の無情焼場の戸

表裏なき富士に習えと身延線

月命日酒に煙草に豆御飯

大阪市 榎本日の出

ゆっくりと手足のばして不眠症

生きるため目の前の坂のほり出す

伸ばしてもさすつてみても皺はしわ

ロボットが増えて赤ちゃん減るばかり

大阪市 榎本舞夢

山門をくぐるとキュンと引き締まる

青い空叫びたくなる五月晴れ

値段見てもつたいたいと諦める

今日からは独立ですと一人部屋

大阪市 近藤 正

九条は人の命の重みです
大風呂敷広げたままで置いてきた
被曝した石段上る原爆忌
自殺した人が三万 富裕国

大阪市 渡部 さと美

山の宿まむし注意の札を立て
歯科はよい全部入れ換えできるから
沖縄のむごさよ九条守るべし
夏の花ばつと元気をくれてます

大阪市 松尾 柳右子

だんらんのスイカしばらく無言行
ボンヤリと過ぐす休日TELも無し
雪月花お互い耐えし夫婦独楽
夏雲の白いパワーに憧れる

大阪市 中村 叡子

近隣の国がごちゃごちゃいけず言う
梅らつきよう店頭に出て恥しい
クールビズまたカタカナ語増えました
目に青葉田に水みちて小さな旅

和泉市 横山 捷也

ロボットは命令全部聞いてくれ
労りが過ぎて女房に怪しまれ
コーデインート妻にまかせて若返り
髪染めて六十路女を取り戻す

和泉市 西岡 洛醉

朝漬けの茄子に母さんいい笑顔
各停の旅に余白が長い日よ
飽食の日数に増えた腹回り
神と医を信じて生きる今日の幸

泉佐野市 山本 蛙城

鬚赤く染めよかゴッホ見て帰り
生臭い暮らし余生を口にせず
好きだから好きと言えない人と会う
雑草という名はないと野草展

河内長野市 井上 喜醉

贅肉を隠しファッション夏姿
偶然が重なり怖い三りんぼ
パソコンで世界を翔る怖い夢
風見鶏錆びてぼんやり空見上げ

河内長野市 植村 喜代

金婚へたどり着くのは楽でない
散り急ぐ訳もないのに一〇七人
生れたら早いか遅いか死にたどる
ありがとうありがとう師を思うとき

岸和田市 土橋 房枝

いい女背負って歩くほろ苦さ
も一人の私がいつも背を押す
いい女と言われてからは気が抜けず
父越えた子の貫禄が眩しすぎ

岸和田市 亀井 皎月

大東市 児玉 蛙

名実の春を食する菜種和え
今日歩く不思議に足が痛まない
抵抗を感じる杖で元氣そう
交野山 巨岩を仰ぎ新緑嗅ぐ

堺市 河内 月子

高槻市 富田 美義

二人して孫の夏風邪もらい受け
キウイの実柿の実育ち盛りなり
八月八日いざ年金がおどってくる
大きい人だ失言に触れて来ず

吹田市 早川 棲世

高槻市 井上 照子

六十年怨の息づくお盆月
終戦後のち売りますいま傭兵
ニートふえる昔の親は子を叱り
容疑者の名前に親の思い見る

吹田市 瀬戸 まさよ

高槻市 左右田 泰雄

若者の剥げたジーンズセンスの差
手術前家事の手順のメモ渡す
家族より飲みに行こかの友がいい
デパ地下に昔の市場甦る

吹田市 木下 敏子

高槻市 江原 秀夫

ちっぽけな夢を手提げに持ち歩く
サブリメント効いてる主治医には秘密
健康であれば楽しい足の裏
思いやる心は見ない振りをする

女ひとり何にでも手を出す癖
長生きは嫌酒タバコ飲み出して
この願い届けて欲しい福の神
逢えそうで片隅で待つしおらしく
裁かずに軸の九条子に残せ
ぬるま湯で茹でられ男はされたり
飾りとり静かな余生つつが無し
ホッとした音色で帰る消防車

花占いやはり離れる人でした
懸命な努力に叱る余地はない
天才も陰の励みを怠らぬ
若き日のオルゴール聴く夫恋し
うっかりと一行飛ばす写経の手
父の日は母の日ほどに騒がれず
異文化に触れると騒ぎ出す血潮
君が代の二番歌ったことがない

八十路坂ゆっくり登る夫婦亀
今がある余生を神に感謝する
優しさに嘘シエイクして恙無し
心の底のぞけば鬼の顔に会う

高槻市 生田 義一

同窓会締めは校歌の大合唱

ああそうか席譲られて歳を知る

セバ交流虎やつとこさ目を覚まし

ノータイのさきがけ胸張るほりえもん

高槻市 執行 稲子

キャリアのみ長くて技のともなわず

日曜の楽しみ孫のお泊りさん

ありがとうを素直に言えて夕映える

惚れ易い女に葉おまへんか

豊中市 山門 タミ

我が友は十八番持参でお浄土へ

どうしても浮かばぬ名前風呂で浮き

電線にカラス二百羽茜空

マグマには敵わぬ人の知恵なんて

豊中市 水野 黒兎

稲妻はスイカに模様盗まれる

ひと肌を脱いだ男の大ジョッキ

風の無い日のカーテンは所在ない

嘘にウソ重ねて出口ない迷路

豊中市 岸田 知香子

ひよんな事一期一会の大切さ

五月晴青葉トンネル深呼吸

水やりに朝の運動一仕事

御老体だましながらの自営業

富田林市 片岡 智恵子

日の昏れの足跡ひとつない後ろ

また一枚薄着へ街のヘソルック

病院へおしゃれはゆとりある病氣

ひとりより二人は嬉し茄子の花

東大阪市 北村 賢子

この願い神にとどけと百度石

会話無い相手も居ないよりはいい

メールより手書きの文字があたたかい

何よりも輝いている子の笑顔

枚方市 二宮 山久

孫電話日に日におしゃまな言葉じり

幸せは息子夫婦と膳並べ

六月の雨にうたれて鳴くカエル

妻元氣私も元氣旅の宿

枚方市 宮川 珠笑

長男は伸びず長女の背が伸びる

ソケットの緩み気付かず業者呼ぶ

ママさんの会議中断にわか雨

死ねばすぐ捨てられそうな物を積む

枚方市 森本 節子

昼のマンション不在の街の如くなり

カタカナ語 辞書を繰ってもすぐ忘れ

マンネリの部屋のカーテン替えてみる

水辺にはアヤメ いちはつ 杜若

原稿募集

エッセー 七〇〇字（四百字詰原稿用紙三枚半）
ひとこと 三〇〇字（たて十五字・よこ二十行）
エッセーは同人のみ、ひとことは同人・誌友不問。
共にタイトルを別につけて下さい。締切り期限は問いま
せん。ただし、原稿の採否、添削は編集部に一任して下
さい。
本社事務所宛

盆踊り風に浴衣の裾が舞う
金魚すくい元氣なやつが売れ残り
氣の抜けたビールのようなお人柄
初恋と頑固に生きて五十年

暇あればやがて役立つ本を読み
野心すてゆつくり上る老いの坂
国技でも外人力士はばきかせ
口裏を合わせ入札鉄の橋

ゴキブリを追う蠅叩き捨てられず
百合活けて移り香白きたなごころ
木陰なし炎天おのが影もなし
渡御に雨これからという人出

大阪府 桑田 ゆきの

八尾市 長谷川 春 蘭

守口市 井上 桂 作

藤井寺市 中島 志 洋

第17回兵庫のまつり—ふれあいの祭典 川柳祭の開催要項

事前投句 8月25日(木) 締切り
題と選者 3名共選 各題1句(未発表)
「駅」小松原爽介・村上氷筆・山本義子
「水」赤井花城・寺井秋果・浅雛美智子
「行く」ト部晴美・佐藤純一・前田美巳代
応募料 1000円(定額小為替)
応募方法 所定用紙または400字詰の原稿用
紙、及びそれに準ずる用紙を使用、右半
分に干、住所、氏名(ふりがな)、性別、
TEL、大会(11月27日 後日掲載)出欠
の有無を楷書で明記して下さい。
作品集 出席者は当日、欠席者は後日郵送
応募先 〒675-8501 加古川市加古川町北在家
2000 加古川市役所 地域文化課内
川柳祭加古川市実行委員会
TEL 0794-27-9181 FAX 0794-24-1373
11月27日(日)の発表大会については
後日掲載します

平成17年度相生市文化祭 第13回相生市もみじまつり

日時 10月16日(日) 開場10時 開会13時
会場 相生市総合福祉会館 4階
(TEL 0791-22-7125)
事前投句 締切8月31日(水) 必着
課題と選者 「惜しむ」 蛸原 正弘 選
「消す」 西内 朋月 選
「丸い」 石井 冬魚 選
「主役」 福島 直球 選
応募料 1,000円(定額小為替) 発表誌呈
応募方法 専用紙あり、各題1句、大会出欠明記
投句先 〒678-0031 相生市旭2丁目18-17
中本三桂(TEL 0791-22-7299)
当日句会の部 課題と選者(各題2句)
「勇気」 中井 昭子 選
「転ぶ」 田中 節子 選
「左」 寺井 秋果 選
「自由吟」 河内 天笑 選
出句料 1,000円 出句締切 11時40分
主催 相生市・相生市教育委員会他
後援 兵庫県川柳協会・相生市観光協会
問合せ先 投句先と同じ

川柳塔の

川柳讃歌 ⑧

木津川

計

愛と恋はどう違うか。「逢いたくなるのがアイ」「呼びたくなるのがコイ」大阪の言語遊戯の達人・乙田東洋司さんの傑作です。

抑揚をつけて声出す下心

川 本 畔

いつもは無愛想で事務的なもの言いなのに、下心があるから抑揚をつけて話すのです。あるいは相手を愛するより恋しているのかもしれない。なぜなら、愛には真心（真ん中に心）があり、恋には下心があるからです。

淑女とはちがう大阪の女です

安 土 理 恵

淑女、即ちおばさまです。京都の女性は三ランクに分れましょう。おばさま・おばさん・おばちゃん、です。大阪はおばさまが不在で、おばさん・おばちゃん・おばはん、です。さて理恵さんはどのランクの女性でしょう。

先頭を局が仕切る雁の列

松 本 智恵子

お局はおばはんでは勤まりません。差別力に加え、知力が必要ですからおばさんランクの女性でしょう。もしかすると智恵子さん、雁の列の先頭は局でなく、三番手ぐらいに位置して風の抵抗をやわらげ、先頭にはそなたがゆきやれ、などと仕切っているのかもしれない。女ながらの狡猾さですね。

狡猾は褒めた話ではありませんが、もうちょっとと青年に知恵は働かないものでしょうか。

ニートより格上と息子はフリーター

米 田 恭 昌

パートに契約に派遣に、と正社員はどんどん少なくなります。企業社会というより資本の側が編み出した、これこそ狡猾な人事・労務システムです。低賃金と保障なしですから、ニートより格上のフリーターも結婚できません。そんな仕組みにこそ怒りが向けられねば。アメリカの黒人社会にある小話です。黒い鶏と白い鶏が決闘をしたが引き分け。「ようし今夜のスープでまた会おうぜ」。両者共に目覚めなければいかれこれです。

末席で意外な人が矢を構え

倉 益 一 瑠

末席は下つ端です。重視されることがありません。取るに足りないから上司は高を括つ

ています。しかし、一寸の虫にも五分の魂ではありませんか。矢は前から飛んできるとは限りません。横からも後ろからもと心得ることです。一瑠さんは末席からの反乱、その兆しをよくみています。

身の程を知って男の片思い

加 島 由 一

無法松は身の程、分際をわきまへ、未亡人への思いを絶つたのです。没後、未亡人の名儀で八百円余の大金が貯金されていたことを知った彼女は遺体に取りすがって号泣します。「松さん、わたしは何にもしてあげなかつたのに」。昭和十八年でした。情報局はこのシーンを検閲でカット。「苟も俚屋風情が帝国海軍の未亡人に思いを寄せるとは何事であるか。淳風美俗に反する」と。戦争は藝情も芸術も否定します。

幸せと思ふ時間を蓄える

園 田 獏 杏

萩原朔太郎は『絶望の逃走』で述べています。「幸福人とは、過去の自分の生涯から満足だけを記憶している人々であり、不幸人とは、その反対を記憶している人々である」と。幸福人としての獏杏さんに乾杯します。

（立命館大学教授・『上方芸能』誌代表

自選集

河内 天笑

よう見て下さいと原爆ドーム 無言(広島 3句)
レストランおじんとおばん僕等だけ
広島焼ボクの顔ほどでつかいよ
梅雨のひと雨南瓜の蔓 走る
救急車孫はオモチャとしか見えず

川 島 諷云児

深追いはよそう傷つくのは自分
人は人 僕の人生こんなもの
昨日今日明日へと握る命綱
いつ果てる命か知らぬ体温計
鏡からつまらん顔と言われても

木 村 あきら

影法師だけは迷わずついて来る
ソロモンで鉄の兜をもぎ取られ (敗戦武装解除)
一銭五厘の命卒寿へ永らえる (90翁)
新高の山へ登って逆落とし (新高山登れ開戦無電)
武蔵 大和 漁礁となって幕が降り

黒 川 紫 香

退院をしてから判るのもなさけ
退院万歳こんなに空気旨いのか
一軒を借りて目出度く退院す
夜鳩鳴くその夜の星空よ
旧宅のはすかいに寝るひとりの夜

小 西 雄 々

握手しても気は許せない微笑する
シャガールの絵を見るときは眼鏡拭く
赤を着て歳を気にせず世を渡る
暑中見舞今年も元氣筆はこぶ
脱けがらになった衣装でショッピンク

小 林 由多香

雑草の強さ肥料を欲しがらぬ
帰るなり腹が減ったよ飯まだか
すれすれであろうとバスをすればよい
細い息どうやら峠越えたよう
四十肩かゆい背中へ手がのびぬ

斉 藤 嘉

アスパラの生命力を戴こう
失敗にまたもチャレンジする畑
団粒の土ふんわりと根を包む
無農薬で良品つくる難しさ
青空を掴んでごらん豆の蔓

田中正坊

土橋 螢

六十年何の事かと聞かないで
六十年 もう一度言う六十年
六十年あの夏の日を忘れない
六十年老兵はまだ生きている
六十年やはり一日ずつ過ぎた

玉置 重人

仁 部 四 郎

環境の整理写真も撮つてある
本人は認知症だと思つてない
他人から見れば私に無い悩み
絶不調家庭医書読んでいる
愛情の深さが味を薄くする

恒 松 町 紅

野 村 太 茂 津

元氣そうですねと注がれ同い歳
ストレスが溜まらぬうちに燗をする
片チビの靴が老骨誘い出す
偶然に出遭うはバスか病院で
ビール注いだら真ん中で立つ長老

遠 山 可 住

波多野 五 楽 庵

山菜の匂をみつけた道の駅
クラス会いよいよ十人切れました
食うだけの晩年運はあるらしい
点滴はわたしやないのうちの犬
初恋のドラマが古稀を眠らせぬ

夕飯は食べてかえると言つておく
老眼も青葉若葉に癒される
すこし笑つて待宵の月をみる
静電気 飛ばして軽い服を着る
しあわせに夢中不幸を置き忘れ
信心の都合で決まる選挙戦
都合よく死んでくれたと言われない
部活動の都合を埋める家族主義
定年は来たが都合は人任せ
母校への寄付へそくりの都合あり
静謐を愛する時の楠若葉
瞑る時過去の風景美しく
限り無く詩語の季が好き美しく
人生に絶望は無い穿ち味
次の白寿へ無限耳鼻舌身意
携帯の音が途切れた抵当権
各論の行が乱れる孤独感
胸底の涙を妻も見抜けない
伝説の一人になって葬られ
紫陽花忌 小径に雨のけぶるなり

藤村 女

母さんが一番小さい影法師
二日酔い小指の嘘が胃に溜る
小さな命石の割れ目に咲く命
飾らない大きい大きい母の指
炎えつきて悔い無く楓舞い落ちる

芳地狸村

ジグザグに悪魔を除く九曲橋(台湾の旅)
出入りする口がうけてる龍虎塔
阿美族と踊るたのしい民族ショー
王羲之の筆の運びに酔っている
衛兵の儀式にこころ満ちてくる

宮口笛生

八十は若いことないよく転び(足骨折)
骨折がきついギブスに笑われる
四週間長いギブスに泣かされる
死んで良い歳だと八十路生きている
寿命とは九十百も生きる人

森下愛論

企みを崩してたまる悔いいくつ
寒風の中で喘いだ愚か者
満月へ己を晒す顔を伏せ
妥協する裏を読んでる生きようと
薔薇無尽 薔薇に溺れて薔薇に酔い

八木千代

月の入江 船の出入りが烈しくて
壺を買うほとけの花が増えたから
今も残してあるとりどりの五色豆
二番ホームで手を振る人は誰だろう
川だった記憶をつなぐ水の音

八十田洞庵

大輪の花の驕りは許せそう
ポケットの秘密言えないかすみ草
緑濃い森に童話が落ちている
蟬ほどに泣いて見せたい時もある
人形の生きざま磨き抜いた芸

両川洋々

さようなら聖書よ死刑執行だ
あの日から恋の余震が止まらない
おお恐い隣は拉致をする国だ
天皇もピエロでいたい日がつづく
火の輪をくぐる君も共犯だと思ふ

阿萬萬的

生真面目が過ぎて冷たくあしらわれ
歳かしらついい言いなりに受け流す
ご愛想で玉虫色の嘘をつく
丸洗いたいと思う老いた脳
此の頃は妻の言いなり粗大ゴミ

隣人から見れば身勝手日本人
 九条を変えたら困る国のデモ
 米を研ぐそんな言葉が風化する
 アナログの脳ですトコトン節が好き
 川柳熱 素文の漫画にあふられる

八月だ東条英機の無言劇
 戦争に負けたと思う御名御璽
 八月の恋は喋らぬきのこ雲
 好きな人出来たとマンガジューズ飲む
 好きだった人が病んでるくすり指

人ひとり送って変わる風の彩
 北斗より遠くの人に届けかし
 笑い声こぼれる便り梅雨さなか
 みどりの風 両手広げて包みこむ
 夕茜 美しければ今日も良し

冷静になれと自分に言い聞かす
 再会が反故親友の計に絶句
 それとなく聞かせる耳の痛いこと
 言い訳が矛盾の壁に行き詰まる
 ライバルに花を持たせている余裕

河井庸佑

奥田みつ子

板尾岳人

石川侃流洞

あかつき川柳会誌上句会

課題 (各3句・単記)

「彫る」高瀬 霜石 (青森県) 選
 「鎖」藤本 一規 (山口県) 選
 「山」松尾 和香 (和歌山県) 選

時事吟 (3句連記)

「憲法」川端 一步 (大阪府) 選

投句方法

各課題ごとに便箋半分を使ってタテ書きで作品3句を記入し、それぞれの裏面に、氏名(雅号のある方は雅号も)住所・電話番号を明記すること。

投句料として80円切手を5枚同封して下さい。

投句締切 8月10日 (木)

発表 9月下旬に入選句を掲載した会報を送付

投句先 〒536-0024 大阪市城東区中浜1-1-27 川端 一步 方

あかつき川柳会

第52回八尾市民川柳大会

とき 8月28日 (日) 正午

ところ 八尾市文化会館5F
 (近鉄八尾駅下車西武デパート東隣)

かいひ 2000円 (作品集・鉢植花・軽食)

お話 久保田 半蔵門氏

宿題 締切13時 (各題2句)

「希」中井アキ選
 「夢」本田智彦選
 「復」杉森節子選
 「流」宮西弥生選
 「波」平山繁夫選
 「長」泉比呂史選
 「結」宮崎シマ子選

懇親宴 4000円 (希望者のみ当日受付)

主催 八尾市民川柳会

水煙抄

奥田みつ子選

高知県 桑名孝雄

曾遊の瀛江生きいき百二歳（表紙絵2句）

嬰籙とはかくなるものか百二翁

亡父の背が海いつばいに見えた夏

不甲斐ないと思うが妥協しておこう

負けて勝つ余程ゆとりのある方だ

クールビズまた野暮つたい戦中派

長岡京市 山田葉子

空と海とけ合うとこに住む人魚

限りあるいのち知ってはいたけれど

育てたのはわたし育ったのはあなた

娘の客が気になっている父の椅子

冬ソナがながれ若やぐふたりです

ナンバー2影武者サラリ演じ切る

三田市 堀正和

晴れの日退屈ですね広辞苑

サラダより漬物好きの京育ち

三猿で近所と丸く住んでいる

隙のある人でみんなに愛される

手巻き寿司 妻も一杯やっている

窯元をのぞきお猪口がひとつ増え

今治市 野村清美

願い事神へ補聴器上げようか

温みある凸凹道の路地に住む

リハビリを仕事に余生恙なし

哄笑の喉全開のビール腹

祝い酒流す涙も入れて飲む

流れ雲 単身赴任の子を案じ

泉佐野市 稲葉洋

米の味どうのこうのと敗戦忌

雲の峰老いにどうだと居丈高

陽炎の溶けこまれそな痩せ老軀

阿呆言うてちよつぱり飲んで長らえて

生きてきた昭和の話したい盆

日立市 加藤 権悟

堺市 大久保 伸子

八月の炎天に降る蟬の径

生き下手な足跡影法師が笑う

ニート族日本を担う貌がない

鎌をうつ父にちちの日など無縁

六十年ヒロシマ風化せぬドーム

今治市 塩路 よしみ

清貧のドラマ知ってるチビた靴

錆ついた頭脳写経の筆をとる

二人だけの乾杯丸い風が吹く

肩寄せて吹き溜りにも夢がある

人生の起伏に酒が味方する

大山市 金子 美千代

このパノラマのための頑張り登山靴

紙一重の運を頼りに生きている

この次の言葉待ってるレモンティー

髪きつく洗って流す消えぬ悔い

不機嫌なとこへ電話のとはちり

和歌山市 土屋 起世子

宅配便しつかり母の愛も詰め

母の字が揺れる心に歯止めかけ

名画展静かに空気揺れている

端役でも継続したと誇り持つ

森一つ抜けて迷いが解けた地図

一冊の本で人生ひらけます

改憲論 日毎に軍靴近くなり

生き抜いて死に場所選ばない蟬よ

好きな人去ってゆく音きいている

失意の日人の心の裏を見る

札幌市 三浦 強一

少子国自動ピアノが鳴っている

晩成へゆつくり時を温める

真実へ夜討ち朝駆けして迫り

ちゃらんぽらんが性に合ってる共白髪

いつからか父の轍を歩いている

相生市 村木 信子

生きてきた起伏を辿る八月忌

アスパラガス手折りざつくり初夏を食べ

井の外を眺めがつくりする蛙

包丁の音がおいしさ弾きだす

野良の汗ささやかな贅レモン風呂

大阪市 三浦 千津子

いい話拾って走る今日のペン

口下手の甘い言葉が嬉しい日

苦の種を軽くないなして夢を盛る

末席の意見へ酷な削除キー

子沢山 今日でも元氣な風が吹く

岐阜市 平野 あずま

えび鯛の字が透けて出る子の土産
蓋瘡の下で微罪を眠らせる
イチローの球音海を越えて来る
そこに山あるが登れぬ驚馬となる
句箋番号今日の句会は吉と出る

八尾市 松葉 君江

ITが読み書きソロバン死語にする
機械化に汗の文化が消えてゆく
パソコンについてゆけない喜寿傘寿
お笑いを凍てる心の良薬に
健康の貯蓄へ朝の万歩計

大阪市 尾崎 黄紅

民営化郵便税が掛かりそう
真実はひとつ裁判長すぎる
五銭十銭ああ大正のよき時代
落し物どこに落したかと訊かれ
歳はもう忘れましたという元氣

奈良市 乾 春雄

チャペルから佳き日佳き人鐘が鳴る
蝶よ花よの育ちがいばら道辿る
遮断機で横一線の朝の靴
プライドが知らず知らずに作る敵
童唄 風のタクトに流れ出る

大阪市 升成 好

つないだ手握り返したのが返事
中立を守り黙ってメガネ拭く
比べたらあかん自分が嫌になる
逃げ道があつて強気になる喧嘩
追い風が止まると無力知らされる

池田市 北出 北朗

洗濯も楽し小暑の空の青
立秋や明日を思案の赤とんぼ
処暑の風小さな秋を揺り起こす
テロ止まず月はあんなに丸いのに
英霊の千人針の虎が哭く

和歌山市 柏原 夕胡

わたくしの素性を知っている日記
解毒剤飲まねばならぬ恋である
しなやかに四季を彩るのは女
悪夢かも知れない愛を縫っている
カサカサのところで響き合うメール

堺市 奥 時雄

背を押され弱気の虫を踏みつぶす
気が弱く見て見ぬふりをしてしまい
同じギャグ分かかっていてもつらい笑い
よく使うめがねをいつも探してる
ひたひたと囁くような舐め舟

大阪市 伏見 雅明

数々の修羅場くぐった好々爺
先頭でテープ切る夢子に託す
ゆつたりと時が流れて老い二人
お茶入れてケーキで妻と古希祝う
自分こそ我慢した氣でいる二人

大阪市 吉田 富美

茄子の花咲いて思うは親の恩
あじさいが平和の色で咲き出した
紺がすり母の形見の袖だたみ
わだつみの声聞こえ来る終戦忌
女とは名ばかり針のみな錆びて

佐渡市 高野 不二

勢力図普通りのクラス会
記念貨を買って小遣い不自由し
イチローのファンで金がかからない
クラス会話題は同じ膝と腰
住所市にかえても熊の出る話

広島県 馬場 利子

今日も雨ひとりぼっちの夢探す
傷心の風が心の隙間絡みつく
両の手に明日のスタミナ抱く夕日
力んでもわたしの影が老いて来る
過去一つ心の窓をノックする

鳥取市 山岡 紀子

ふる里のビタミン剤は老いた母
完熟のときとビタミンまるかじり
ポケットで咲いて萎んだ片思い
旧家から大正ロマン香り立つ
女三人アハハ オホホと花が咲き

京都市 清水 英旺

一舟のたこやき分かち合うも恋
葵祭の列王朝の香ぐわしさ
官制のノータイ奨励空回り
日本語がだんだん軽くなってきた
おばんざいスローフードの深い味

大洲市 花岡 順子

のんびりと居る 退屈はしていない
固まって考える人になっちゃった
丸三日誰にも会わぬ日が続く
四日目の朝をルンルン出掛けます
夢追うていた日は遠く遠くなる

鳥根県 武島 ちよえ

炎えている若葉に力付けられる
アドバイス心の糧にして暮らす
避けられぬ道だ汚さぬように行く
ミックスをすれば言葉もまろやかに
似なくてもよい事までが似て親子

高知県 百田 幸

じつと手を見てる私の半世紀
老い三人寄れば病氣だ薬草だ
不用意に出した言葉が戻らない
バーゲンの値札へ走る女の目
健やかに長生きしたい余命表

今治市 渡邊 伊津志

指の先信じて止まる赤トンボ
一斉に蟬鳴き立てる雨上がり
虹の橋きれいに見せて雨上がり
遠雷に昼寝の素肌冷えてくる
故障したバイクへ容赦ない雷雨

府中市 藤岡 ヒデコ

右足がズズズと滑り止まらない
外傷はないが背中肉ばなれ
不自由な体が焦るスケジュール
一寸も一秒も先解らない
これも業避けては行けぬ道らしい

雲南市 福岡 博利

心経をとなえ追風待っている
孫たちをおだてて庭の草むしり
孫の顔見て体調も上きげん
福耳に勿体なくも孔をあけ
ウォーキング今日のノルマがまだ済まぬ

雲南市 菅田 かつ子

胸にばら一日背のびして疲れ
食卓の若いリズムへ仲間入り
即席で今日も出番の無い煮干し
釣って来た鯰の顔の逞しさ
つっぱりも優しくなった母子手帳

安来市 原 煩惱児

結局は勝手な望み寺参り
悟ったような顔で寺から戻る
この一句残す一句と日々作る
植え終えて午睡時間が長くなる
真実の現場わからぬのはデスク

鳥取市 山口 千代子

長生きもよし惜しまれて死ぬもまたよし
用は無い母の声聞く娘の電話
同年配話が切れず時忘れ
可愛がり甘えた孫がいまソツポ
どちらとも取れる言葉の難しさ

鳥取市 横田 春名

今日だけはうんとずばらをしてみたい
歯を磨くように心を磨きたい
黄昏れて秘密めくもの何もなし
年輪を重ね心に宝積む
老いの知恵喜び探し巧くなり

境港市 遠藤 那珂子

昨日とは違う私が待つていた

南風すけるブラウスなにさそう

町並を花で皆が盛り上げる

万病をかかえていても敗けてない

歳月を重ねて味の出た夫婦

米子市 猪森 スミエ

転んでも土を掴んで立つパワ―

歯に衣着せて見えない腹の底

ビタミンのABCを皿に盛る

なりゆきは顔を洗って考える

我慢して我慢させてる嫁姑

鳥取県 平木 公子

今までもなんとかあった大丈夫

あちこちの花を訪ねて風になる

嫁姑じょうずに甘え丸く住む

天気予報聞いてその日が動きだす

生きてさえいればなんとか道開く

鳥取県 岡村 孝明

粗大ごみ掃かれる前に散歩する

豊作を祈り田植機水洗い

もめごとをやりわり包む老いの知恵

風に耐え砂丘を守る松健気

待望の嫁が決って家弾む

和歌山市 たむら あきこ

名月を残して父が消えたまま

月光がわたしを埋めてくれている

寄りかかる木もない小糠雨である

父いないひなたに影が落ちている

父を許し父にゆるさる風の中

和歌山市 根田 よしこ

さあ田植え蛙も急かす気忙しい

家仕切る老母はおしゃべり守り神

あれこれと疲れるけれどわたし主婦

お隣りもママカルチャーでパパ子守り

老母つくる浅漬け胡瓜みな笑顔

和歌山市 寒川 武

壱万円あたって運がいいと言う

知ることの楽しみもあり辞書をひく

のほほんと暮らしていても白髪増え

下戸だから元は料理で取ってやる

社の命運このアイディアに賭けている

和歌山市 坂部 かずみ

機械化で一夜で転化する田植

一匹の蚊が話しだす夏の夜

梅雨寒に寂しがりやの長電話

母の日が何度もあったミス터리

青春のポップコーンもよく爆ぜる

和歌山県 森下順子

生きてゐるうちにとしたいことはする
性格は内向的とある記録

謎を呼ぶガードレールのミステリー

憧れはあこがれとしてマイペース

ひまわりが初めて咲いたいい気分

和歌山県 辻内次根

ネガティブになると出口が塞がれる

良い個所を探す明日を語るため

にんにくが効いたと暗示には弱い

ナビ付けてから臭覚が鈍くなる

カラカラの喉が聞いている水の音

和歌山県 村中悦男

秘め事をしつかり抱いて生き続け

古傷を思い出させる汗がしみ

試歩の道世間広げる種拾い

種袋ふれば健気な種の声

ライバルが逝つて潮引く浜に立つ

奈良市 矢野良一

真の美は何も足さない飾らない

サックスのあまくせつない音に酔う

斑鳩の塔にほのぼの臘月

しつとりと雨もまた良しバラの寺

雨あがり山の匂いが堪らない

神戸市 両川無限

父の地図はずれて道を見失う

迷つたら少うし塩を足して見る

あれこれと迷い貧乏クジを引く

目で話す母に説得されている

謎解けぬままに春雷鳴りひびく

神戸市 田中章子

ブティックの鏡うぬぼれかがみかも

ごもつとも好きな相手の言うことだ

真贋はさておき好きで買う器

身の丈に合つた大人で今日も生き

良心の声時々は問うている

神戸市 山田婦美子

聞えないふりをしている磨り硝子

御機嫌を直すお酌の熱い燗

ささやかな指輪に鍵をかけられる

殻破る勇氣と根性試される

野暮な息子も親になつたと鯉のぼり

尼崎市 河津正治

過去を消す修正液が薄すぎる

左遷地と思えば愛し膝頭

一步引き裏を読むのも秘訣です

ストレスを捨てるネオンが眩しすぎ

絶対よ孫の小指に見る絆

伊丹市 延寿庵 野鶴

地球儀を汚すばかりヒト科ヒト
削除キー叩いて夢を消している
すみません 素直に言つて心晴れ
ギブアップいわずに鶴を折る十指
凹凸の道を歩んで今がある

篠山市 谷田 多美子

安らかに弥陀の御手に句集さげ
孫のような整形医師にすがつて
控えめな友が光っている舞台
ほんのりと亡夫の移り香梅雨晴れ間
おおいお茶亡夫も呼んでる朝の乱

三田市 石原 歳子

雑穀が美容志向に見直され
わくわくとする楽しみを子がくれる
ハンバーグ小さく丸めて古い二人
歌が好き辺り氣にしてくたつて
野や山へ足をくすぐるスニーカー

三田市 阪本 藤朗

田の畦をタバコの煙ゆつくりと
右肩がパソコン嫌いになつて
呆けてない昔話はばつちりと
定年後会社へ息を抜きに行く
満員の電車怒りも押し込まれ

三田市 辻 開子

道の駅ブラツと寄つて匂もらい
三世代会話が弾む客も増え
食卓の花一輪が和をくれる
笑います大笑いさす孫電話
じじばばに元氣ファックス三歳児

宝塚市 丸山 孔一

IT機おやし息子に教え乞い
安売りの茶碗褒められ値が言えず
職を退き自適の日々を窮々と
一筆で命吹き込む水彩画
あの人の笑顔にノーを飲み込んだ

西宮市 片山 忠

万に備えてめしを炊かされる
ビンの蓋空ける時だけ役に立ち
ゴルフよりゲートボールに誘われる
要するに何をさせても生半可
まあいいか夫婦善哉するつもり

兵庫県 安達 厚

まだ元氣 秋播きの種買うてくる
山は父 川は母だと思ふ里
また一つふえた病を友にする
欲張らずあきらめもせず生きている
種播いて芽が出るまでの親心

兵庫県 黒崎 美紗子

池田市 上嶋 幸雀

似たような人の集まり順を待つ
草のびてのびてぬけどもまいったな
調子よい時の返事が頼りない
菓子もって訪ねてくれた友の愛
新曲が出るとカラオケ活気づく

大阪市 中井 萌

久々に会った少女の大人びて
妥協癖ついて気持をたたみ込む
メール打つ親指だけが器用な子
聞く耳はあるが時々ストライキ
おちゃめさん大人の話聞きたがり

大阪市 寺井 弘子

クールビズ服のセンスも見られてる
紫陽花に元気を貰う雨の朝
すみません先手を打って事納め
合併で古里の村消えてゆき
ゼロの数私に無理なダイヤです

池田市 多田 契子

カラくじを引き当てたまま古稀となる
邪魔なもの自分と思う昼下り
中国に効かせてみたいハリや灸
あれを止めこれを減らそう月初め
へモグロピン減らせ減らせと歩いてる

幸せの色あじさいに聞いてみる
梅雨入りに順番のある長い国
日本晴れ見せてやりたい自爆テロ
予定にはない色が出るリトマス紙
いっぴきの蠅に団欒大騒ぎ

泉佐野市 備後 三代子

法要に集い絆を深め合い
子等みんな帰った後のものわすれ
旬の味娘持参の甘いもの
雨の午後わたしのためのチョコレート
夢たどる友の面影若きまま

柏原市 伴 洋子

母さんの着物が似合う歳になる
鼻ぐすり効きすぎたのか花粉症
擦れ違いふえて家族の和がずれる
貫禄の笑顔若さを捻じ伏せる
梔子の白しつとりと梅雨に入る

河内長野市 大西 文次

口よりは目が上手言うアイラヴユー
自叙伝をDVDに残しておく
宵越の金を誘って縄のれん
大器晩成あやしくなってきた余生
あつてない無くてあるよな好奇心

河内長野市 木太久 正 一

終戦後恵まれて生きもう傘寿
身辺整理思うようには進まない
だんだんと妻に代つて家事をする
川柳で腹に溜った泥も吐き
青空を仰ぎ生きるを誓つた日

岸和田市 坂口 英雄

やるだけの事してからの神頼み
器用不器用神が作つたいたずらか
下手な唄いつも聴いてる風呂の蓋
タンポポは白髪になつて旅に出る
マスコミが騒ぎ大きくなる火種

岸和田市 堤 植代

予感するなにかいい事ありそうな
思い切り唄つてストレスふつとばす
買うまでは思いめぐらし夢の中
梅雨を待つ蛙だけではないですよ
町外れほっと息つく畦の花

堺市 藤井 一二三

流れ橋絵にして春の昏れにけり
木津川のためとう流れ春深し
もう昔語りもできぬ湯呑置く
浄土への旅立つ背へ若葉かぜ
眼鏡拭くしぐさも哀し友の逝く

(黒岡君彦く
3句)

堺市 荻野 像山

連休が終わりお茶酌む尉と姥
意識改革ついて行かない民営化
聞いている寝てる読んでる眺めてる
ちゃんと伝われば一度で済む話
サイレンへ孫が喜ぶ救急車

堺市 羽田野 洋介

いたわりへ拗ねて横向く老いの意地
もうよからう貫く姿勢崩しても
真実はやつぱり一つあればいい
ベランダのねぎで充分酒の量
もう今さら待つたをできる歳でなし

堺市 河盛 龍三

芋植えた後へ梅雨入り元氣そう
薯の世話詳しい妻は口ばかり
芋植えて秋の嫁入り先は何処
寄せ書きを読み返しては出る元氣
一筆の寄せ書きで知る有り難さ

吹田市 二宮 栄子

赤青黄 雨傘おどる園児さん
あのねのねお話はずむ糸電話
真つ直ぐな道を歩めと亡父の声
錆止めがきかない右脳なでみる
残り物いっしょにつつく友がいる

高槻市 佐 甲 昭 二

藤井寺市 西 村 栄 一

ベテランの失敗談に奮い立ち
その先を聞き出したくて酒をつぐ
ライバルを意識してとる車間距離
この橋を渡って古い殻を脱ぐ
言い訳を見付けられずに長湯する

富田林市 古 田 千 華

祥月命日 白い紫陽花咲きそろい
不可能がバイオで可能青いバラ
小学生碁の手解きは祖母に受け
子を庇う親の心は鬼となる
現代っ娘乳房の谷間恐るべし

羽曳野市 森 下 一 知

宅配に母の自慢がてんこ盛り
旨い酒飲みたくなってボランテア
目を入れたダルマに明日を裏切られ
体中の脂肪が燃える好奇心
一喝を浴びて伸びる子縮まる子

羽曳野市 吉 村 久 仁 雄

赤い糸虹のほつれを妻と縫う
ゆっくりと熟し夫婦に古酒の味
ありがたい妻と素面で言える歳
不老不死の湯がポックリを誘ってる
禿頭をなお熱くしてサユリスト

一日のうさを洗濯機で流す
わけあって男がまわす洗濯機
ストレスも共に投げ込む洗濯機
爽やかな朝だ昨日の借り返そ
爽やかに後を濁さず飛びはった

藤井寺市 俣 野 登 志 子

まだ少し振り向かせたい髪染める
婿が来る花もダンゴも待ってます
老けたねと今日の鏡は憎らしい
人はひと私はわたしゆりの花
鼻歌にネギ刻む音調子合い

藤井寺市 吉 田 喜 代 子

鳴き下手なうぐいすもいる登山道
登頂出来た我に驚く古希の年
心配性思い通りになり過ぎて
喜びもほどほどが良いしゃぼんだま
欠点もあつてなお増す人間味

藤井寺市 鈴 木 い さ お

病み上り先ず二合ほど試運転
酒か飯どちらか減らせ飯減らす
帰宅して飲み直すのは別の腹
ふかし芋食いながらあの頃偲ぶ
サラサラへ臭い納豆我慢する

箕面市 寺井柳童

春の海沖ゆくヨット観覧車

猫ののび ほんやり見てる日向ぼこ

花の雲霞む牛窓夢二の絵

下腹を突き出し古稀のクラス会

忘れたい悪夢残したい絆

八尾市 脇 俊子

不意打ちの魔女の一撃骨が泣く

総て丸 思いの俣にならぬ今

先取りの蟬に競うて耳が鳴く

夢の中もがいて手にはなにも無く

願望は良き人生と筆で書く

八尾市 赤木妙子

その先はいうまい阿吽の戦中派

あるがままにと決めて迷って染める髪

カーテンコール余韻を少し掌に包む

人間の勝手が神を迷わせる

掌をかえし矛盾を封じ込め

大阪府 神野千恵子

盆明けのオフィス地方の銘菓展

地トマトが買つてと土の匂いさせ

おふくろと言う時の目がやさしそう

爪を切る 無心になっている私

立て膝でなお品格のあるお人

大阪府 小栢こずえ

にぎやかな蛙の声を一人聞く

疲れてる体に優し慈雨が降る

動物はしっかり母親しています

老いてなお初心にかえる意識もち

一声が萎えた体を活気づけ

京都市 榊本宏子

えんどう豆無心にむいて答出ず

朝食はレタスハツ裂きハムエッグ

ほのぼのの子のアルバムと過す雨

歩けあるけ四国遍路に出るゆとり

京野菜もち上げられてしんどかる

京都市 三宅満子

もの忘れ頭のどこへしまったか

マイナスイオン一人占めする森の中

喜びも悲しみもみな子がくれる

今日一日精一杯に夏椿

上着脱ぐとあつくるしいよ議員さん

尾張旭市 三浦きぬ

野良猫と連鎖反応大欠伸

故郷は私の胸の奥に生き

万博で世界一周するもよし

この辺で昭和に生きた意味探す

着替えての行き先は医者味気ない

浜松市 杉 浦 え む

とびきりの笑顔が一番さみしい
息のあう編み棒に似た二人旅
キッチンにて妻のお天気知らせます
ため息を縁に染めて初夏を生き
マンションの窓の数だけ空がある

横浜市 長 島 亜希子

さすがだな博物館は無料です(イギリス旅行)
町中がシェイクスピアに養われ
熟年もネッシー像でハイチーズ
イギリスにダイアナはまだ生きている
もう時差のせいにはできぬ勘違い

横浜市 金 森 徳 三

葉桜になって切りたい垣根越し
晩酌の肴は主夫に任せられ
生きてます空気と水と川柳と
セキユリティー盗られた後に駆けつける
はからずも拝受の色紙酒供え(故藤風先生合掌)

東京都 やまぐち 珠美

熱戦へ冷たい分析を重ね
足音を失っている迷い橋
白い馬水の面を蒼く往く
何本も見送る明日への電車
切り傷が疼いて直る時を知る

東京都 井 上 つよし

集会へ出ると隅っこまず捜し
極楽へ迷わず往ける上天気
往くか戻るかまつわり迷う影法師
俺の肉霜降りだらうビール党
民営にしても胡座の癖残り

東京都 長谷川 康 子

いかなごの釘煮が届く母元氣
一輪の花で心に灯がともり
風通しよくて長持ちする夫婦
言い訳がますます傷口を拡げ
快適な夏を父にもクールビズ

草加市 飯土井 健 翁

百歳を生きる氣迫で朝の杖
学生の頃の規律をまだ続け
身の丈の暮らしを幸と老い独り
仏間から妻が見ている花の庭
九十五まだ軽老という元氣良さ

秋田県 湊 修 水

卒寿すぎ俺の白寿もあと五年
生かされるただそれだけで丸儲け
気がつけば老けた果けたと言いつぎ
人の世の心にふれたくるまいす
年金の財布が欠伸ばばかりする

泉大津市 助川和美

ランドセルもう東大をめざしてる

娘より夫から欲しい赤いバラ

水ナスと茶漬けで元氣朝の膳

ゴミの日をネコもカラスも知っている

大阪市 若月祐作

手相には長命なれど金は無い

老い二人理解重ねて半世紀

童謡に聞きはれて妻涙ぐみ

温暖化いつまで地球もつやろか

八尾市 平川幸枝

うっとりの鏡きびしい歳を見せ

ナツメロは日記のように甦る

仲良しになりたいゆえの子の喧嘩

素朴さが歳を取ること忘れてる

八尾市 田邊浩三

一日の安心くれるお灯明

幻の古酒を片手にうっとり

うっとり曽孫抱く母仏さま

建前の陰で本音が泣いている

松江市 松浦登志子

人形をおんぶ寂しくない私

好きですと言葉のかわり柏もち

自分だけ耐えているわと三姉妹

年金の額を知らない内が花

横浜市 巖田かず枝

父の日を子等とひそひそ企画する

メールならきざな台詞もこの通り

婿殿は娘大事にしてくれる

人間も犬も肥満で悩んでる

静岡市 中西雅

三輪車主なき庭の涙雨

土手のよもぎ亡母の香りのお餅です

鶯の朝のめざめとお味噌汁

赤ワイングラスに映えて夢を呼ぶ

横浜市 布山嘉信

負け犬の遠吠えなどと余裕見せ

ノータイに心の垣根弛ませる

身を削る鍛錬秘めてテープ切る

丹精に大輪のバラ応え咲く

鳥取市 岡田信恵

ひさびさの宴会の花酔いつぶれ

健康が日頃の笑顔つくりだす

写真には心の姿かくせない

我が家でも孫の笑いに皆つられ

出雲市 川島和歌子

食材を生かして振う腕の冴え

帰る家あつて嬉しい旅終える

子に買ったゲーム遊びに親夢中

石蹴ってみてもストレス治まらぬ

大阪市 池上 清 治

新緑が坂のきつさを忘れさせ
子や孫が祝ってくれた金婚日
生涯の仕事に受けた技術賞
二年目もきれいに咲いてくれた蘭

八尾市 笹 倉 ひろし

親離れ試す娘のアイライン
よその子とすぐ見比べる嫌な親
粘り強く生きた証だごつい指
極東の端で孤独に耐えている

八尾市 西 川 義 明

九条で二度と青空焦がすまい
人間を鉄砲玉にした平和
西瓜割り思い浮かべる恋仇
うっとり読みかえしてるラブレター

羽曳野市 福 田 悦 子

夏の話ここでしようど蚊帳を買
金魚すくい競うあの日にもどれない
藤井寺自慢球場灯が消える
仏壇の家族対話の盆三日

鳥取市 中 宇 地 秀 四

自分史の中身が軽い未だ逝けぬ
老い二人今日も眼鏡とかくれんぼ
愛妻と探す四つ葉のクローバー
戦争が敵も味方も狂わせる

鳥取市 近 藤 秋 星

一生を名もない花のままで終え
明日死ぬと知らずに蝶は舞っている
父の日の父には酒が一番や
そう言えばあの娘火薬の匂いする

藤井寺市 伊 藤 アヤ子

側に居ただそれだけでとばっちり
不機嫌を治す薬を探してる
らっきょうを漬ける姑の手弾んでる
時の運 他人の所為にしたくない

生駒市 小 西 稔

子供にも妻にも弱い亭主族
大切に使う言葉が和を保つ
名人は使う道具に心こめ
かけ事をやめて笑顔の夫婦仲

神戸市 木 村 忠 義

万事処理スローテンポになってきた
いいところが似ず悪いとこ似て親子
ハングリー時代に育ちよかったな
一日がたたいまの声からわかる

八尾市 中 島 春 江

夏大根辛みも美味き味のうち
ビヤガーデン女集いて大ジョッキ
お世辞から本音ちらりと見え出した
神経痛も写ってほしいレントゲン

シドニー 三谷 たん吉

民と官入りみだれてのお詫びシヨウ

深々と下げる頭の中は謎

火が迫るヒナを抱きつつ目を閉じる

動物の親子の姿見習えよ

シドニー 坂上 のり子

靖国へ総理の意地が詣でてる

おじちゃんは恐い人かと聞いている児

いじわるっ娘がエンジェルと言う名のおかし

ああ友が夜明けも待てず旅立てり

メルボルン 藤原 ポン吉

コンピニのほうが旨いぞ機肉食

クールビズあれこれまよい汗をかく

父さんは一か八かで料理する

母さんはチラシ見比べ料理する

檀原市 藤永 実千代

体力が氣力を連れて戻り来る

褒め言葉少し増やして喜ばれ

懐かしのお国言葉が座を沸かす

縮緬と思えば楽し甲の皺

愛知県 河合 ますみ

てっぺんに一つの願い置いてある

若さっていいなシャイで謙虚で真っ直ぐで

若者の言葉足らずも旬の味

足の爪染めて娘の初夏が来る

倉吉市 西井 美美子

親切が心のゆがみ直させる

独り居のテレビと暮らす小半日

好きだよと天に向って豪語する

手の触れて互いの温い血が通う

西宮市 石野 照代

時たてばあれもたいしたことでない

死ぬほどのことだなさそう逆らわず

しがらみを切るシュレッターないものか

プライドを少しすれば楽になる

犬山市 関本 かつ子

兄弟は他人の見本 若と貴

満ち足りて乳首を離す子は眠り

嘘のない笑顔に会える山の道

子も育ち我慢の帯を解き始め

八尾市 寺川 はじむ

人情も連れて流れる郷里の川

年金が見栄を捨てろと言う祝儀

よろめきの一歩手前で覚めた夢

ジャンケンポン勝つまで止めぬ孫二歳

羽曳野市 永田 章司

ご立派の言葉の裏にある侮蔑

きれいだと言われ鏡をそっと見る

ライバルのさっぱりですに油断せず

縁切りを覚悟で友に貸すお金

唐津市 岩崎 實

電車事故切符買う手がまだ震え
明日からの生命に捧ぐ缶ビール
あるものでいいよと卵ひとつ割り
筆の穂のバネの走りに目をこらす

宇部市 高山 清子

閃きも冴えもないまま傘寿過ぎ
生きていく戒めにした過去の傷
その先を言わぬ言わせぬ思いやり
人生も諦めるなと土俵ざわ

府中市 岩本 雅代

大小の靴が並んだ夕餉の灯
華燭の日祖父も喜び涙落ち
解禁日鮎の塩焼きビール増す
初夏の風里の噂を乗せて来て

真庭市 矢谷 富士野

五月晴つがいの鶴が天を舞う
(アメリカの孫のウエディング)
よく喋る女が隣に居て困る
回り道すればもしやに逢えるかも
開花準備出来てあじさい雨を待つ

出雲市 荒木 英子

老いてなお楽しみながらお洒落する
生き延びて食後の散歩まだ元氣
パソコンの中締めだしをくう私
紫外線気くばりながら八十路入り

出雲市 加藤 スズコ

袖がふくらむみどりの風にドレミファソ
沢山食べて亡母の口ぐせ耳に住む
出会いの趣味に豊かさもう老いの春
忙しい愚痴の贅沢五七五

鳥取市 森 美智代

友達に分までらつきよう漬けてます
目にきたか明日はきつと耳だらう
踏まれても痛いと言わぬ笑顔して
忘れよう なのに小骨がささっている

鳥取市 谷岡 清子

里恋しつばめ呼び来る宙返り
夫の心笑顔でそっと開けさせる
愛犬の純な瞳が心射る
日々介護いつか希望を胸に秘め

鳥取市 河田 のり代

おふくろの味を求めてユーターン
連休は夫のダンスにリードされ
青春の映画の話題歳が冴え
青春の話題がつきぬ共白髪

倉吉市 前田 喜美子

太陽の香り一パイ布団乾す
ちぐはぐの会話している家の父母
世の中がちぐはぐになり事故だらけ
市内でもコンビニ知らぬ過疎がある

境港市 中井虎尾

和歌山市 山田侃太

万歩計いやちがいます散歩計
無洗米見つめて意味を考える

鳥取県三分の一鳥取市(合併により人口も面積も約三分の一)

いい事を書きたい日記今日も無記

米子市 小塩智加恵

近いうち伺う便り二年経ち

お葬式高い値段に生きるとす

親を越え子の栄転に旗を振る

泣き笑い憎み騙した二人です

米子市 池尾保子

まっすぐに歩ける足がうらやまし

消灯後窓から光さしてきた

やがては一人残る茶碗のさみしさよ

遺したいかやぶき屋根の一軒家

鳥取県 岩崎和子

一枚の葉書に熱い思いこめ

サンルーム洗濯物のよい乾き

若しかして神の試練か手の痛み

行く先は細い糸でも縫深く

鳥取県 毎田信雄

癒されるストレス求め山に野に

親よりも先に逝くとは不孝者

ふる里を送りたいけど箱がない

ノータイに謹厳居士の顔歪む

髭がピンネズミを捕つてきたらしい
日曜の朝のビールはよく回る

老兵を無口にさせるドキュメント

怪獣も英雄も皆アルバイト

和歌山県 木村徑子

子育ての難所にザイル届かない

メール飛び今日もポストはハングリー

きな臭い星でたつぷりディナーショー

ロボットに介護されてるかも未来

奈良市 田中賢治

縄のれん出ると弱虫虎になり

外交の下手な国ほど銭遣い

太陽は使ってくれと今日も照り

国敗れ大和桜も根が弱り

尼崎市 小池幸子

指一本動く家電と共に住む

風鈴の揺れてもうすぐ夏が来る

指先を忠実に使つて老い払う

明日の日を生きる希望の風を読む

尼崎市 桑原東園

ダイエット今朝も揺れてる体重計

したいことあるからあの世未だ逝けぬ

連休の靴がお出掛け待っている

瞳が合つてパントマイムの気が揺れる

尼崎市 古川 正子

八重桜つつじも咲いて北の土地
白百合の一輪咲いて仏前に
梔子の蕾ふくらむ雨を待つ
指切りした幼い頃の夢を見る

篠山市 永井 かほる

夕立がもう少しほしい電が降る
九十歳電の大きさを初めてと
折角の野菜も電でだいなしに
一日のお休み畠気にかかる

三田市 福田 好文

にわか雨干された布団気がもめる
2DK孫にせがまれかくれんぼ
いい目覚めよしと言飛び起きる
向日葵の律義決して北向かず

西脇市 七反田 順子

宙を舞う風に方向聞いてみる
宝島インターネット探査する
島唄は心酔わせる味をもつ
ゆつくりと背伸びしている日曜日

兵庫県 岩 本 美緒子

空見上げる犬が愛しい雨二日
六甲おろしの歌が好きです加勢する
焼なすに生姜醤油の旬の味
教えるは学ぶことよと趣味の道

大阪市 平 嶋 美智子

腰糞などいかがでしようかクールビズ
我が家では働きもののウチワです
朝顔の蕾を一つ見つけた日
当り前の顔で朝顔花をつけ

大阪市 平 井 露 芳

交流のお陰見られたバの試合
兵隊を守る兵隊いるイラク
知らぬ間に何処で打ったか青いあざ
吉本を儲けさせてるテレビ局

大阪市 中 村 れんげ

何もかも歳のせいだと今日も暮れ
駆けた日々思い出に見る夕茜
孫悲鳴みみずが出たと走り来る
大正っ子みみず蛙もお友達

大阪市 中 村 忠 敬

ロボットに介護されてる明日の俺
よう飲んだツケが来ました肝臓に
人生の始め終りはオムツなり
くだいたら何と道連れ五十年

大阪市 吉 川 弘 泰

ペット猫 人間よりも肥大病
海遊館寿司ネタ泳ぐ赤青が
顔はども化粧をしない肌の色
口の中踊って美味い時価の味

大阪市 吉内 タカ子

若葉風蝶といつしよに浮かれだす

しこり解け新たな靴で散歩する

茶柱が立つたぐらいで上機嫌

ストレスを溜めて鳴かないかこの鳥

門真市 矢阪 英雄

葱坊主種を伝える役果す

葱の筒蛸を入れた自然どこ

イベントで蛸驚く街の水

蛸たち今夜ゲストで羽忙し

河内長野市 内海 綾乃

老眼で百均眼鏡たんと持つ

はけ防止鏡に笑い練習す

立つだけで大騒ぎされパンダちゃん

趣味は手話ボランティアする孫娘

岸和田市 森元 ふみよ

枯れた文字恩師絶筆たからもの

老い一人夜半物音身構えて

期待して身構えていて肩すかし

亡き夫に報い世話するポチ元氣

岸和田市 中岡 香代

表では奉仕裏では別の顔

白黒を灰色にして生きる知恵

真つすぐに社から帰れば妻の部下

根回しが過ぎ腹の中探られる

岸和田市 林 力子

四捨五入して封をする春のうつ

独り身の気易さ同士酌む麦茶

読んで見て目次ほどではない中身

踏む音に芸が生きてる能舞台

高槻市 安田 忠子

先生とフグを食べたいもう一度

戴いたハガキ私の宝物

ごった煮のミナミになつて老舗消え

三姉妹父似母似の顔になり

高槻市 大崎 侑子

ごり押しのトップダウンで党が揺れ

二番手は手ぐすねひいて待ちかまえ

運転士選べぬ我ら運まかせ

母逝つて母の扇も舞い納め

豊中市 源田 啓生

目が合えば仔連れの猫が威嚇する

がらくたか骨董なのか捨てられず

脳の隅名前が一つ取り出せぬ

クールビズの首相の背なの薄いこと

寝屋川市 北田 ただよし

身に余る欲を捨て去り橋渡る

安心ですいつも付き添う影がある

脳洗う雑念だけが落ちてない

空梅雨に慈雨のごとくのメールくる

寝屋川市 岡 本 勲

マツケンさんば天衣無縫の孫の舞い
ちよつと夢欲しくて並ぶくじ売場
これからは夢を主食に生きていく
これからは各駅停車我が余生

寝屋川市 森 田 れい子

よく効くと魔法かけられ鏡見る
身の整理焼き捨てる物多すぎて
健康だと自慢の陰に万歩計
垣根越し一息ついて花談義

羽曳野市 松 本 静 子

散つてなお桜美し国の花
紫陽花が咲き競うなり梅雨入りか
恋文は書いて出さずに仕舞っている
愛の歌 私のキーで奏でます

東大阪市 米 田 水 昇

幼な子が水着で部屋を駆けめぐる
風光るたんぽぽの絮夢のせて
世界不和青い地球が白くなる
友の無事念じて投函月の道

東大阪市 大 塚 サキ子

こんなこと嫁に言えぬと線をひく
一線に並び園児のストーリーし
電線の雀うるさい日暮れどき
これからは独り、心に線をひく

東大阪市 今 岡 貞 人

一期一会と思う枯れ葉も捨て猫も
鬼ごっこ手になる方は汚職です
原点に戻れば明日の彩がある
影法師お前も責めていた一人

枚方市 二 宮 紫 鳳

カラフルな傘ルンルンと女学生
嫁におく距離のものさし違いすぎ
梅雨空も錆びぬ女でウォーキング
心まで解きはぐされる童唄

枚方市 小 川 良 吉

あれこれと未完のままに黄昏れる
梅雨の木曾 宿の囲炉裏は暖かい
靖国は総理の喉に刺さるトゲ
老いたれど一隅照らし恩返し

藤井寺市 増 井 ヨシ枝

ありがとう朝昼晩とありがとう
人間語解つてからのポチ不運
青空を全開にして庭師往ぬ
買物の中身が騒ぐ長話

八尾市 田 中 トシエ

わりきつて捨ててすっきり衣替え
一言の温みにふれて花が咲き
忘れたいことは忘れぬ物忘れ
馬の耳時には使うまとめ役

大阪府 西川 冷子

舟盛りの鮪の澄む眼訴える

インナーの胸誇らしく春の街

目標を定めて鴉急降下

十和田湖の水澄み過ぎて魚棲まぬ

大阪府 高木 道子

今一度生めよ増やせと国の言う

年金の懷襲う義理の風

燕に少子社会はどの風

良い噂尾ひれを付けて返される

大阪府 畑 中節子

驟雨くる虹の架け橋花菖蒲

野心捨て棚田の補植蝌蚪の散る

一人居の梅酒で酔った夕餉膳

水無月に衣替えして肌寒し

大山市 吉田 幸子

揺れ動くハートへそつと支え棒

ラストチャンス踏んで挑んで登山帽

やきもちをやけば糸口なお絡み

時間です犬は散歩へ腹時計

高岡市 青井 はつえ

眠られぬ吐いた言葉がこだまする

達筆の署名をしたい書道展

お預けをくった犬の目悲しそう

チャンネルを回せば時の顔ばかり

奥歯抜き本音がボンと軽く出る
間髪を入れぬ言い訳ウソっぽい
沈む陽は山懐が恋しいか
常識が常識でない娘の世代

昭島市 野口 忠

第17回 井笠川柳会誌上大会 薬 ひこばえ

課 題	「燃える」			共選
	塩見	草映 (松 山)	}	
	ト部	晴美 (神 戸)		
	久本	い地 (岡 山)	}	共選
	「旗 色」			
	福島	直球 (神 戸)	}	
	撫尾	清明 (佐 賀)		
	木本	朱夏 (和歌山)		

応募要領 指定の用紙又は便箋に各題2句
(計4句)を列記し、郵便番号・住所・氏名
柳名(ふりがな付)・電話番号・所属柳社名
を明記

応募料 1000円(定額小為替) 発表誌送付

締め切り 8月20日(土)

投句先 〒714-0081 岡山県笠岡市笠岡507-68

井笠川柳会宛て

TEL 0865-62-6200 FAX 0865-63-6131

賞 品 課題1位の方には石碑贈呈(2名)
句は本人の希望の句とする

主 催 井笠川柳会(日川協加盟)

残暑お見舞申し上げます

川 本 畔

〒690-0875 松江市外中原町94
電話 0852-211396

二賞選考規定（要約）

- ①路郎賞 川柳塔欄の入選句から5句
川柳塔賞 水煙抄欄の入選句から5句
昨年9月号から今年8月号までの一年間の入選句の中から自選し、8月号に刷込みの応募用紙を使用の上、8月10日必着で本社宛郵送する。
- ②第一次選は主幹・理事長・副主幹・副理事長・編集長・選考委員で行い、各賞20編ずつ選出し、第二次選者へ郵送する。
- ③第二次選者は折り返し、路郎賞、川柳塔賞の各選考結果を本社宛通知する。選考には順位をつけ、第一席（五点）、第二席（四点）、第三席（三点）、第四席（二点）、第五席（一点）の五編の番号を予め本社で用意したハガキに記入のこと。
- ④第二次選者
本社関係 主幹・理事長
地方関係 【一】ブロック（一）選者数
【北海道・東北 関東 北陸（2）】
【京都・奈良（1）】【大阪（6）】【兵庫（3）】
【和歌山（2）】【鳥取（4）】【島根（3）】
【岡山・広島・山口（2）】【四国・九州（2）】
計25名
地方関係の選者は、適宜交代制をとり、均衡をはかることにする。
- ⑤川柳塔欄・水煙抄欄に六ヶ月以上出句した人に応募資格を認める。

川柳塔社各賞選考規定

- ① 川柳塔社には、路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・茴香の花賞・一路賞・各地柳壇賞の六賞があり、毎年十月に表彰する。
 - ② 自選集の作者は、すべての賞の対象としない。
 - ③ 各賞とも、原則として同一人に同一賞を授賞しない。
 - ④ 路郎賞・川柳塔賞については、準優秀作の場合、上位は差し支えないが、同位または下位には授賞しない。
 - ⑤ 路郎賞・川柳塔賞の選者は、その任期中は路郎賞の対象としない。また、愛染帖・茴香の花欄の選者も、路郎賞の対象としない。
 - ⑥ 路郎賞・川柳塔賞の選考要領については、別途に定める。
 - ⑦ 愛染帖賞・茴香の花賞は、それぞれ選者が決定し、主幹の承認を得るものとする。
 - ⑧ 一路賞・各地柳壇賞は、それぞれの選者が候補作品を主幹に提出し、授賞句を決定する。
- （備考）
この規定は、現行の選考規定を一部改定したもので、常任理事会で承認の上、平成十二年度から実施するものとする。

平成十七年度二賞選考委員

第一次選者(八名)

河内 天笑・板尾 岳人・奥田みつ子・仁部 四郎
小島 蘭幸・西出 楓楽・前 たもつ・木本 朱夏

第二次選者(二十七名)

本社関係 河内 天笑・板尾 岳人

地方関係(二十五名)(一)内は人数 ブロック内五十音順

〔北海道・東北 関東 北陸ブロック(2)〕

大橋 政良・増田 紗弓

〔京都・奈良ブロック(1)〕 稲葉 冬葉

〔大阪ブロック(6)〕

海老池 洋・川端 一步・鶴田 遠野

長谷川呂万・板東 倫子・山本希久子

〔兵庫ブロック(3)〕

亀岡 哲子・黒田 能子・松下比ろ志

〔和歌山ブロック(2)〕 田中 みね・玉置 当代

〔鳥取ブロック(4)〕

石谷美恵子・白根 ふみ・谷口 次男・土橋はるお

〔島根ブロック(3)〕

川本 畔・岸 桂子・三島 淞丘

〔岡山・広島・山口ブロック(2)〕

岩本 笑子・古谷 節夫

〔四国・九州(2)〕 岩切 康子・小澤 幸泉

昨年九月から今年八月の間に

誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか月数の多い方を
選択して応募してください。

ただし、「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川柳
塔賞」には水煙抄欄作品からの応募となりますので、
間違いないようにお願いします。

平成十七年度各賞選者

愛染帖賞 波多野五楽庵

茴香の花賞 政岡日枝子

一路賞 富士 慕情 古久保和子

各地柳壇賞 山本 義子 吉村 一風

薫風名誉主幹を偲ぶ会

平成十七年七月七日 アウィーナ大阪葛城の間

梅雨晴れ間の薄曇りの一日であったが、偲ぶ会には遠方から、また他柳社から170名という大勢の参加があった。遺族代表として長男充氏を交えての食事会と、薫風氏の遺徳を偲び、思い出を語る二時間半であった。

司会は前にもつ、松原寿子がつとめ、はじめに一分間の黙祷を捧げる。

天笑主幹の挨拶では、薫風氏の存在の大きさ、四代目主幹として機関車の如く川柳塔を引つ張ってこられた足跡を思い、引き継いだ



橘高 充氏挨拶

自分も気を引き締めて頑張りたいと述べた。続いて長男充氏は、盛大な偲ぶ会の御礼と川柳に真剣に取り組んでいた生前の父を想い、未だ父がこの世にいない実感が湧かないと述べられた。

波多野五楽庵相談役の献杯の発声により、一同の箸の動く間には、生前の薫風氏披露のテープが流された。賑やかなことの好きな薫風氏であったので、談笑の中に思い出話の花が咲いたひとときである。

番傘川柳本社主幹磯野いさむ氏をはじめ、25名が、時間を分け合って思い出を語る。

磯野いさむ氏―長年のつき合いであった。薫風さんは作家藤沢桓夫氏との交流があり、御一緒させていただいた思い出がある。

泉比呂史氏―薫風子であった頃より、姫路にて、深いつながり、思い出が多くある。

久保田半蔵門氏―路郎氏の弟子だった頃に

薫風名誉主幹を偲ぶ会



五楽庵相談役の献杯

川柳界の重鎮になられる将来を予感した。

柏原幻四郎氏―朝日新聞文芸欄に私の句が掲載された折、薫風さんから「いい句を有難う」と言われた。

天根夢草氏―川柳展望を任されることになった時、帝王学を教えられた。

八木千代さん―大変目をかけていただいた。きやはく忘年句会に毎年出席下さり、会を応援して下さいました。

以下それぞれ思い出は尽きず、先生の教えに感謝と敬愛の気持を時間一杯語った。

最後に生前愛唱されていた歌二曲を合唱、奥田みつ子副主席が閉会の辞を述べた。

路郎忌・薫風名誉主幹追悼川柳大会

アウィーナ大阪葛城の間

出席者二〇名

「偲ぶ会」に引き続き同じ会場で、各地・他柳社から20名の参加を得て開会した。

まず、全員起立して薫風名誉主幹を偲んで黙祷を捧げる。板尾岳人理事長の挨拶に続き、橋高充氏は挨拶の中で先の「偲ぶ会」とは異なった、父・薫風のエピソードを語られた。

日川協・本田智彦事務局長の挨拶は「薫風さんはプロの川柳家と言える。というのは、後進の指導者を育成されたこと、また各所に川柳の足跡を残された点である」との内容であった。

おはなしは波多野五楽庵相談役。先生でも



日川協
本田智彦氏挨拶

様でもなく、尊敬をもって薫風さんと呼びたいことわり、「川柳塔」誌の平成7年から12年までの巻頭言を読み直し、薫風さんの本音を見つけて披露した。内容は次のとおり。

「薫風さんは荻先生の後を継がれ、ますます川柳を磨くことに専念されたが、一面孤独な人でなかったかと思う。それは、偉大な路郎師はじめ漢介氏、ほか親交があり川柳の研鑽とともにされた同輩俊平氏、好啓氏など多くの方の別れに耐えてこられたことが文面から窺い知ることができる。ことに小出智子さんの早い他界は、自分の後継者にと考えておられたようで、病中の気遣いにもなみなみならぬものがあり、薫風さんの落胆振りが伝わる。平成九年弘前を訪れられ、ねぶた会館で見た山車のおおくり絵の女人に、智子さんの面影を偲んでおられたと思う。」

月間賞は高瀬霜石氏（弘前市）に輝く。
司会―楓楽・朝子 記名―月子・美籠・恵子 受付―泰子・寿美・寿子・恵子・瑠美子・義子 清記―恵子・直樹

兼題「薫」

八木 千代選

コーヒートとパンが焼けたら呼ばんかて師を偲びたくて檸檬の丸かじり
黄なコート薫風さんじゃあるまいか
薫風を纏って渡る天の河
とりあえずお早うさんとさわやかに
（赤ますみ）

広辞苑日本のことば薫りたつ
母さんの薫り知らない哺乳瓶
露草をくんくん道草するベットの
鉛筆を削ると薫る少年期
遅刻してでもネーブルは食い尽くす
フェロモンにはまだ敏感な鼻である
薫香へ雑念消さん罫り口
薫風をうけとめている亀の首
香水を変えて主流へ泳ぎ着く
どか雪を排除つばきが香ります
盲導犬と止まったくちなしの薫り
サイパンの六十年へ潮薫る
命名の墨が薫っている未来
馥郁たる薫り源氏をひもとけば

一筒 春日子
洋 ばっは 夢草
方子 順風
雅文 あや子
富美子 幸子

薫る芸森光子には老いはない
風かおる庭の千草の背くらべ

いさむ
志千代

薫陶の声切々と天にあり

生くさい話はよそうれもんティー

富美子

雨薫る庭の面影うすれゆく

泰子

薫風の回廊長く昼の月

充

爽やかな薫り残したままの椅子

春蘭

金箔が剥がれて仏においたつ

能子

伽羅はおんなを時におとこを狂わせる

霜石

白檀はかけらのかけらまで薫り

幻四郎

香り高い一冊だった明治読む

義子

風薫るひとりばつちも悪くない

田鶴

枇杷剥いて夏を小さく薫らせる

美龍

風薫る丘ふるさととは変わらない

比呂史

伽羅薫る独りの部屋の充足よ

半銭

舞い終えた五枚こはぜに朱が薫る

柳弘

薫風にキトラの朱雀飛び出でよ

千代

自家製の薫りでそうめんをする

完次

あわただしく散りぬ卯月の薫り花

鹿太

風薫る台本にない科白だな

紅絵

くちなしが嫌いな妻と好きな母

和夫

午前二時は私にだけ薫る

日枝子

菊の候母と慕いし人を訪う

扶美代

佳

薫風や飛び舞うもよし白帽子

美義

無味無臭せてレモンのひとしづく

蕉子

薫るものひとつとてなき我が履歴
何かが薫るだから毎朝起きてくる
男の薫りがふつと途切れた安楽死

憲太郎
日枝子
五楽庵

人

薫るものまだ残さんか笹かざり

惠美子

地

わたくしを薫らせている生きている

智彦

天

薫風を走れば涙すぐかわく

螢

軸

生まれしもの薫らせながら昇る陽よ

兼題「風」

小松原爽介選

風ばかり読みすぎてチャンスふいにする

(生)ますみ

野の風と出合い見事に開花する

扶美代

絵本から貰った風にいやされる

恵子

炎も風も抱いた記憶のある昔

鍾造

風向きはどうあれ塔は揺るぎなし

保州

断崖の風と押し問答が続く

和子

静物画に風の通ったあとがある

(赤)ますみ

風動くまるで仏がいるように

日枝子

中心を外れ涼しい風を知る

黒兎

叫んでも風は吹きたい方に吹く

房子

風紋に貝殻節が良く似合う

肇

分別を脱いで本日風小僧

真理子

昭和史の風をつかんだまま老いる

恵子



句会風景

淋しくて風に絡んだ事がある

愿

いつだって風に抱かれるのは女

美津子

捨て切れぬ四十年の吹き溜り

慕情

無人駅あの子も風になったのか

義

生き方が違う男と風の中

一風

呱呱の声風さわやかに連れてくる

見清

背を丸めひそかに風を読んでいる

楓楽

一陣の風から貰う比喩暗喩

日の出

日の丸が激しく揺れる風当たり

幻四郎

パンザイ岬の風が哭きやむ日があるか

鹿太

理不尽な風なら避けて通れない

西

風よけになろうときこちなく笑う

(浅)美智子

(志) 千代

五月病風とお出かけしませんが
ちいさい人間です風上を信じない
煩惱の命するまに向かい風

比呂史

千歩

千秀

千里

大輪

日の出

大輪

すみえ

さくら

知子

アキ

良知

啓子

隆盛

ダン吉

サナエ

求芽

正子

幹齊

天笑

たもつ

知子

地

風ひとつ抱いた夫婦の箸の位置

天

風のように男は良心と消えた

軸

末席にいるのは風を抱く男

兼題「島」

泉

比呂史選

ふりこ

充子

鹿太

賢子

恭子

義

明子

夢草

照子

孝一

いつふみ

玄也

重人

真理子

希久子

恵子

半銭

郁夫

大輪

良子

お魚に不自由をしない島の医者

鳥唄は粘り強さを忘れない

かたくなに四季守り抜く島の自負

島を出る決意をさせたのは波止場

やがてきつと出て行く子らを島育て

七人の敵から逃げて帰る島

不揃いの蝶を干して島貧し

夕映えをひとり占めする離れ島

淋しくて島にもどつて来たカモメ

島を出ぬ一生だった祖母の機

飛び出した島よ帰っていいですか

何もない島で暮らして母達者

カメラマンが惚れて何度も通う島

連絡船が一遍減ると言う噂

もめている島とは知らぬ海の青

神様がいる日本という島がある

沖繩に今も眠っているいくさ

この島を出ねば私がダメになる

ボンボン船に乗って優しい島に着く

花嫁募集島の魚は旨すぎる

嫁がくる島がまるごと笑いだす

サイパン島雨に打たれて両陛下

佳

島に名を残す男のうたごころ

百歳が働く島の大漁旗

たつお

新一

正明

三成

紅絵

(島) 美智子

幻四郎

俣子

扶美代

紅絵

咲二

半銭

聖水

恵子

光枝

螢

知子

扶美代

(赤) ますみ

和子

千春

久峰

恵美子

千歩

(八) 千代

ばあちゃんが一番上手い島の唄
乗りついでふるさとの島もう間近

知子 梓

ふる里はみかんの花で埋まる島

祥昭

母さんも島も小さな点になる

充子

天

運動会島全体の笑い声

良子

軸

軽く水運び生涯島を出ず

兼題「路」

牧浦

完次選

路地裏に時々ベンツとまってる

利昭

独りになった女を困らせる迷路

扶美代

路肩にはアキレス腱が置いてある

森子

進路でも迷って退路でも迷う

幸子

路線バス時に傍観者の顔で

サナエ

私を呼ぶ声がする細い路

半銭

蟻一匹熊野路を行くほどの生

由一

岐路に立つと動物園に行ってみる

義

どいてどいてとふらふらと一輪車

かすみ

鼻柱折られ見つかからない退路

玄也

市役所へ路面電車で行ける町

啓子

路線変更まだわたしには足がある

信子

他所の子も叱るおっちゃん路地に住む

いつふみ

ひまわりの路で振り出しに戻る

みつこ



路郎先生胸像

カーナビが教える路は混んでいる
結局は自分の路で生きている

春日子
三成

托鉢を素通りさせぬくい路地

たつお

姥捨てへ路銀不足で現在地

いさむ

女一人幅が邪魔している通路

みつこ

路の下にまだビー玉が眠っている

良子

路地裏から猫がだんだんいなくなる

日枝子

居酒屋の関所が怖い帰り路

ばつは

不条理へ座るしかない路がある

幸生

目葉をたつぷり迷路から抜ける

富喜子

路地の奥太平洋がよく見える

充子

出る理由あつて道路に出るのみず

岳人

逃げ路を一つ残した関の声

夢草

妖しい路地地とおとなのオモチャ屋が並ぶ

五楽庵

八十路過ぎ片付け残る種種雑多

幻四郎

迂回路の奥で充電して帰る

呂万

何処をどう来たのか蝶の傷だらけ
路地裏におでんコンニャク煮えている

充子 蓄水

人情を探して路地に辿り着く

富美子

入口が出口になってしまった迷路

新一

花街の路地近道に使こてます

義子

土の道ばかり探して歩いてる

泰子

捨てるだけ捨ててすっきり脳回路

誠

理路整然だからおかしくなってくる

ダン吉

花曇茶室とても素敵な路が好き

雅文

どの路を曲がってもわたしはわたし

義

迂回路に妻が地雷を埋めたげな

直樹

十字路に唐菱木が立っている

螢

住

つまらない路だムカデも通らない

一筒

路地裏で青い鱗を光らせる

森子

三叉路の真ん中辺の物忘れ

アキ

梅山の路へ減量しておこう

一步

この路に間違い無いかたつむり

萌

人

たくさんの方を待たせてある黄泉路

ルイ子

地

どの路もコンクリートで顔が無い

日の出

天

路問えば笑つてばかり道祖神

茂雄

軸

迂回路の奥で充電して帰る

兼題「似」 磯野 いさむ選

寅さんに似た主人だが憎めない
 クールビス似合ってるわに出る遣る気
 谷さんちどっちに似ても憎めない
 模倣からまずはスタートする絵筆
 志ならずモンマルトルで似顔描く
 そつくりの直美へ寛美乗り移る
 父に似た羅漢に逢った梅雨の道
 死火山のふりをしてる休火山
 師の真似をしつついしか師を越える
 真似て真似てやがて大人になつていく
 黒木瞳に似てるわたしを許されよ
 似たような愚痴を酒場の隅で聞く
 オヤ君も酸素ボンベを持つている
 スニーカー似合う女でひとり旅
 似顔絵は少し美人に描いて売れ
 似て非なる故に平和になれぬ神
 犯人の似顔絵に似て歩けない
 似てますね一言居士の僕がいる
 森光子のでんぐり返り真似てみる
 自画像がちつと僕に似てこない
 ご先祖の誰に似たのかハンサムだ
 親に似た電話の声がドラマ生む
 ベレー帽似合う可愛く歳を取る
 プリマドンナに似てる明るい嫁と住む

瑞枝 智彦 紀乃 能子 美明 保州 ダン吉 東吉 求芽 章子 扶美代 惠姜子 誠 知子 日枝子 楓楽 霜石 三成 楓楽 正司 明子 克己 ふりこ

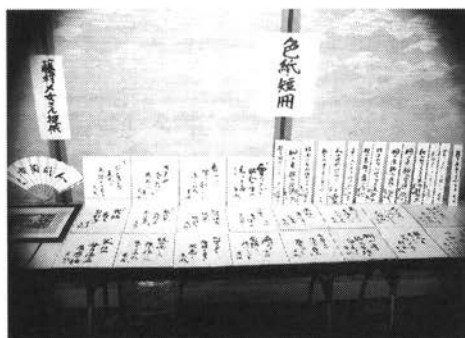
運不運功罪年々相似たり
 あの河もこの河も似て母なる河
 文武両道孫は私に似とるんじや
 藤十郎顔被りの中祖父に似る
 反発の父子酒乱の癖も似る
 贗作か否か鑑定士も割れる
 同姓同名似ても似つかね他人様
 似た過去を持って互いにひかれあう
 ワインより僕には似合う発泡酒
 音痴だけ俺に似るなと子に願う
 青いつばい使い魁夷を真似ている
 贗作も信じる者はすくわれる
 5人の娘みんな妻似てようしゃべる
 モナリザの微笑を妻が真似てくる
 母に似て来たね鏡の顔に言い
 ほうらほら君も天狗に似てきたよ
 母に似てやさしく育つ袖だたみ
 似た手口に脇の甘さを突つかれる
 佳
 私に似てくれましたサクラサク
 おたやんでお人好しです母に似て
 浮世絵を見事に真似たゴッホの絵
 似合わない人に持たれてウィトン泣く
 しゃべらなきやヨン様に似た夫です
 人
 路郎忘に似ると言う句を噛みしめる
 雅城

求芽 弥生 正子 克己 正明 明子 柳弘 玄也 恭昌 弘風 光枝 なきさ ばつは 比呂史 美智子 紀乃 たず子 久峰 潤子 寿美 あや子 句多留

地に似た地藏菩薩に手を合わせ
 天
 自画像を天女に似せて描く驕り
 軸
 似たくすりだが母は大阪製を服む
 兼題「子」 河内 天笑選
 まっすぐに子供見守るお母さん
 三歳が親分家族みな子分
 あずかって振り回されて孫帰る
 子の頭みなバリカンの世話になり
 長男も長女も健康優良児
 子のわるさ知らんふりしてのさばらす
 子の部屋に無断で入り叱られる
 親亀が転げで子亀が自立する
 子が来る日父は玄関はいている
 とんぴが鷹生んで子らとは遠く住む
 身勝手な産めよ増やせのリバイバル
 私の子国の宝として育て
 失恋をすぐ乗り越える俺の子だ
 肩たたき券でだいぶん恩を売る
 子供等に金は遺さんこにする
 夢語る男の中にいる子供
 子会社は土日出勤しています
 仲良きは美しきこと子に残す
 月 鐘 造 朋 月 久峰 鹿太 富姜子 たもつ 寿美 千恵子 とし子 霜石 夢草 月子 扶美代 克己 幸子

一人っ子なのに俺には似てくれず
 梅雨明けを良い子になって待っている
 五人の子育てで謙虚な胸となる
 大声で子のため唄う反戦歌
 一人っ子抱き癖ついたまま育ち
 あゝ頃の父の気持ち判りかけ
 発想は子供に借りておくといひ
 定年の波子の代へ打ち寄せる
 子育てを終えてベットにかかりきり
 他人の子叱る勇気を咎められ
 医者の子はやっぱり医者になっている
 少子化で私が遊びたいのです
 口笛を吹いて息子が消えて行く
 できちゃってよかったこんないい子だよ
 親孝行してないされるはずもない
 許してる顔だと子供読んでいる
 子を案じ親を案じている家族
 心配の種の子供をさすかった
 花いちもんめ背きつづけた子も戻る
 筆順を間違えたまま子に教え
 子離れをしてはいかがと鳩時計
 友達を大事にしてる子に安堵
 何時からか妻が子供に愚痴を言う
 子も不感甘え上手な母になる

幸雀
 赤ますみ
 誠
 楓 楽
 希久子
 尚 士
 信 子
 文
 倫 子
 高 栄
 利 昭
 和 夫
 理 恵
 紅 絵
 半 銭
 能 子
 千 代
 千 代
 義
 ばつは
 いわゑ
 啓 子
 泰 子
 佳
 扶美代



薫風先生揮毫の色紙・短冊

鬼の子が鬼に育つて芸を越す
 中三と家の廊下ですれ違ふ
 子離れを決めた揃いのスニーカー
 やさしさを忘れぬ強さ子に願ひ

人
 アフリカの子供たちから遠くいる
 地
 地
 天
 子供部屋ブラックホールかもしれぬ
 軸
 僕にないものをこの子が持っている

ひさ乃
 耕 治
 ダン吉
 梓
 完 司
 泰 子
 霜 石

第15回「太平記の里」

全国川柳大会開催要項

主催 太田市・太田市川柳協会他
 後援 市教育委員会・(社)全日本川柳協会他
 日時 11月20日(日)9時半から 締切11時半
 会場 太田市福祉会館 0276-4518291

第一部(当日参加者)

課題と選者 各題2句、表現法自由(新作)

「ときめき」今川乱風・「声」川俣喜猿
 「走る」竹本瓢太郎・「育てる」萩原柳絮

「戯れ」成田弧舟・「浜辺」田中寿々夢
 「輝く」太田紀伊子・「友」てじま晩秋

特別課題「頑張る」羽田桐柳

参加費 3000円(昼食・記念品・発表誌)

第二部(郵送での参加者)

宿題「渡る」

選者 斎藤大雄・大野風柳・西来みわ
 河内天笑・磯野いさむ・本田智彦

小松原爽介・吉岡龍城

応募方法 2句詠、参加費1000円と郵送

第一部、第二部の特選句中最優秀句に句碑

前夜祭(5000円)出席・宿泊要申込み

締切り 9月30日(金)当日消印有効

投句・申込み先 〒373 081 太田市飯田町818

「太平記の里」川柳大会係

(TEL 0276-4518291)

愛染帖

波多野五楽庵選

大阪市 前 たもつ

人間を極めることのむずかしさ
わが影に笑われぬよう背を伸ばす

和歌山県 三宅 保州

モナリザの涙はすみれ色だろう
内緒だから遠いポストへ入れに行く

和歌山県 木本 朱夏

閉所恐怖症のわたしを棺に収めるな
芸の無い象の寂しい目を見たか

東京都 やまぐち珠美

星屑を食べると残り火が痛む
まじろんだ掌にあるはずのあなたの手

富田林市 池 森子

女も妻も母もしずかな足音に
晒すほど眩しくなってきた本音

樺原市 安土 理恵

罪状を花封筒で突きつける
秘すれば花 身勝手すぎやしませんか

弘前市 高瀬 霜石

血液はサラサラ嘘をつきとおす
靴脱いで背広を脱いで宿六に

弘前市 斉藤 昐

核心に触れると動く古時計
親指が躊躇している花鏡

弘前市 櫻庭 順風

転校は十回ぐれぬしたたかさ
母の故郷でうかつに医専合格す

和歌山県 桜井 千秀

喜怒哀楽もほどほど頭脳空回り
爪を噛む癖は幼い頃のままだ

和歌山県 林 瑞枝

係累を結んで紐は輪になった
足跡を音なく残す風に乗る

八王子市 播本 充子

挨拶は交わさぬ貸金庫の中
深い闇どっちつかずの風が吹く

八尾市 村上ミツ子

小波が静かな闘志秘めている
うつつりとしているうちに追い越され

堺市 矢倉 五月

通行人Aで哲学抱いている
お世辞にニッコリ反応した迂闊

弘前市 高橋 岳水

見返せばわが非に至ることばかり
口数がすぎるニトロ口を持たしとく

大洲市 中居 善信

みんな好き迷惑ですか罪ですか
中岡 妙

尼崎市 長浜 美籠

鉛筆を転がし鬱が消えやらぬ
花の街 人も生き生きしています

米子市 澤田 千春

決心をつけてたんだ女尊
あゝの音は私の夢を弾く音

大阪市 神夏磯典子

赤鉛筆一本だけで姦しい
人生のもしもがつなぐ応援歌

出雲市 園山多賀子

いい人をやめて余生の肩おろす
寝められてあつと驚く振りをする

鳥取市 田村 邦昭

呑み込めば私のものになる科白
きょうの日をまさか まさかで生きのびる

八尾市 吉村 一風

よく喋るなにか怯えているらしい
ふわふわと煙のような妻がいる

藤井寺市 太田扶美代

ありがとうございましたが聞こえない
乾杯のあとと消えないわだかまり

岡山市 井上柳五郎

倒産の記事にわが身をおいてみる
美祿市 安平次弘道

四條畷市 吉岡 修

大阪市 岩崎 公誠

鳥取市 土橋 螢

唐津市 樋口 輝夫

母と娘の合わせ鏡がずれてゆく
羽曳野市 吉川 寿美

七夕の笹キミの名とボクの名と
藤井寺市 高田美代子

能面の裏に素顔の美しさ
倉敷市 小野 克枝

騙されてからの財布が頑固です
弘前市 相馬 銀波

どれくらい歩いただろう迷い道
弘前市 福士 慕情

もったいない風がこの世に吹いている
西宮市 牧測富喜子

青いまま大人になったニート族
和歌山市 武本 碧

なつかしいひとがでてきて眠られぬ
和歌山県 辻内 次根

逃げやすい場所へのつそり来て座る
鳥取市 土橋はるお

口縫うて言わない事に決めて居る
海南市 谷口 義男

すっきりとしたくてここで妥協する
大和高田市 鍛原 千里

愛されておんなの堀は浅くなる
和歌山市 柏原 夕胡

ひとりの計ひとつの椅子が温かい
藤井寺市 鴨谷瑠美子

脳細胞ほどに食欲減って来ず
熊本県 高野 宵草

議定書の後押しをするクールビズ
枚方市 丹後屋 肇

光らない椅子が一番役に立つ
和歌山市 楠見 章子

おせっかいな切り取り線に乗せられる
寝屋川市 籠島 恵子

だまされる方に生まれた柿の種
羽曳野市 森下 一知

さつき満開遅い返事 wait っている
弘前市 宮崎ヒサ子

五月雨に古い記憶が疼きた
和歌山市 榎原 公子

てのひらに包み切れない義理の数
奈良市 乾 春雄

ここに来てもう生き方は変えられぬ
河内長野市 坂上 淳司

皮算用 首尾は上々だったはず
倉吉市 松本よしえ

良妻を演じる帽子深くする
米子市 小塩智加恵

生活力あつて女の自己主張
高知市 小川でるみ

殿方の視線でおんな取り戻す
大阪府 澤田 和重

認知症 昔ゆびきりした男
大阪市 板東 倫子

うつらうつらと仏の膝によりかかり
西宮市 西口いわゑ

じゃんけんばん あいこをずっと続けたい
池田市 栗田 久子

窮すれば通じた頃の人情味
和歌山市 福本 英子

独りではないよと風があとを押す
尼崎市 田辺 鹿太

忘れたい過去引きずって風の駅
枚方市 海老池 洋

八合目あたりが僕の正念場
和歌山市 喜田 准一

遠い日の終戦偲ぶ蟬時雨
藤井寺市 中島 志洋

忘れたいものみな白し夏の足袋
富田林市 片岡智恵子

へまばかりしつかりしたい日々である
米子市 青戸 田鶴

大泣きをしてから涙甘くなり
寝屋川市 森 茜

正直がときどき馬鹿に見えてくる
大洲市 花岡 順子

騙されてまた騙されてお人好し
和歌山市 田中 みね

運命がかわり女の細い道
鳥取市 福田 登美

人柄がときどき変わる人だもの
鳥取市 夏目 一粋

口裏を合わせてからの不整脈
鳥取市 岸本 安章

言い訳に使った風邪に居座られ
羽曳野市 吉村久仁雄

違う部屋同じテレビを見てた妻
三田市 堀 正和

急ブレーキかけたことない縄電車
唐津市 久保 正剣

高知県 桑名 孝雄

人生いろいろ まあまあまで世が丸い

倉吉市 山中 康子

ぐるぐると回る梯子をもてあます

美作市 福原 悦子

偶然の返事に少し裏がある

泉佐野市 備後三子

あじさいも癒しの雨に深呼吸

東大阪市 北村 賢子

怖いもの何も無かつたうさぎ小屋

日立市 加藤 権悟

八月の疵を引き摺る影法師

松江市 川本 畔

詫び状を書くどくだみが揺れている

松江市 三島 淞丘

かたくなな貝の心を抉け開ける

鳥取市 土橋 睦子

どうしようも無いから同じ愚痴を言う

交野市 田岡 九好

平凡の日々平凡になり切れず

和歌山県 中後 清史

義理の数重なり過ぎた火の車

寝屋川市 北田たよし

脳細胞エロス模様更新中

和歌山市 古久保和子

リサイクルショップに他人の傷ばかり

高槻市 乙倉 武史

人間を忘れ時々有頂天

西宮市 片山 忠

年金でスロライフもいいものだ

鳥取市 西川 和子

思い出の捻子巻いている古時計

弘前市 岡本 花匠

多情多恨 噂はねのけ月を呑む

倉敷市 井上 富子

今までの努力が泡になる迷い

和泉市 横山 捷也

冗談の隅に本音が見え隠れ

岸和田市 雪本 珠子

灼熱の恋も冷凍されたまま

藤井寺市 若松 雅枝

まだ明日があると信じてペンを執る

交野市 山川日出子

時流れ現在未来過去となる

寝屋川市 富山ルイ子

歳月は残酷 君にもわたしにも

横浜市 金森 徳三

耐えている人の背中が丸くなる

富田林市 中井 アキ

目立たない位置で妬心に蓋をする

高槻市 富田 美義

人生は一個の生涯ひとつの死

高槻市 左右田泰雄

手触りで掴む微妙な勘どころ

今治市 塩路よしみ

身の程を知って背伸びをせずに生き

茨木市 藤井 正雄

目を閉じて心の奥を問いたです

唐津市 仁部 四郎

アレはアレ裁判官の黒い服

大和郡山市 坊農 柳弘

伝説で終らせたくない第九条

唐津市 宗 水笑

お喋り屋 聞きませぬのに曝け出し

池田市 北出 北朗

本心は背に男の泣き笑い

米子市 白根 ふみ

肉身を葬り愛が欠けてゆく

八尾市 田邊 浩三

目に入れて痛くない子が目に余り

東かがわ市 川崎ひかり

倅せを夫から子からもろてます

堺市 羽田野洋介

ゆつたりがやつと分かった古希の意地

鳥取市 美田 旋風

運転免許やめて老人らしくする

羽曳野市 徳山みつこ

父さんをもう雨傘は迎えない

倉吉市 野口 節子

断絶を知らぬ茶の間のほの明かり

箕面市 出口セツ子

日々の色少し薄れてくる夫婦

豊中市 安藤寿美子

西瓜ころころ むかしむかしの夏休み

池田市 上嶋 幸雀

紫陽花の本音知りたい雨が降る

美作市 山本 玉恵

夕陽背に今日満ち足りた老夫婦

鳥取県 竹信 照彦

気が付けば振り時計の無い我が家

誹風柳多留二四篇研究 81

山田昭夫・伊吹和男
大野秀二・小栗清吾
橋本秀信・粕谷長生

清 博美・佐藤要人

638 目出たいとまつ金屏風から仕舞 口喜

清 金屏風と言え、先ず祭に飾る借物の金屏風と考えてよい。本句も、その借物の金屏風。祭が終わったので、何はさておいて金屏風から片づける。疵でも付けようものなら大変なことになる。とまで考えたが、「目出度い」とあるから婚礼かも知れず。

小栗 確かに祭の金屏風が圧倒的に多いが、祭が終わったあとに「めでたい」というものか、どうもピンとこない。婚礼がお産の金屏風ではないか。

橋本 同右。「めでたい」という語からして婚礼とするのが妥当と思う。
佐藤 同。

639 二条通りを白くでうの追人かけ 石斧

清 「白くでう」は白張或は白丁と書き、濁らずに「はくちよう」と訓むようだ。白布で作った狩衣で、ひどく糊を利かせてあるらしい。

業平と二条後の逃避行に、白張を着た公家達が二条通りを追っている、というのである。

大野 白張②白布の狩衣を着た下男。かさ・くつなどを持ったり、馬の口取などするもの(日国)とあるから、公家よりは使われている下男が適切か。

佐藤 賛。同右。

640 くわん東て下女上方てハけいせい 一口

清 江戸では大日如来が下女お竹に変身、上方では普賢菩薩が遊女に変身という故事。

大日は真岡普賢は緋縮緬 二七12

山田 賛。

遊女にハばさつ下女ニハ如来也 四二28

佐藤 賛。

641 気の毒さふさた見舞に雨かふり 麦雨

清 かなり長い間無沙汰をしている知人宅があるので、久しぶりに無沙汰見舞でもしようと思かけたが、付近に来たところで俄に降雨。「これはまずい！傘を借りに寄ったのと間違えられる」というのである。正に気の毒を絵に描いたような出来事。

佐藤 賛。

642 琴と三味せん過不及の病出来 芹丈

清 「過ぎたるは及ばざるの病」と読むのであろう。

殿様が奥様とお妾を相手に奮戦、結果はお二人とも妊娠の兆候がなく、殿様だけが「過ぎたるは猶及ばざる如し」(論語)と孔子

先生が曰うまでもなく腎虚とは相成った。と
いうのであらう。

橋本 賛 なれどやはり読みは「かふきゆう」
であらう。七・五・五の句である。

佐藤 賛

643 中の丁扇子遣ひていもの札

清江

清 どうもよく分からぬ句。

中の町の茶屋が土用見舞に貰った芋の札
を、扇子で扇きながら述べている情景とでも
言うのか。中の丁・扇子と芋の札のギャップ
が面白いとでも言うのであらう。

佐藤 そのようなことならん。

644 箱入の玉川外かの国になし

窓梅

清 鉄管もビニール管も無かった江戸時代の
話。玉川上水は木管で江戸市中に配布された。
詳しくは『過眼録』。

玉川と言えは六玉川、これらの玉川には箱
入がないと、江戸を礼讃した句。

玉川を掛樋に遣ふ花の江戸

八二二

橋本 賛 四角の木管なので。

佐藤 賛

645 七十九男二十老女

川長

清 百人一首の男女別構成。男が七十九人で、
女が二十一人。合せて百人。

山田 賛 でもこういうのは何と言うのでし
ようね。謎句？駄句？

佐藤 賛

646 月のはしりを品川で和尚見る

露舟

清 「月のはしり」という成語はないようだ
が、「はしり」ということで、正月の月待を
言うのであらう。

正月早々、和尚が月待とて品川に繰込んだ
というのである。月のはしりもさることな
がら、これが今年の和尚のドラのはしりとい
う次第。

勿論、品川は月の名所でもある。

橋本 正月ではなく二十六夜待（正月と七月、
特に正月の）と思う。

佐藤 礎稿賛。礎稿も橋本説も同じことを言
っているのであらう。

647 じやと蚊の出るのハ駒込の六月 春魚

清 六月朔日は富士祭。就中駒込の富士浅間

社は大変な賑わいを見せたという。この祭に
売られたのが麦藁細工の蛇。季節柄蚊も出始
めるという次第。

「蛇が蚊を呑んだよう」という諺を意識し
ての作であらう。

蛇が出たり蚊が出たりする暑い事 玉川

佐藤 賛

648 猫におわれたで荘士ハうなされる 如雀

柏谷 荘士が夢の中で蝴蝶となった故事を句
にしたもの。猫と蝶との関連は歌舞伎種。水
木辰之助が元禄八年（二六九五）に『今源氏
六十帖』で猫となつて蝶と狂う所作が好評。
荘士の故事と歌舞伎が結びつくことにより、
荘士の話には直接登場しない猫が出てくるも
のと思われる。

句は夢の中で、蝶となった荘士は、猫に追
われてうなされたであらう、というのである。

荘士が寝言此猫めく 八二六

うなされた荘士が枕もとに猫 こと中二八

佐藤 賛。歌舞伎の舞踊劇では、獅子と蝶の
組み合わせが多いが、猫は知らない。「源氏」
の劇化すると、「柏木」あたりのものであ
らうか。

荀香のむ

政岡日枝子選

雑踏へ逃げる答えの出ないまま

あれもこれも想い出にする胡蝶蘭

春雨にぬれる相手をさがして

丁寧に生きると時間切れになる

はつてりとうぶ毛の枇杷の反抗期

紙コップ ボクの値打ちもこれ位

人起きて来ぬ間の花の付まい

沈んでは浮いては狂う鳩時計

ぬくい手で握手別れはつらいもの

手を洗い顔洗っても風邪をひく

予定のないドラマの中の丸とバツ

小路へそれてやつとゆとりが湧いてくる

完璧などとそこいらまでで止めておく

洗剤をつかう私も罪びとに

思いつきりひとり言撒く一人居て

息を呑む新芽の彩とするとさに

六月は鉄線がありつゆの足音

火中の栗を拾うつもりでない火傷

スーパールの茄子が安くてあほらしい

富田林市 中井 アキ

尼崎市 長浜 美籠

大阪市 古今堂蕉子

藤井寺市 太田扶美代

和歌山市 古久保和子

藤井寺市 高田美代子

西宮市 牧瀬富喜子

富田林市 片岡智恵子

米子市 青戸 田鶴

和歌山市 福本 英子

西宮市 西口いわゑ

米子市 野坂 なみ

米子市 白根 ふみ

鳥取市 徳田ひろこ

松江市 川本 畔

米子市 澤田 千春

尼崎市 春城 年代

羽曳野市 吉川 寿美

寝屋川市 太田とし子

女ばかり長生きしてもつまらない

ゲームばかりでブランコは錆びた音

譲られた席へまっすぐありがとう

好きな事するのに好きな人と呼ば

素麺をゆがくわたしの夏がくる

本を読むいつか忘れた軽い傷

独りでも幸せ今日も湯につかる

化粧せぬわけなど別になければ

甘えたい頃だそろそろ許そうか

煩惱はすべて忘れて花の中

火を抱いている黒髪にある記憶

信頼が針の穴から崩れ出す

明日はどうあろうと崩さないリズム

迷う日は利巧な釘が欲しくなる

子離れの切り取り線は強く押す

しがらみを切る散骨にして欲しい

しつこく歳聞くなんで野暮でしょう

ひかるもの外し優しい顔になる

キャリアです負け犬などじゃありません

輪が丸い耐えてる人もいるだろう

お偉くなって貴女を見ててそう思う

歌い踊つてもうストレスは霧の中

冷蔵庫満杯それでも何か買う

長寿村 都会育ちが狂わせる

まあいいか欲を言わずに発泡酒

大阪府 米澤 俣子

八尾市 宮崎シマ子

羽曳野市 徳山みつこ

八王子市 播本 充子

藤井寺市 鴨谷瑠美子

鳥取県 石谷美恵子

八尾市 生嶋ますみ

八尾市 村上ミツ子

大和高田市 鍛原 千里

米子市 中井 ゆき

和歌山市 松原 寿子

倉吉市 野口 節子

箕面市 出口セツ子

米子市 林 瑞枝

鳥取市 奥谷 彩子

堺市 志田 千代

和歌山市 桜井 千秀

大阪市 本間満津子

東京都 岸野あやめ

鳥取市 福田 登美

和歌山市 田中 みね

海南市 堂上 泰女

豊中市 安藤寿美子

八尾市 高杉 千歩

高知市 小川てるみ

空財布にぎって遠い虹を見る
古狸 太鼓の皮になりました

手帳から予定が消える日の怖さ

野あざみの棘に出端を挫かれる

枯れかけた根も片意地を張っている

風に吹かれて私はどこに行くのやら

長い旅つづく背の荷は軽い目に

聴く耳を持つと私に親が無い

さし当り翔んで見てはと亡母の声

飛び跳ねて帰れば流し皿の山

鏡の奥過去がときどき顔を出す

これ以上泣けば亡母も浮かばれぬ

北斗星女に七つの涙あり

垣根越し付いた薔がおしやべりで

どっこいしょ重くもないのによっこらしょ

記念樹が伸びて私は縮みだす

荒れた心をレッサーバンダが和ませる

笑顔だけ見せているのも疲れます

笑顔ならわたしも出来るボランティア

どっと山菜有難いけど忙しい

まっすぐと言われ単純とも言われ

若かったからあれもした これもした

バイバイはさよならよりは温かい

風よりも電波に乗って来る便り
ハツとする真つ赤なヒールある玄関

鳥取県 佐伯 やえ

倉吉市 米田 幸子

和歌山市 楠見 章子

鳥取市 福西 茶子

倉吉市 山中 康子

境港市 遠藤那珂子

芦屋市 黒田 能子

倉敷市 小野 克枝

大阪市 三浦千津子

東大阪市 笠井 欣子

寝屋川市 籠島 恵子

鳥取市 土橋 睦子

出雲市 園山多賀子

和歌山市 武本 碧

松江市 兼本 政子

鳥取市 録沢 風花

大阪市 板東 倫子

東かがわ市 川崎ひかり

兵庫県 中上千代子

弘前市 宮崎ヒサ子

鳥取市 永原 昌鼓

西予市 黒田 茂代

熊本県 岩切 康子

堺市 矢倉 五月
シドニー 坂上のり子

三食をかしこく食べてつづがない

盛り上がる話に寄ってくるトンボ

古い服サイズ縮めて同窓会

黄昏れてつかいかい棒が欲しくなる

日の出を拝み心洗って朝めしだ

はばかりず仮面はずして生きている

すぐ枯れるバラはドライで生きている

風の音だけ聞きながら汽車を待つ

亡き母の歴史知ってる娘ががみ

蝶の孵化みるみる内に飛んでみせ

笑うのも健康法と言ひ聞かす

赤白青 順番があり国変わる

空財布ですがしつかりコンパクト

笑い声どこか亡母似の里帰り

嘆いてはいない虚しいだけのこと

いい距離に息子が墓を建ててくれ

アキさんの句―路上観察の一体みとも言うべく、答えの出ないものを抱

えて、本当の自分を見るためにも、また自分の中から消えていかないもの

を外に出すためにも、今を抜け出す。それがいい切っ掛けになるかも知れ

ない、と言わんとしているところが上手だと思う。美穂さんの句―胡蝶蘭

は作者自身なのか、または、思ひの深い人から貰った花なのか定かではな

いが、作者の心を捕えた何かがあったに違いない。言葉には出ていないが

そのドラマが窺えるさとした回想の句になっている。蕉子さんの句―

思わずニヤリとして、読む者の気持ちを温かくさせてくれる句である。よ

くぞ言って下さった。思ひの広がりリズムよく明るさの中に、滑稽味も

見える句に仕上がっている。扶美代さんの句―信念が無くなり生きている

かどうか判らないという生き方より、自分達で人生を仕上げていく前向き

池田市 栗田 久子

倉敷市 井上 富子

米子市 小塩智加恵

和歌山市 柏原 夕胡

米子市 門脇 晶子

西脇市 七反田順子

東大阪市 佐伯 光枝

東京都 清原 悦子

今治市 塩路よしみ

大阪市 吉内タカ子

鳥取市 岸本 孝子

神戸市 田中 章子

寝屋川市 平松かすみ

神戸市 山田婦美子

橿原市 安土 理恵

米子市 池尾 保子

水着

森村 美花選



うきうきとカッパの水着を着ています
ちらりと横目水着売場に用はない
河童の子天真爛漫水着なし
初めてのビキニは風を着てるよう
水着ショールあんな背でなし胸でなし
スリッパで泳いだ頃の川が無い
還暦の海女は水着をまだまとう
わが娘でも水着は父の目に眩し
大正の母は水着を知らぬまま
老いきても着てほしいなという水着
鮮やかな水着で隙のない笑顔
濡れてない水着は少し食わせ物
ざりざりを見せる水着にある自信
昔の水着海がそっぽを向いている
紺色の水着がはしゃぐ初プール
ハンカチの二枚ぐらいの水着です
超ビキニ観賞用と書いてある
よろよちもビキニで女王張する
若さルンルン原色の水着ショール
泳ぐ娘は魔除けの赤い海水着
太陽もビキニの肌が眩しすぎ
ダイエツト足りなかったという水着

順子 (七) 日出色子 北朗 茂代 あずま 寿美 黒兎 一風 扶美代 朝子 孝一 みつこ 俣子 保州 昌鼓 愛論 雅明 強一

着膨れもないのに水着太く見え
若い子に混じり水着のクアハウス
瞬きをしない男よ水着ショール
一匹の蟻も入れぬ水着着る
ビキニ着る園児ほかにセクシーな
神主に水着まぶしい海開き
水着のまま熱い素っぴんすすつて
ハワイみやげビキニは妻のためでない
コンマ以下遅れ悔しき知る水着
三蔵児の水着オッパイ隠してる
水着笑ひこらえてる鏡
よく焼けた水着の跡が誇らしげ
いっそ脱いだら如何です水着
夜のプール水着は妖精かも知れぬ
水着売場で想い出してる初キッス
佳 新所帯凄水着が乾してある
ひまわりの笑顔ビキニがよく似合う
水着つけない清流の水しぶき
はちきれん若さ包んでいる水着
スタイルもみごとジェラシー湧く水着
人 世界を視野に飛び魚になる水着
地 戦いの水着は赤と決めている
天 水着になって入道雲と手をつなぐ
軸 真夏の夢私ビキニが似合ってる

像山 (御) 善信 悦男 (矢) 五月 美明 (志) 千代 理恵 庸佑 庸佑 シマ子 セツ子 いさお 典子 たず子 (井) 富子 妻子 夕胡 次根 玄也 (吉) 幸子 充子 一粹 高瀬霜石

海女になる前に溺れたことがある
都会には溺れる黒い潮がある
ぬるま湯に溺れなかなか浮かべない
ある日ふと溺れてみたくなる蛙
虫の音に溺れ詩人になつて
マルクスに溺れた青い桜桃
溺れてる男に助け舟ださぬ
一点の光へ告知溺れない
溺れた時もありますひとり旅
溺れてた過去は語らぬ身のこなし
七彩の夢に溺れていて孤独
溺れかけた海辺を歩くフルムーン
溺れない位置で日和見する男
溺れてる蟻に薬しべそつと投げ
溺れば枯野となるか火となるか
溺れるほどの男にはまだ会えぬ
情報のおで溺れて老いてゆく
バスコンに青いレモンが浮き沈み
溺れない深さでボクは泳ぎます
自惚れに溺れてもがく遠い岸
溺愛のベツトに顔で使われる
喝采の渦に溺れているピエロ

螢 (蘭) 輝夫 勝夫 尚士 柳弘 英旺 (告) 康子 保州 茂代 あずま 雄々 弥生 郁子 勝巳 よしみ 扶美代 隆盛 きよし ヒサ子 正雄 あやめ みつこ 勝夫 尚士 柳弘



溺れる

城 多喜選

水平線

角野 仁清選



いづつでも私のための水平線
水平線を眺めるような恋もある
半生の記憶炎える水平線
結論は水平線の上でだす

水平線に働く父を送り出す

水平線揺れる漁火妻が待つ

水平線に潜ったままの暮らし向き

水平線捨てた故郷をふと思い

水平線の向こうに父は征ったきり

人許す愛の起伏の水平線

一心へ水平線が近くなる

溺れたら水平線にしがみつく

大ジョッキ水平線を一気飲み

水平線明日も明るい朝が来る

水平線の向こうは見えぬ方がいい

明日の晴れ約束をして日が沈む

平らかにおりなさいと水平線

地平線の彼方へ還ってゆくトンボ

水平線静かに過去になってゆく

水平線ちいさい事は忘れよう

水平線の彼方に消えて生きていた

拉致の子も水平線を見てるだろ

八月忌水平線が燃えている

許されて許し水平線水久に

文学に溺れて夢がふくらんだ

四十まだ溺れるくせが直らない

あめんばの溺死に深い訳がある

溺れるに足りる深さか測ってる

あじさいの海で溺れるカタツムリ

いま一度溺れてみたい赤いバラ

街角で溺れかけてるサクランポ

吃水線理性が守り物足りぬ

溺れさすあなたの目口息つかい

人間の海で溺れたことがある

溺れたら般若心経くり返す

生きねばならぬ一すじの蘆探しつつ

溺れたり浮いたり沈んだり生きる

君の夢に少し溺れているワイン

蝶々に溺れたことは内緒です

織田作に溺れ本屋をはしこする

フラッシュに溺れてみたいカスミ草

雨と咲く花に溺れていて孤独

会者定離水に溺れてゆく枯葉

ストレスの海に溺れて行く弱者

偏差値の海で溺れた父も子も

流し難いずれ静かに沈むだろ

雨の夜は雨の情けに溺れよう

溺れたらあなた助けてくれますか

主 一郎

可 住

公 誠

千 里

美 明

慕 情

典 子

蕉 子

半 覚

とし子

たす子

九 好

善 信

渡 富

雅 明

充 子

理 恵

愛 論

玄 也

霜 石

志 千代

天 軸

高橋岳水

千 里

夕 胡

弥 生

充 子

不 二

旋 風

玄 也

愛 論

あずま

柳 弘

典 三

徳 三

美 明

秀 四

花 順

和 枝

みつこ

扶美代

あずき

浜 丘

像 山

強 一

天 軸

中居善信

初步教室

題一線

三宅保州

括弧、句読点、ルビを使うことの可否

異論も承知で言えは、これらは出来るだけ使わないようにするべきだと思います。十七音が定型である川柳の姿を守るためや、披講等で句を読み上げるとき括弧などは読み上げないし、読み上げるべきでないといふれば、その意味合いが薄れ、それらを使っていることが分からない難点もあります。本来は括弧やルビを打たなくても分かる句を心掛けるべきだと思います。例えば、「らっしやい」と迎えてくれてこそ寿司屋、という句の場合、括弧がなくてもその意が分かります。

ルビも難しい人名や地名を除いては付けないようにするとともに、著しく難解な字はできるだけ使わないようにしたいものです。

【添削・批評句】

電線でツバメの家族のミーティング 好文
運動会スタートラインに子等も立つ 映子

電線のつばめも驚く今の地震 道子

三句とも中八等の字余り。推こえます。線引いて混らないように区別する こずえ

何を区別するのでしょうか 線の上に浮かんだ数字なんとまとめ れんげ

何に浮かんだ何の数字でしょうか 境界線読み合ったり笑ったり 裕子

何の境界線が分かるように作りましょう 実線が点線になりいずれ消え ただよし

何の線でなぜ消えるのでしょうか 同胞を北と南に分けた線 いさお

説明調を避け「同胞」を「同じ血を」に 大根足諦めました脚線美 像山

上・下入れ替えるか「大根足で」としたい。 人生のボーダーライン生きている 真一

上五と下五が重複気味。「年金の」とかに 視線の中で泳がされてる夫婦仲 益子

何の視線ですか。世間とか姑とか 西東一直線の飛行雲 節子

正しくは「飛行機雲」です。 折り合えず平行線のままの人 萌

「折り合えず」と「平行線」が重なり気味 原初燕電線の上ひと休み きぬ子

添電線でひと息入れる初燕 原つばめが電線にいる落ちるなよ 順子

添電線の子つばめつつがなく育て

原電線のおかげ電化の有難み 光枝

添電化生活電線のおかげです 原境界線すれすれたる血圧値 智加恵

添辛うじて境界線の血圧値 原一直線曲り曲った勤先 信雄

添曲線も直線もあり人生譜 原あれこれと手く線引きできません 千華

添きつちりと線引きできぬ処世術 原夕焼けの水平線が燃えさせる 那珂子

添夕焼けの水平線へ肩を寄せ 原そうめんの線の細さに汗がひく 清

添そうめんの線の細さに汗がひく 原幹真線いきいきとバラ咲き乱れ ミヨノ

添有刺鉄線厭わずバラの咲き乱れ 原線路上少しはずれて生かされて 開子

添線路から外れながらも生かされて 原復旧の線路に賭ける汗と露 賢治

添復旧の線路に折る「冥福」 原路線バス老婆が一人過疎の村 藤朗

添路線バス今日もお客は私だけ 原古稀になり路線変更田舎バス 俊子

添混んでいる病院行きの路線バス 原喫水線沈めて活気運ぶ浜 冷子

添喫水を下げて大漁船帰る 原この線は越えてはならぬ男女仲 弘泰

添この線を越えてはならぬ君と僕

原宿六の視線たどれば美女ありき 英 旺
 添さりげなく視線の先に美女を置く
 原初恋は線香花火のようなもの 信 子
 添手花火のようにほかない恋だった
 原同年の計報へ目線くぎづけに 千代子
 添同年の計報は他人事でない
 原線ひいて話し小さく実を結ぶ
 添一線を引いて小さく実を結ぶ
 原住所録朱線の数が今日も増え 章 司
 添また今日も朱線が増える住所録
 原脱線続き元に戻らぬ話好き はしむ
 添脱線をしても愉快な話好き
 原線を引きおはじきしたの思い出す 静 子
 添線を引きおはじきをした童歌
 原足跡を結び迷子にたどりつき 孝 明
 添足跡を結ぶとたどりつく迷子
 原この線で生きて行こおか老一人 アヤ子
 添年金の線でどっかい生きている
 原折れ線のグラフストレス増やしてる 弘 子
 添折れ線のノルマにストレスが溜まる
 原脱線をせずに人生峠越し 水 昇
 添脱線もせずに人生峠越し
 原一線を画しそれから進む論 美恵子
 添一線を画して進まない妥協
 原流言が対角線に波及して かずみ
 添流言が無線のように飛び火する

原前線で旗を振ったが命取り
 添前線で旗振ったのが命取り
 原美望の視線が痛い背に溜る
 添美望の視線が痛いほど刺さる
 原これ以上同情の線踏み込めぬ
 添同情も立ち入りすぎぬ線を引く
 【少し工夫すれば佳くなる句】(二部添削済)
 三世代に一線画し丸く住む
 ローカル線に乗って駅弁食べに行く
 しゃがみ込み目線合わせる車椅子
 家族でも妥協できない線がある
 線引くと明日のドラマが限られる
 五線譜が揺れて童になる蛙
 直線を親が引いても子は蛇行
 線香を母に手向ける良い知らせ
 清張のとりこになった点と線
 お日さまがにつこり帰る地平線
 十重二十重完全防御紫外線
 境界線センチ単位で揉めている
 一直線に行きたい君の住む街へ
 白線の帽子なつかし応援歌
 三味線でロック奏でる新世代
 線引きをどこにするかのお付き合
 生命線途切れていてもなお元氣
 琴線に触れる他人の思いやり
 点と線結べば明日が見えてくる
 武 徑 子
 美紗子
 喜 子
 綾 乃
 政 子
 雅 代
 利 子
 起世子
 満 子
 貞 子
 忠 子
 (高)洋 子
 雅 明
 亜希子
 つよし
 稔
 宏 子
 婦美子
 孔 一
 秀 四
 イ セ

【佳句】
 真つ直ぐに生きて来たから今がある みね代
 足跡は一直線の亀の意地 昇
 線を引くわたし自身であるために 夕 胡
 新聞に赤線引いて読み返す (河)洋 子
 古里の稜線僕を丸くする 幸
 脱線をせんとお帰りしなはれや
 折れ線がまだ俯いている景氣
 正座など知らぬ美人の脚線美
 さつそうと行く伝線の脚線美
 畦道が真つ直ぐになり進む過疎
 【今月の推せん句】
 出来ころ斜線で消してしまいたい 山田典子
 「斜線」の比喩が味わい深い句にしている。
 廃線を跨ぎ故郷へ高速路 奥 時雄
 廃線と高速路という二物衝突の対比が鋭い。
 一本の線で真昼を見てる猫 坂上のり子
 「一本の線」が心憎い。「猫」は作者自身
 かも知れぬ。当教室のレベルを超えている。
 【私の句】
 蚊退治も兼ねて線香あげてます
 古里が近いローカル線軌む
 (こ)投句が増え、添削等略しています。悪し
 かず。

秀句鑑賞

同人吟 早川 棲世

— 7月号から —

与謝野晶子を勉強することがあつて、図書館から二、三冊借りてきました。中に田辺聖子さんのお書きになったものもあり、晶子に

先入観があつた私は、目からうろこの思いでした。鉄幹の「心のもゆるままにうたう、我流の歌、個の歌、自我の歌でなければならぬ」という引用がありました。明治三十三年の話です。今も同じことが言えます。

創作とは個性の表現です。前月号に個性ある渾身の句を求めました。

天に星地に人間の貧しい灯

新家 完司

この作者らしい、人いとおしのお作です。地上に貧しい灯を掲げ合っている人を、窮極で天に輝く星のように聖いものと捉えています。一見、人間を卑小猥雑なものとしながら、人間を愛さずにおれないのです。

人間のいる方へ来る夏の蠅

高島 啓子

おもしろい着眼ですな。蠅なんてどこにもいるし、人くささに興味をもっているわけ

もないけれど、このように断言されると、妙に合点してしまいます。夏の蠅はとりわけよく肥えて、ふてぶてしいのですが、心中、何かの比喩なのでしょう。もちろんこの句は、

蠅の習性を観察しているのではなく、原罪的に腐臭をもつ人間を詠んでいるのです。

橋高薫風さんも個性についてはよく話されましたし、個性列伝のようであつた不朽洞の先輩たちを、いつまでもなつかしがつていました。鉄幹の鼓舞に应じて、晶子や山川登美子が世に出るのですが、薫風さんもそれに劣らず多数の俊秀を柳壇に送り出しました。

前月号は薫風追悼号であり、同人吟にも句が多数寄せられ、薫風追慕の広さと深さを示しました。それぞれの句には、それぞれの作者が故人と共有した思い出なり、それに關する濃厚な追懐が収められています。

ヤアと手をあげて浄土へ立たれしか

木本 朱夏

薫風さん生前の風貌が目あたりに浮かび上ります。余情の濃い、さすがのお作です。

朱夏さんは先般、第一句集を上梓されたのですが、私は「転生」という書名に作者のゆれうごく心を感じました。これに対し薫風さんは、序文の中で「往きて復る」という言葉を贈っておられます。まさに師弟啐啄同時の情況を如実に見る思いです。

春眠のごとく恩師のデスマスク

大内 朝子

薫風さんが麻生路郎さんを継ぎ、柳社の運営と川柳の振興発展に、師を超える実績を残されたことは誰もが認めるところですが、満身創痍の瘦躯でそうした偉業をなしたげられた陰には、どのような苦労があつたのか、私などには想像もつきません。食物もあまりお摂りにならず、川柳への情熱をエネルギーとされたご日常から、主幹をお辞めになる時、川柳の世界から離れたいとおっしゃった心境がよくわかります。薫風さんには死に様への美学があつたようで、この句は遺句をうけ、春眠に似たデスマスクに惜別の至情と、安らかな旅立ちへの安堵感をみせます。

『橋高薫風川柳文集』を読んでいたら「知的抒情」という言葉があり、以前読んだ嶋岡晨さんの著作「詩とは何か」に「知的抒情の試み」という項があつたのを思い出しました。この二本はいわば現代詩の歩みを述べたもの

です。詩史です。百篇を越す詩が収載され、詩論が展開されています。断片的な引用で著者の意を損なつてはいけないので、ご紹介は極力控えますが、戦後の現代詩は、知性と感性が新しい均衡を得た世界、時代にふさわしい抒情詩の創造をめざしました。その中で現われた、日本人の好む万葉集以来のリズム、つまり「七五の魔」の呪縛を解く難しさ、その無批判性を指摘する論を載せています。

本書が直接短詩型に触れているわけではありませんけれど、私たちは十七音字という極端に短い詩型を選んだため、日本語がもつ特質、伝統的に獲得し、はぐくんできた余韻、余情や含意まで、必要なら貪欲に活用しようという立場です。だが私たちは「音楽的抒情によって批評」思想を失ってしまったなどとは毛頭考えていませんし、逆に句の内容によつては、「七五のリズムが持つ情緒、感傷」を拒絶します。相互の立場の違いですし、薫風文集では自由律も忌避していません。広い理解を得るためには、いい作品を示すしかありません。さらに鑑賞を進めます。

履歴書に載らない罪はたんとある

安芸田 泰 子

平易にいいながら、柳人の視線は深く鋭いのです。私のように歳をとつてくると、過去

の行状について、ふつと罪障感を覚えることがあります。それが重くなると、ドクターの診察が必要です。もう誰も記憶していない小さな過失や、思いやりの欠如が自分を責めます。しかし罪のない人なんていないわけですから、これも人生の調味料と達観しましょう。

ひとくせもふた癖もある人と住む

鴨 谷 瑠美子

ある人と交際している女性に、知人が「あの人にはこんな欠点がある」と忠告したら、「私にやさしければそれでよいの」と答えていました。偶然にそんな話を二例知っていました。女性心理の機微を衡いた作品ですが、あるいは普遍的なことも知れません。女性の包容力なり愛情、あるいは強さは、私などの理解を超えるものがあります。

取敢えずばかりで生きて来たわたし

秋 元 てる

女性の作品ですが私だつてとりあえず生きてきた強いので、共感できるお句です。もしかしたら男の方がそんな人生を送ることが多いのかも知れません。とりあえず生きながら、実は言われるまで気づかなかつた私には、それを指摘した作者が、優柔不断、主体性のない女性だと決して思えないのです。

次に、いろいろなむづかしい状況がある中で、

私たちの仲間が関東でがんばっていてくれるのはうれしい限りです。薫風さんもおよろこびであつたと伺っています。

将来が楽しみ負けつぷりがいい

播 本 充 子

丹念に丹念に千羽目も折る

小 川 賀世子

どちらのお句にも句品と愛情と、さりげないが深い洞察力があるではありませんか。最敬礼しながらいつそこの活躍を祈ります。

リンゴ剥きながらやさしくなつていた

太 田 扶美代

一読明解の見本のような作品をつくる人です。この人の句には気どつた言葉や、意表をつく表現は一切ありません。それでいて句会では、いつも高点を占めています。この句だつて日常座右の中で、人の心の深いところを見えています。至芸の作家です。

いい句を拝見すると、川柳という文芸にかかわりをもつたさいわいをしみじみ感じます。本稿をまとめる前に、前号までの秀句鑑賞を二、三拝読しました。各氏の透徹した鑑賞眼に改めて感服するとともに、批評をするということは、結局自らを語るものであるという思いをさらに強くしました。

宏言（ご容赦下さい）。

水煙抄

秀句鑑賞

— 7月号から

村上玄也

タイトルに惹かれて買った本の嘘

金子 美千代

新聞や雑誌の広告に出ている本のタイトルはいかにも人の気持ちを惹き付けるものがありますが、読んでみると何のことはない落胆させられることがしばしばです。正に看板に偽りありますが、宣伝が物言う時代です。

生き方へ比較はすまい自然体

升成 好

人にはそれぞれの生き方があります。他人と比べる事なく、構えず飾らず自分流で生きて行こうと言う主張です。「比較はすまい」に強い意志が見て取れます。

灰汁みな抜くと魂まで抜ける

岡川 無限

強烈な個性の持ち主にはそれなりの大きな魅力があります。その強烈な個性を取り除かれると、もうその人そのものではなくなりま

一人居の私を守る蚊帳をつり

福田悦子

私たちの子供のころは雷が鳴ると蚊帳の中に逃げ込んだものです。一人居の身を守ろうと自己防衛のためにつける蚊帳なのです。

鍵穴に合わない鍵をたんと持ち

神野 千恵子

色んな鍵を持ち合わせているつもりでも、世の移り変わりにうまく合う鍵が見つからない。そんな苛立ちが感じられる句です。

子供なのに遊びの予約いらしい

山田 葉子

最近の子供たちは学校から帰っても塾やプールにお稽古事にと、スケジュールが一杯。じいちゃん、ばあちゃんが急に何処かへ誘っても、おいそれとは良い返事をくれません。世の中、子供たちまで忙しくなったものです。

講演会盲点に居て舟を漕ぐ

俣野 登志子

自分の方からは盲点のように思えても、演壇からはよく見えるものです。後でよく眠ってられましたねなどと厭味を言われたりして。

遠慮がちに明るい記事も載っている

寒川 武

暗いニュースが多い中で、片隅に載っている明るい記事を見つけるとほっとします。

いつまでもちびた鉛筆捨てられず

清水英旺

戦中戦後の物不足の時代に育ったものにとって、物は大事に使い切るという習性が拭い切れません。ちびた鉛筆には、愛着さえ感じているのです。

ひらがなでしゃべるすがたのやわらかさ

羽田野 洋介

同じ言葉でも漢字とひらがなでは与える印象が大いに異なります。ひらがなで喋るとは平易に伝えると言うことであり、其処に作者は優しさ、柔らかさを感じられたのでしょうか。

あかちゃんはあくびをしなくても喜ばれ

奥 時雄

赤ちゃんが笑うと周囲を和ませます。あやしても笑ってくれないとがっかりしますが、大人相手のお愛想にも疲れて欠伸をしてもそれはそれで可愛くて周りを喜ばせます。

鈍行に乗りかえました古希の坂

二宮 栄子

歳と共に気持ちほどに手足が動かなくなりますが、覚悟を決め鈍行で行くしかないのです。

六枚目はがし吐息のカレンダー

金 森 徳三

ああ今年も半分が過ぎてしまいました。歳と共に益々月日の経過の早さを感じます。

■句集紹介

『青空もうひとつ』

高瀬 霜石

木本 朱夏

青空を差し出す名刺がわりです

弘前FMアップルウェーブのパーソナリティーであり、弘前法人会の会報紙に「霜ネタ通信」を「月間・弘前」に「霜ネタ劇場」を、また「弘前リカバリーセンター広報誌」に「川柳絵日記」をそれぞれ連載している高瀬霜石さんは、自動車部品会社の経営者でもあり超多忙な、いまが旬の川柳人である。

気分はいつもジョン・レノンという怪男児（校正ミスにあらず）霜石さんが前作「句集青空」に続いて句文集「青空もうひとつ」を出版された。

中年の証拠に深いへその穴

「僕の身体は自慢じゃないが手塚治虫とビートルズでできているんだ」と豪語する霜石さんが、お義理で参加した初句会での席題「証拠」での入選作である。この一作をひっ

さげて後年、大会荒らしの異名をとる川柳作家・高瀬霜石が誕生したのである。

「川柳／ニュースの時間」「オゾン層」「形状記憶」「ジェットコースター」「キャベツの芯」「僕のスタンド・バイミー」「珍答ものがあり」「せんりゅう放浪記・立志篇・青春篇・奮闘篇・完結篇」「せんりゅう絵日記」「東光見聞録」「頑固親父フォォーエバー」「河童と遇った新宿の夜」「妻がアタック夜」「コント・おしゃべりな容疑者」「狸の恩返し」「犬も歩けば某（校正ミスにあらず）にあたる」等々、目次にさえ霜石さんのウィットが光っている。

新宿の劇場のトイレで用を足しながら「少年日」の著者・妹尾河童に話しかけたことや、落語家・立川談志とのソバ、餃子談義などのエッセイにも霜石さんの意外な素顔が見える。「ワイハ」「はばける」「オラホ」「あずましい」「モツケ」「そんどこ」「はんかくせ」「ナモ」「ハケジョッコ」「しゃっこい」「マイネ」「トツツバレ」……なんのことが解りますか。エッセイにちりばめられた津軽弁の数々である。方言と霜石さんの個性が見事にマッチした、抱腹絶倒の句文集である。

お祝いはひーふー訃報は三つ四つ

風船をひとつ掴んだまま生きる

霜石さんは生まれてまもなく小児がんを発病、運良く助かったという。奇跡に近い確率で生き延びた霜石さんの川柳、エッセイにはひとかけらの暗さも見えない。しかし作品の背景には人生のはかなさ、切なさがほのかに見え隠れしている。

平凡な人生でいいドレミファソ

いちにちを大事に生きるよく笑う

青空をまいにち懐（貼）り付ける

川柳もエッセイもさることながら、霜石さんのベストバートナー（奥様）が撮影された「著者近影」は一見の価値がある。「僕が間違つて本を出すようなことがあつたら、こんな著者近影にしたいものだ、学生時代から思っていた」という霜石さんのこだわりの「著者近影」である。ぜひ本書を手にご尊顔をお確かめいただきたい。

ある時はエッセイスト、またある時はパーソナリティー、またまたある時は映画評論家、しかしてその実態は……？

津軽が生んだ天才・寺山修司にも比肩する才能の持ち主、川柳界の快人・二十面相・高瀬霜石さんの今後をますます楽しみにしたい。

背景はいつも青空です 敬具

■新刊紹介

『青空もうひとつ』

高瀬霜石川柳&エッセイ

田中 正芳

著者は今から九年前、柳友の矢本大雪氏と天地をさかさまにし、互いに紹介文を書いた句集『青空』(大雪氏は『驟雨』)を出版したことがあるので、今回の題名は『青空もうひとつ』。十九年となる川柳人生の中で、平成十五年秋から十六年夏にかけて、①「路郎賞」受賞②FMラジオ番組出演千回③東奥日報「世相川柳」掲載千回④「文部科学大臣奨励賞」受賞という大きな節目を迎えて、一冊の本を作ることにしたという。

初めは、弘前法人会の会報に連載している「霜ネタ通信」やミニコミ誌「月刊・弘前」連載の「霜ネタ劇場」などに執筆したエッセイをまとめようと思っていたところ、夫人の只野ゆきこ(ペンネーム)さんから「川柳人なのに、せっかくの自分の本に川柳を入れないうの」と言われて、句文集へ方向転換したら

しい。まず、奥付の「著者近影」が、片手を上げて道路に写る著者の影法師だったのにはアツと驚かされた。

さて、A5判一七四頁の川柳&エッセイには、川柳一八〇句とエッセイ四二編が収録されている。平成十五年八月号本誌のむくじ下に掲載された「僕はラッキーマン」で、ゼロ歳時に病気で片方失明したことに始まり、父・母・弟・義父をめぐる身辺雑記、企業経営者としてのエピソードなどがつづられており、団塊世代にあたる著者のほぼ全容がストリップされている。

川柳との関わり合いについては、「川柳放浪記 立志篇」とそれに続く「青春篇・奮闘篇・完結篇」で川柳との出会い、中学生の作品に出稼ぎの父の長靴はいてみる

に出会って川柳観が一八〇度転換したこと、また、時実新子に認められて「川柳大学」設立同人になったが、編集について意見を述べたところ、「退学者第一号」となったことなどに、反骨の一面が窺える。やはり取引先との対応で、麻生路郎の句――

古くとも僕には仁義礼智信

をメモして渡すという「川柳エッセ」の記述が、この人の本領かも知れない。

このほか、全番組を自主制作する地元のFMラジオ局に毎週五日間、十分間の「霜石のやじうま川柳」を始めることとなった経緯を書いた「アップルウエーブ事始」や夫人との合作「せんりゅう絵日記」など、興味ある文章が少なくない。

終わりに、「川柳／ニュースの時間」から「川柳／工事中」まで、七章に分けて二四句ずつ掲載された作品からピックアップして、紹介に代えることとする。

雑巾をゆつくり絞る消費税

耳掃除したことがないお役人

日の丸は銀行ばかり可愛いがる

映画館で生まれ古本屋で育った

暗闇にわたしのオゾン層がある

友だちはちよつぱり変な人がいい

形状記憶夜になったら酒を飲む

軸足を昭和に置いたまま生きる

旅から帰ると誰かが死んでいる

人生という名のジェットコースター

背景はいつも青空です 敬具

平凡な人生でいいドレミファソ

明日食う米があるから急がない

ニッポンは八月アメリカは九月

我が街もわたしも道路工事中

編輯部

— 103 —

遊んでる脳呼びとますパズル解き
名目は視察外遊する議員
遊ばれているとは知らず金貢ぐ
一度だけ遊んだことがばれちゃった
遊びではない生甲斐と居直った
遊び足らんと柩の中で声がする
麻雀をしながら死ねば本望だ
人生も遊びも父の背で学ぶ
山菜の虜となつて野に遊ぶ
幸せと思う両手で野良仕事
口よりも介護する手のぬくもりを
手を握り妻の生死を祈つてた
まだここ生きていますと手を上げる
手の上に乗せて夫を躍らせる
手の中の玉よ輝け未来まで
あれこれと注文出すのは腹の虫
親の気も知らず注文ウニククラ
くちづけ位でも注文をつけたがる
ビールも酒も焼酎も持つてこい
注文がない仏滅のお寺さん
葬儀屋は注文取りに回れない
注文が多く縁談まともならぬ

東大阪市川柳同好会 森下 愛論報

てこずらす新人生が一人居る
人形のような新人生の顔
新人生小中高と居るわが家
新人生母さん悩む衣装見せ
戦後処理問う日の丸が嫌われる

たけ代 龍枝 富恵 美美子 玲坊 節子 完司 美知江 重忠 きみ子 貴恵 紀美恵 三津子 幸子 清 滋 公恵 美ツ千 螢 石花菜 博文 孝恵

ついて来る後ろの影の薄いこと
安心の後ろに妻が居てくれる
旗振つていても後ろは雑魚ばかり
悔い残す劣等感に火を点ける
やるだけはやった今更悔いはない
精一杯気張つて負けて悔いはない
やつぱりの噂をとはず路地すずめ
糠漬けはやつぱり母が一番だ
医師の眼がそこで止まった内視鏡
絵手紙の桜嬉し旧友の顔
花散つて女の湖が深くなる
花植えるとても優しい男の手
間違いを糺してどちらも悔いている
川柳塔おとり 鈴木 弘報

章久 シマ子 克己 雅文 三重子 和子 良子 秀夫 雅文 美子 湖風 美弥子 愛論 和子 道子 舍人 真一 清子 黙光 艶子 知恵 幸次郎 一弘 登美 風花 小生 以和乃津

佳句地十選 (7月号から)

清水 絹子

七十億いて地球一つが守られず 松輝夫
追っかける男も追っかけられて 不朽
五十年添うて上げ底みとめあい (高) 勝
生きてゆく見果てぬ夢を追いつながら
ふり向けば笑顔の母は川向こう
勝てるはずおこりで足を拘われる
まん中に鬼が一匹居て平和
案々と人生越えた山はない
立ち止るたびに勇気をくれる杖
汗かいて歩く瞳に嘘はない
悦子 集一 章久 八重子 隆盛 小雪 正剣

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

スピードをあげぬと秋の陽は早い 由多香

自販機に傷つけられた自尊心
スタイルがだんだん亡母に似てきたな
亡き夫よあれから七年どうしてる
ひとりごと言ってみました露天風呂
古女房あつからんと愚痴を聞き
生きざまを母の姿に教えられ
一億円総理なら許される
墓参り無沙汰に妻の一周忌
川柳塔みちのく 小寺 花峯報
やんわりと怒りを包む母の海
お祈りのかなたを飛んでいる螢
千加子

飛び立つた子らを偲んで茶をする
青空に咳払いする嘘ひとつ

柳子

思い切りシートカットで飛んでみる
天気予報あたらずそのように晴れ

誠子

嘘のない親友同士の酒の席
写生するのバレットも緑溶く

洋子

幾千年飛んで埴輪が目を覚ます
豪雪に耐えて芽吹いてくる生命

準人

嘘ついで心に傷がぶら下がる
傷心をやんわり包む母ころ

ヒサ子

一片のバセリ料理に色を添え
おつかなびつくりやんわりと抱く長子

愁女

外濠を埋める気配を見せておく
やんわりと脳味噌ついてくる熱燭

ふさあ

やんわりと降りられそうな雲の海
やんわりと諭す言葉に刺がない

雅城

ふるさとの山にやんわり包まれる
やんわりと母の情けにすがりつく

花匠

五葉庵

高槻川柳サークル卯の花 瀧本きよし報

五葉庵

湯上がりに一本欲しい宿の朝
きつかけは隣り合わせた雨宿り

秀夫

芍薬の少し乱れて宿浴衣
蛭とぶ宿で引退考える

泰雄

子の意見ここまで成つたなと折れる
折れて出たその悔しさに夜が白む

恵美子

角折れてからがほんまの母になる
札束を見せたら簡単に折れた

宵草

砂輝守

八斗諒

この辺で折れると目途はついてる
子は宝金の不自由我慢する

佐代子

不便さを求め鈍行徒歩の旅
不自由な手足にケアの車椅子

照子

土地勘はないが飲み屋に不自由せず
何の不自由もないのがこわい近未来

孝一

持ち駒がないもおまへん負けですわ
今日も暇何か楽しみおまへんか

稲子

おまへんなア言いつつ商談よく進む
心まで透ける内視鏡おまへんか

美義

税金でそりやおまへんで空残業
フルムーン夢は豪華な船の旅

祐作

フルムーンより友達と行くと言う
フルムーン今日のかあちゃんよく喋る

治三郎

年金が無ければ僕も粗大ごみ
計の知らせ声が潤んでる電話

義一

ひとときを花と語らう妻がいる
友が近く閻魔の誘い強すぎて

高栄

生き下手のまま字余りで生きている
鯉古と無口交互に来る見舞

求芽

遠回りしたらと月に教えられ
人間が軽くてすぐに舞い上がる

武史

岸和田川柳会 原 さよ子報

宏章

役者の子一人前に見えを切り
おねだりは一枚上の孫役者

庸佑

善人を演じおどおどする役者
老い二人こたつとみかんで足りる冬

半蔵門

不器量なみかが残る籠の中

美籠

報いたい一念看とり引き受ける
記念樹の下で報いる花見酒

昭

丹精を色で報いる牡丹咲く
いつまでも机の奥に社の名刺

ゆり子

名刺代わり貰って今は塀の中
印籠のごとく名刺にもの言わせ

野添

肩書きで埋めた名刺にある驕り
昼と夜名刺も別の顔になり

みつ江

出世した友の名刺が眩しすぎ
主婦として夫が名刺がわりです

淳子

それぞれに思い出うかぶ古名刺
きつときと来てねと渡す花名刺

笑司

絶筆の恩師がくれた枯れた文字
独特のくせ字が味の友の文

香代

判らぬが何か心をうつ梵字
計報聞き追憶たどる文字のあと

守

母の日に感謝を文字でプレゼント
さかさまの字もある孫の初便り

浅子

ありがとあった五文字に癒される
性格が文字に出ている四角い字

弘基

丸文字に思いを込めるラフレター
文字の下手同温みを分かち合い

力子

点字追う少女の指に明日がある
絵か文字かわからぬ文字の書道展

ふみよ

切られ役いつか主役の夢がある

一脩

合掌の中に蛭が棲んでいる
夢つかむ掌いつも磨いている

洋

竹原川柳会 時広 一路報

みね代

房枝

甚一

東吉

蘭幸

掌でぱつと光ったかくや姫
掌のしあわせという皺の数
掌にしつくりとこの紙風船
道草が大好き僕の句読点
曲がり道ばかり不安になるゴール
指切りをした横町の曲がり角
背の高さ五センチ縮み曲がる腰
曲がり角女はおんな意識する
曲がる事なく貫いたゴッホの黄
急カーブまさかまさかの大惨事
埋まらない胃袋にある深い穴
空が青くただそれだけで幸せよ
立ち止まり新緑の風受けてみる
チョコが好きまだまだ子供だと思
う
いつだって言葉飾らぬ友が好き
節くれの私カラット似合わない
お隣も飾りにピアノ置いてある
いただいた額を飾って城とする
人生の終まで笑顔飾れるか
桜吹雪盆飾るだけでいい
着飾って着飾ってトップのひとり
千年杉を飾るしめ縄父が胸う
観覧料無料で星が飾る空

川柳ふうもん吟社

夏目

一粒報

コンピニがあるから僕はまだ飢えぬ
豊かさって何コンピニの二十五時
難聴をよそおい図星はぐらかす
とじくそで困らせた子が看てくれる
美恵子

洋々
無限
志げ緒
美恵子

民 半 比 史 規 正 静 慶 厚 万 孝 寿 千 房 輝 栄 汎 笑 不 淑 一
恵 覚 呂 子 夫 代 宏 風 子 子 枝 子 恵 恵 美 子 朽 路

五月晴れジャンプで空と握手する
援助米貰って核の保有国
火のドラマ水のドラマものり越える
オレオレに我もとじくそ言い返す
ちぐはぐな船頭国が蛇行する
一年で嫌天下の地位築く
コンピニで足りる世相に有るうつろ
とじくそのようで収支が合っている
夫婦げんか互いに図星の掛け違ひ
ちぐはぐの元はボタンの掛け違い
とじくそこに描いた時だけはめられる
知ってても図星さなぬは大人だね
図星では言えない言葉あるはずだ
とじくでもない事言う許さぬぞ
言い訳がちぐはぐ接ぎ種見当たらぬ
ちぐはぐな雑魚をはきだす地引き網
見えるのか妻は図星で攻めてくる
ちぐはぐな手足緊張して歩く
ちぐはぐな答え本音は胸に置く
図星とはどんな星かと空見上げ
七十年生きて創った顔である
コンピニに冷麵の旗夏が来た
満開のあざみは彩で刺隠す
美人だがあの人きつと男だよ
図星指す声が末席から聞こえ
暮らしたコンピニ欠かせなくなった
川柳塔きやらぼく
福代 天雀報

陽を追うてポブラの影が濃くなる
天雀

房 秀 雅 金 昌 富 良 春 裕 喜 善 朋 友 秀 敬 重 智 美 悦 節 一 義 孝 一 孝 主 一 暮
江 夫 女 祥 鼓 士 子 名 美 子 夫 恵 四 介 忠 子 雪 子 子 京 徳 男 瑤 郎 粒

わたくしを守ってくれた傘を干す
一度も着ずにタンスの中で眠ってる
憎しみを着せ合うことはもう止めよう
連休にひたすら孫の帰りを待つ
産声の瞬間光った若いパパ
修羅幾度越えて終章近くなる
珍しい今日はあの人着物だわ
次つきと眼鏡を替えて見る世相
人間大好きうまいそば屋を知っている
こつそりとタマは裏から朝帰り
肩書きの数と仮面が一致する
天星の涙か蝶か桜散る(醍醐の桜
薔薇の下都わすれも負けてない
愛無限としも届くわらび餅
とき汁をのこし筒待っている
酸素補給尻尾も活き活きと振れる
ステンドグラスに安定剤しずめ
こだわりがすつかり解けて空仰ぐ
赤信号にかわり犯人見失う
死なぬ限りは仏も朝のお茶を飲む
長 柳 会
村上 直樹報

あんとすこし人生という綱渡り
パソコンに悪戦苦闘すぐ忘れ
新婚のソフたけなく今このうち
さよならとソフた帽振り去った彼
古希越えて人生ソフたわかりかけ
かあさんの夏の手抜きは冷や奴
雨上がりみどり鮮やか蘇生する
ひろし

千 晶 初 瑞 紫 雪 春 杏
絵 子 枝 枝 泉 江 枝
す み え
ふ み
寿 々 子
那 珂 子
や え
恵 子
日 枝 子
玲 子
亜 弥
千 代

直 樹
不 二 雄
孝 彦
明 信
康 博
ひろし

愛犬をソフトに撫でて癒される
ヨソ様のソフトな笑顔しびれさせ
ソフトだがきつい上司の目に怯む
謝って男ソフトに鼻を引く

八十路過ぎ渡った橋を振り返る
湖渡る風さわやかに恋生れ

争いと風雨に耐えて生きてきた
無我夢中渡った日々よ過去の橋

世渡りの下手な夫が今も好き
大輪のあじさい煙る雨の庭

雨除けになつてあげるとプロポーズ
めりはりをつけ夕立は好い男

何かある妻の笑顔がソフト過ぎ
知らぬ間に妻に渡つていたタクト

火の匂い消えて心はやわらかい
雨あられ妻の小言が飛んで来る

雨しどと流して欲しいものいくつ
逢いに行くワイバー揺れている至福

冷奴四角四面の立ち姿
小糠雨愛を溶かさぬように降り

仁部 四郎報

川柳塔唐津

楽天が勝つと日本中にホッ
老いの酔い遣言めいた愚痴が増え

へだてなくみんな仰いだ月まろし
日本の関取りも居る千秋楽

胸のうしろ顔にほんのり出るピンク
楽しみの老いの畑作弥生式

桜見はお城山より鏡山

正一 武男 けい子 英美 マサ もこ 輝子 三和子 幸雄 敬二 史 芳野 和代 正美 よしお たけし 一慧 和子 淳子 正子

悪人じゃないが似合つたしたり顔
怒つたら敵が増えると言うテレビ
百点をつけると妻がつけあがる

川柳塔なら 坊農 柳弘報

郷愁のゆとり匠がひとりごと
ひとりばち思惑する般若経
花弁には真つ赤な思惑においます

思惑は自作自演のスケジュール
恋人ができてテンボが狂いだす
五十年やつとテンボが合つてきた

掛け持ちのお経テンボが速すぎる
したたかなライバルだけいい男
そんなはずないと男のしたたかさ

したたかな女に受けた向こう傷
ほとんどが妻の思惑通りなる
思惑が父の言葉で遠くする

大阪のテンボで歩く花のバリ
したたかな女背中で泣いている
したたかな男が泣いた母の通夜

二世帯住宅老後の思惑が実る
したたかな奴といつも敬遠され
ワンテンボはずし喜劇をくり返す

割り勘と聞いたら速くなるテンボ
思惑をまた狂わした水溜まり
師匠からひと筆もらい絵も生きた

口ポットも匠の技は盗めない
太陽の塔は太郎の顔で立つ
親の夢見込みはずれて子はニート

四郎 輝夫 高明 敏子 カズ子 ふりこ 孝子 博一 千梢 太一 絹子 冬雄 茂雄 まつお 芳香 真理子 理恵 春雄 美千子 春蘭 惠美子 卓 國治 一風 弘風 良一 恭昌

復元の釘一本に匠の目
生きいきと生きる暮らしにあるテンボ
お大師とテンボの合つた遍路笠
したたかに女は涙武器にする

バラとワイン抱いた男が来る夜更け
石に聞き石に相談する匠

尼崎いくしま川柳会 春城武庫坊報

明日と言う時間へ続く今日生きる
毎日をゆらゆら揺れて猫じやらし
右か左ゆれる心は決め兼ねて

俗塵を離れて揺れるハンモック
瞳が合つてバントマイムの気が揺れる
八十で揺れて論語に叱られる

負け犬と言われ価値観揺れてくる
男性が小指を手話に使つてる
握手した指の温みを信じよう

老斑の指の先から夏になる
シヨッピング女は目下充電中
傷口を見せ合っている老女たち

失敗を恐れず挑戦老い愉し
おかげさまで口癖にしてまだ元気
見たことは何も語らぬあめんぼう

男には誰にも見せぬ影がある

川柳ささやま 遠山 可住報

冗談を飛ばして彼は行ったきり
ツーカーの同情立場共にして
嫁入りのテレビ今だに物置に

秋雄 朝盛 隆美 寿美 富子 重人 宏一 しづ子 千恵 純 東園 勝巳 半蔵門 昭三 武庫坊 薫 守弘 年代 幸子 紀乃 久子 寛之 恵美 純子 章

あなたに逢う一つ安定剤とする
美しく咲かせてみたい老いの花
眼の手術テレビこんなに綺麗な
定食で旅がまとまる昼やすみ
サスペンス会話も増えて脳刺激
定食の一品ふやす季節もの
ときめきの出逢いもあつた髪染める
年金の枠で余生を美しく
千匹の鬼と仏に会つて喜寿
パチンコで出会ひ無沙汰しています
京都塔の会
都倉
求芽報

美緒子 文子 美紗子 多美子 開子 かほる つや子 八重子 哲男 可住 宏子 たもつ たす子 輝美 則彦 求芽 ますお 和子 益子 美穂 福子 満子 義典 義典 子 義典 子 義典 子

脳味噌のほころびを縫っている余生
これからをどう縫い返す白喪服
ジグザグのこころの髪を縫っている
ブライドを背なに縫い込み生きている
口コミのたこ焼き回る散歩道
散歩ではないリハビリをしています
京散歩徒然草をポケットに
司馬遼の本と青葉の散歩道
木漏れ日を浴びてぶらぶら御堂筋
人のいるところを選んで散歩する
喧嘩して気持ちを変えて散歩道
老母の散歩犬も歩調を合わせてる
下校する子らに目配り散歩道
高知川柳社
川竹
松風報

百合子 シマ子 富喜子 すみ子 庸佑 正坊 寿美子 萬的 啓子 光子 啓子 英子 葉子 動弘 孝雄 京子 快風 功 和江 竹萌 幸 美々 てるみ 則子 典雄 千鳥 松風

不安感ナースはすでに知っている
薄情な天使ナースの傷の処置
川柳大阪 高木 信辭報
ぼそぼそと祖母つばやいて探し物
地球博並んで待つて日が暮れる
ストレスも枝垂れ桜に酔わされる
地球博東西冷戦もう昔
孫産まれ冷めた夫婦に灯がともる
ホームラン打ってたねとアルバム見
二人共若かったねとアルバム見
一つ釜の飯で築いてきた絆
冷めた目で私の嘘をじつと聞く
冷めないよう顔を見てから作ります
別れ際今日の君って綺麗なだよ
秘訣などおまへん汗の量だろ
まやかしの秘訣本屋に並んでる
冷めた身をこたつて猫と暖をとる
じんわりと男の骨を抜く秘訣
喧嘩して共にミカンをむいて食べ
夫婦愛記念日忘れぬこれ秘訣
成功もしてない人が秘訣説く
ほかされん腹をいためた我が子です
女房を欺く秘訣最早なし
日米の関係その内冷めるやろ
子育てはギョツと抱くのがまず秘訣
張りのあるお肌秘訣は恋らしい
生きのびる今日正直の善を追う
散歩犬が主役か俺なのか

あい子 暖 民 ひろゑ タカ子 いわお 五月 利昭 修 宏 芳香 孝一 ダン吉 東吉 いつわ 朝子 章久 珠生 善純 功 彦太 敏 柳昌 美花 洛醉 喜楽

ときどきは妻は甘えるのが秘訣
共通の願ひ九条守らねば

冷めている政治をだめにした総理
ほかすなら頂戴うちのよりエエテレビ
ごみ無いかあんだだけよと妻がいい

川柳塔鹿野みか月

土橋

男性と女性温もり合うがよい
足湯から男と女たわむれる

新札を見たくて金を出しに行く

新札を囲み夕餉にぎやか

新札に折り目をつけてさようなら

新札もやがて漂う紙になり

村中に猫一匹もいない世で

霞食べて生きてような事を言う

男勝りの母でも父にはなれぬ

Eカップ東男に京女

地球には男と女不思議だな

あらまあと弾む女と会う男

ハーフから女の機微を教えられ

童話読む時計の針を止めておく

紅い糸男と女よくもつれ

オーロミオあこがれてる六十路坂

デイトですお前が来ると邪魔になる

新札がいつは欲しいのし袋

封筒の新札探す置き忘れ

旅浴衣ごちを着てもいい背丈

花霞こころ躍ってゆく野山

豪快に新札出して買うおんな

笑風

一歩

すがお

まつお

信醉

螢報

八重子

かおる

八重

保子

みどり

富久江

武子

幸枝

実満

節子

房子

かつ乃

宣子

小鹿

彩子

みさ子

公子

和子

睦子

孔美子

茶子

はるお

砂丘ゆく男と女ラブソング

神さまが新札食べて知らんふり

なんとなくおはさん口が軽くなる

みどりを軽く遊ばせている夏陽

子供でも女を守る男の子

対等へ大黒柱揺れている

睦まじく夫婦で老けることにする

それからは男の陰にいる女

三幸川柳教室

古久保和子報

母バナナさくらんぼ盛る白い皿

期待ばかり盛られエンストする車

盛り上げて天下ご免の花見酒

大盛りでなければ済まぬ祭り鮎

よせ書きへ温い言葉の盛り合わせ

他人ならたんとお飲みと言え酒

無責任な火種を煽るのは他人

歯車の軋み他人が先気付く

温もりも冷たさもあり他人の手

他人など見向きもしない街の顔

生き生きともぐら叩きをする他人

幼稚園で習った歌は忘れない

わらべ歌幼馴染みが笑顔だす

童謡なら今でも吹けるハーモニカ

赤とんぼ亡母と歌った道がある

ふる里の村の鍛冶屋も消えていた

夕焼け小焼けゴミ当番はおとうさん

ぼっぱっぱ豆より多い鳩の数

くに子

菊乃

久枝

汲香

野草

弘子

諷人

螢

桂香

起世子

かずみ

靖子

次根

八重子

登美代

昇

千秀

碧

義男

公子

信子

一步

武

当代

イセ

保州

みね

レコード盤の傷でさつちゃん通せんぼ

切り替えが早く陽気に立ち直る

一ランク落とせば元の陽気な子

陽気だといわれ時どき酸欠に

笑い袋少し陽気になりすぎた

底抜けに陽気な妻という疲れ

山笑うおにぎり食べに來いと呼ぶ

春陽気浮かれ財布の夢のあと

この陽気きつと地球の更年期

いい陽気洗濯物を探し出す

おにぎりが売り切れました春つらら

川柳塔わかやま吟社

牛尾

批判した父の姿に似て生きる

人の世や癒されるのも癒すのも

熱烈も程よく冷めて共白髪

一喝の父が恋しい反抗期

すきな道行けと許した父が好き

父に似し夫を選びし自慢の子

来年の約束をする花の宴

祝宴に一句を添えるメッセージ

ウツフツ宴の後のお楽しみ

宴佳境そろそろ十八番出る頃だ

総会がひけて勇躍宴の顔

花の宴さくら吹雪を猪口で受け

金魚ひらひら今日の私を癒せるか

相槌を打ってくれたら癒される

やすらぎで満ちるあなたの腕の中

癒しの空間六畳の小宇宙

和一

准一

幸

章子

幹子

智三

徑子

町子

義雄

美子

朱夏

緑良報

泰女

緑良

紀久子

富美子

三喜天

和

英子

智三

克子

實子

千代子

豊太

輝子

保州

夕胡

三男

星月夜心をくれた人がいる

テロ撲滅悲しみ癒える日を祈る

胸の傷夫のお陰で癒される

世直しへ燃える男の体当たり

お静かに信じすぎてはいませんか

熱烈な想いをこぼす薔薇の青

熱烈歓迎で飛んで来た卵

熱烈な一生をきく蟬しぐれ

官製の熱烈小旗打ち振って

女傑ふとわが熱烈が怖くなる

熱烈に首相迎えた日もあった

熱烈に思えた日々は夢のごと

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

泰 和子

利 治

あきこ

寿 子

准 一

裕 美

愿

さち子

小 雪

順 子

弘 直

能 子

シマ子

あずき

慶 子

香 住

欣史子

ますみ

喜美子

能子報

黒田

西宮北口川柳会

梅雨入りの微熱に少し気がめいる

水やりをすました後に雨が降り

雨風に負けじと前に傘を出し

梅雨めいて愛の神話も湿り勝ち

春 蘭

旅の宿河鹿鳴き添う遣らず雨
出不精の男に雨という味方
雨蛙雨の予告に顔を出す
程々に塩ふりかけて舵を取る
価値観が違い戸惑う事ばかり
参観日親も戸惑う綴り方
戸惑うてやがて頼れる母になる
モノクロの夢に振りたい塩胡椒
お湯割りに減塩の梅入である
塩効いているわだつみの反戦歌
条件は犬もセツトでお奥入れ
ロスタイムセツトブレで勝ち奪う
宇宙とのセツトだらうか生も死も
大ジョッキ笑いとセツトなら似合う
はんばいの寄せてセツトのハイセンス
気まぐれに言うたことばに縛られる
苦勞した分は隠しておく笑顔
優しさがふんわりしみて来るメール
古い古い青春賛歌聞いている
どんな球来ても必ず受けたげる
向い合いやんわり口で論す母
重たくて文句つきたい広辞苑
雰囲気を変えて安らぐ一輪挿し
君が代を知っているかと子が尋ね
日々好日戸惑いもなく五月晴れ
逃げて行く若さへ心染め直す

俗世は美酒を友とす盃のこし

はたる川柳同好会

水野

黒兎報

契 子

光 久

嘉 彦

開 子

歳 子

一 之

章 子

孝 一

美 籠

松 煙

哲 男

い わ ぬ

奮 水

昭 三

比 ろ 志

朋 月

文

石 舟

五 月

江 美

婦 美 子

順 子

鹿 太

いたる

自分でも俗だと思っかけうどん
教室の窓の鯨と昼寝する
ふわふわの布団かえって寝つけない
吉本のドタバタ演技脛うけし
ふわふわと逆さに映るシャボン玉
延命治療いらぬと決めて薬になり
言い分を小出し小出しにして粘る
コーヒ一杯貴方とならば粘れそう
妻値切る粘る五分の長いこと
五十場所の粘りも効かす時代逝く
浜風のもつて風船Vロード
どう決めても終りは釈迦の手のひらに
ふわふわと年金孫にとんでいく
欠席を決めてポストへ遠まわり
すり鉢になじむ鰯のハンバーグ
俗人にかえり西行花と逝く
パイブルに通俗本の見えかくれ

倉吉川柳会

竹信

照彦報

民営化だんだん腰がひくくなり
民衆を煽ってデモが過熱する
民法は難しいから読んどらん
ブルガリア福井大使は民間人
受信料いらぬ民放ばかり見る
政治家の顔に国民映らない
脳味噌の崩れる音が聞えてる
体形を崩そうとする風の音
自尊心おしおき部屋で崩れだす
鏡の割れ目顔を崩して映しだす

勇 治
黒 兎
正 三 郎
い さ む
信 男
敵 子
久 子
昭 子
雪 子
緑 骨
柳 童
桂 子
見 清
春 代
憲 治
禮 子
勝

遠足の隊列崩すどんどろけ
土砂崩れ朝出た夫が変り果て

ピラミッド孫が立つてる崩すなよ

これ以上野望を抱くと荷崩れだ

おそ咲きの息子に蝶がやとと来た

やれやれだ四十九日が済みました

汗かいて野麦峠をやとと越え

やれやれどうにか六十五になった

烏賊飯ができてやれやれパンクする

今日無事に合掌をしてひとり寝る

好きなのにやれやれ牡蛎もノロウイルス

手の鳴る方に夢の黄色は高くとある

ひまわりへ少女の霊は天高く

あの世まで山吹色に目が眩む

白寿まで生きて黄ばんだ遺言状

自転車の黄色い声が追い越した

くちばしの黄色いやつがチャチャ入れる

一番に目立ちたがり屋の黄色です

半分はいつ突つ込む黄信号

定年まで無事に勤めて老いている

翠洋会 谷口

迷い箸きつく叱つた母だった

左ききを右へ持たせた親の愛

安い割箸安な裂け方して困る

地球儀のミサイル箸でつまみ出す

父の弁当割箸元氣運んでる

この峠越すと幸せ来るのかも

父の歳越えて越せない河内節

重忠

秋草

風露

かつみ

日出子

石花菜

次男

鬼一

和子

螢

龍枝

季芳

康子

節子

京子

萩江

悠子

修彦

照彦

義報

正坊

春

良一

日の出

孝一

照也

捷也

先輩をとびこす栄転うまい酒
裏こしにされた男の土性骨

子の月日背も知識も親を越す

ライバルを越す助走路が短すぎ

靖国参拝近くて近い国にせず

どの車輛安全ですかJ.R

人間界見たいパンダが立ち上がる

母が待つ何はともあれジェンキンス

ノーネクタイなんや国会締まらない

クールビズ敢えてネクタイプレゼント

愛染さん夏の祭りのはしりです

夜半の老母こそこそしやと認知症

綱渡りもう年金が入る頃

根つからの職人父の重い口

来た道を帰ろう他に策はない

天高し今日から早苗一人立ち

絵手紙が幸せくれた花の色

流鏑馬を見てから乗馬好きになり

ゆとりある一日風もやわらかい

同じ年それぞれ生きて今の顔

しばらくは羽根を畳んで時を待つ

南大阪川柳会 吉川

何と彼も許しゆるされ六十年

何はともあれ今日も元氣でありがとう

あの世でも根回しの金用意する

あなたの過去私の過去も置くあの世

会いたい人がいっぱい待っているあの世

あの世への説明会を寺で聴く

恭昌

富子

みつ子

昭

蕉子

志華子

理恵

叡子

桃花

満作

会美

絹子

千梢

石舟

義

さと美

蛙

舞夢

美籠

すみ子

尚士

壽美報

叡子

寿美

きらり

雅文

利昭

直子

回り道で拾う小さな幸もある
よく笑いよく食べあの世遠くする

大仏のかいお膝に眠りたし

でかいこと言う叔父さんはセニがない

ひこばえはでつかい森の夢を抱く

怠けよう時どき僕を野に放つ

打ちとけて噂と違う良さを知る

疑問点解けてすつきり帰路に付く

起こされてまた寝てしまいう怠け者

角砂糖ゆつくりとける別れなり

相棒にした口ポットさがしてる

相棒の分まで肩にかかる老い

七人の敵相棒も数のうち

マンネリで清く正しく生きている

相棒の心信じているザイル

相棒が時どきする影法師

相棒は狐ときめている狸

割り勘で相棒のグチ聞かされる

相棒を見捨てた事が一度ある

マンネリの海で溺れているピエロ

相棒と仏になれる露天風呂

相棒と地図のない道程を旅

相棒のおかげでメシを食べてます

足腰をきたえあの世を遠くする

はびきの市民川柳会 徳山みつこ報

ペン一本も殺せる恋もする

喜怒哀楽ペン一本が出す本音

いつわりを書くペンの字がかすがち

萬の

楓楽

更紗

修

志華子

ダン吉

弘子

初太郎

弘泰

千里

日出子

シマ子

柳伸

集一

朝子

たもつ

修

遠野

昌紀

柳弘

タカ子

ひさ乃

重人

なぎさ

六点

悦子

志洋

確信がありしつかりとベンで書く
楽天の大型新人まだ勝てぬ

玄関に父を追いつくすデカイ靴

大型のテレビ居る鬼小屋

列にいる誰かに当たるジャンボくじ

のど自慢地方なまりがなつかしい

お取り寄せ地方の名菓に舌つつみ

ミス一つ地方記者へと出た辞令

南から寒い地方へ出た辞令

何となく動作が鈍い支社帰り

のんびりと田舎暮らしがしてみたい

ハルウララ地方競馬の人気者

地場産の美味しいうめろン届く頃

無人駅旨い地酒とめぐり会う

少子化の村から消えた赤トンボ

炎天に平和を守る列が行く

最後には天に頼れと母が言う

オカリナの音が溶け込む青い天

わが夫は天上の星まもつてね

天敵は口の達者な小さい孫

天国に行っても軟派しはります

私を天地無用で届けられ

天を見つめる男の足が地に付かず

五月晴れ天下とりあいて夫婦

天地無用疚しいことはなにもない

尼崎浜川柳会

山田

耕治報

通りすぎた男が覗く夏帽子
五十年愛という字に縛られる

晴美
五月

人並の暮しに馴れて平和はけ
五十年愛しつづけた人並に
あたたかい人に逢うのよきれいでしょ
赤トンボ唄えば浮かぶ母のせな
東京で四年学んだニート君
軋んでる時代もあった台所
無口だが父の瞳は欺けぬ
妻旅行茶の間で猫と飯を食う
気にするな言う父さんの広い胸
父の日か何も言わずに去るだけ
勝った日は真つ先に買うスポーツ紙
山脈を染めて夕陽のシンフォニー
逃げ道を少し残して折れておく
焼いもの皮に充値が書いてある
父と酌めば酒の琥珀が深くなる
峰々に負けへんの声訝する
賞罰もなく人並に生きている
山脈を見渡すように立つ墓標
幸せの山脈子の峰孫の峰
人並と思う泣くのも笑うのも
格好は悪いが芳醇ですわだし

川柳藤井寺

高田美代子報

よし子
カズ子
里江
亀子
昭三
イサミ
まさ
きよし
勝巳
朋治
朋月
正治
孝一
義芳
比志
全彦
江美
桃花
求芽
鹿太
美籠

消えかけた命大きな夢を見る
手の中に夢を握って生まれる子
少年の日の夢今も抱いて古希
漬け物になる大根が軒にある
B野菜漬物にしてAクラス
菌の奥に嘘と漬け物絡んでる
古漬の皺に家伝の味がある
本心は沢庵だけでよい料理
ぬか漬が日本支えて来たんだよ
糟糠の妻と迎えた金婚日
もうカンパンですと漬物出してくる
沢庵をかじる舞妓のおちよは口
ヒロインに成ろうなうと紅シヨーガ
さまよえる胡瓜はビクルスとなった
全力を出しきりました負けました
さわやかな風一杯の鯉職
熟睡の朝のシヨパンとレモンティー
爽やかなラスト振り返りはしない
さわやかな政治家全て姿消す
退院日空の青さに深呼吸
さわやかな言葉を選れば輪がなごみ
欲一つ捨てたら風もさわやかに
さわやかな孤独に飢えている五月
パン育ち箸を持つ手がきこちない

岩美川柳会

石谷美恵子報

アヤ子
瑠美子
淳司
庸佑
絹枝
栄一
鐘造
龍一
のり子
井竿
耕策
志洋
アキ
一筒
重人
静子
登志子
六点
たん吉
喜代子
恵勇
雅枝
元紀
一知

公子
節子

シシの欄面倒だけど手を抜くな
火葬場もブライド高いけむり吐く
祝儀袋にブライドが詰めてある
ブライドが高く散れぬ花もある
ブライドを入れる袋が錆びてきた
野あざみのブライドだらう硬い棘
眉紅を差してブライド保つてる
モナリザのブライドだらう歯を見せぬ
ブライドも自我も芽生える三歳児
ブライドが介護用品拒んでる
イチローは九郎義経より凄い
六千度で叫び続ける太陽よ
Gパンに猪の血がついている
どこまでも凄い美人がついてくる
餌の蚯蚓で凄い儲けをしています
運命の凄いいかに泣き寝入り
幼稚園外車で送り迎えする
星月夜おんなが凄いことを言う
ぬるま湯につけて面倒黙らせる
生きて死ぬこれが一番面倒だ
面倒な話も呑んだ喉仏
面倒を五十年みた庭の松
面倒に巻き込まれたら頬かむり
鎧着て今日面倒な人に会う

岬川 柳会

八十田洞庵報

菖子 はお 粹
忠良 睦子 茶子 和子 公乃 裕子 石花菜 完司 螢 圭一郎 蟹郎 節子 雅女 一京 季芳 一瑠 きみ子 重忠 和枝 美恵子

じっくりと値踏みをされている視線
お向かいの夫婦喧嘩に走る父
悪知恵が幸か不幸かよく回る
水に棲み鯨水死というこ難
回り道じっくり話して見た人
またしても先を読み過ぎ踏んだドジ
紫陽花に梅雨を分けてとマイハート
じっくりと口説き上手にだまされる
ストレスは黙って黙になりたがる
自転車で前に後に孫の守り
昨日決め今日は迷って日が暮れる
始発駅今朝も一番顔馴染
じっくりと糸たぐり寄せ母の味
いずも川柳会 佐藤 治代報

和美 悦子 里子 蛙城 桜琴 信博 富美子 洞庵 俣子 茂平 年子 四郎 孝子 多恵子 篤子 ちえ 好子 桂子 富恵 彬丘 敬子 まこと 治代 歌子 テル子 佐余 久子

踏んづけたはずの花からエールくる
真ん中で敵と味方に気を遣う
ラッキーだ狙い通りになつてくる
狙われた殺し文句にだまされる
男結びやっぱり父の意地がある
真ん中に裸の王様据えておく
おたまじゃくしやはり蛙になりました
ハイヒール高く狙い届かない
多すぎる的で狙いが決まらない
やっぱりねもう出来ないよケンケンパ
鳩を飛ばそう青空のど真ん中
便箋一枚貴女のハート狙われる
いい夏にはいよう笑顔を決めすまい
狙うのはいつも弱者と決めている
胃の中に詰め込む夏をぐしゃぐしゃに
この夏を私好みにして食べる

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

玲子 昌枝 多喜 房子 美佐子 寿美 蘭水 茂美 満江 文子 多賀子 きみえ 町紅 章峰 ちかし アキ 更紗 加津子 欣子 まつお シマ子 政義 宏至 弥生 頂留子 弘子

ポリシーを失くして夢を留り出す
 ポリシーの如何セレブにのし上る
 ポリシーのない花びらだから触れてみる
 やわらかいポリシーだけど靡かない
 カラフルをよそに大根白通す
 鶴降りる村のみなさんあたたかい
 別れ際村を何度も振り返る
 初せみの声遠ざかり雨来たる
 山河あり豊かな村にみる笑顔
 絶対の自信評価は百年後
 これ以上地球を泣かせてはならぬ
 ゆつくりと時間が流れる鉄と鎌
 偉業成す海の男に乾杯だ
 昼寝の途中娑婆で一席設けてる
 冗談の裏に潜んでいた本音
 伸び切った輪ゴム愛しく捨てられず
 天寿いっぱい食べて喋って笑います
 川柳ねやがわ 森

千里 柳伸 直子 欣之 はじむ 一風 芳香 レイ子 あかり 卓 巳代一 秋雄 義明 定男 いづみ 春蘭 茜報 かすみ 博泉 勇太朗 一風 弘風 さち子 亜成 一炊 庸佑

ブランドを身に付け妻は何処へ行く
 しあわせは忘れたこともまた忘れ
 人のこと言えぬ自分もよく忘れ
 どんぐりの芽吹きはリスの忘れ物
 聞いたのは確か忘れたのは事実
 童宮にいても我が家を忘れない
 忘れること神の御慈悲とも思う
 忘れられそうで遠吠えしています
 物忘れ頭撫でたり叩いたり
 喜怒哀楽折り目折り目の人生路
 折れるのはいつも夫ときめている
 五月晴れ亡母の時計と一人旅
 生涯学習うまく年寄遊ばされ
 生きる知恵やさしい顔で人と会う
 愛煙家地球の居場所せはめられ
 バッテリー取替え背すじしんとする
 掌で舞い散る花と春惜しむ
 メール打つ時指からあなた感じてる
 師を偲ぶレモンの花の真つ盛り
 金属疲労思わす挫骨神経痛
 川柳塔まつえ吟社 三島 沁丘報

三郎 九好 亜也子 仁清 とし子 修 高栄 茜 たもつ 頂留子 忠央 日出子 利昭 ルイ子 勲 寿子 れい子 弘一 朝子 洋 房子 螢 多喜 茂美 桂子 紫晃

古希の坂積木運ぶ手ふれている
 苦労した二人の積木くずれ落ち
 マンションは積木隣と付き合わず
 人過信積木くずしの風に遇う
 自分史に積木くずしに耐えた日々
 芋飯という贅沢は故郷に
 贅沢な気分ひたる仕舞い風呂
 文化だと贅が生んでる温暖化
 贅沢を思わぬ恐さ食べ残し
 コーヒーとパン一枚の朝の贅
 贅沢な舌が時どき駄駄こねる
 ストレスを弾き返してカンナの朱
 ストレスが豹の中で膨れだす
 ストレスをきょうぎゅう詰めて吐息
 ストレスが邪魔して朝の茶が濃い
 ストレスの色一つとは限らない
 ストレスが溜まり言葉が尖ってる
 喋らせて置くと機嫌のいい鸚鵡
 よく喋り宣伝カールの異名取る
 仲よしが会おうと喋り止まらない
 お喋りに乗って噂が飛び跳ねる
 きつかけが出来てとつとつ喋り出す
 ペラペラと言つていいこと悪いこと
 富柳会 池 森子報

たけし 和歌子 小生 きみえ スズコ 畔 幸子 知恵子 多賀子 淞丘 玲子 注湖 政子 芳山 治代 昌枝 長吉 ちえこ 多恵子 静恵 町紅 和子 春蘭 冬虹 政義

モナリザが私一人に微笑んだ
 恋人に探りを入れる変化球
 春は駆け足あつという間に草書体
 脱皮した皮に鋭い傷の跡
 懐かしい人に会えると急ぐ道
 一斉に咲きそれぞれに散り惑う
 貝独楽の唸りに少年目を凝らす
 寒椿情死も辞せぬ彩で咲く
 人間を脱いで人間まで遠か
 風向きが変わりワインは赤にする
 変わらなきや自問自答の定年後
 人きらいなかなか脱げぬ過去がある
 切り札を握って沈めぬ夕日
 残照の海へ古傷脱ぎ捨てる
 優しさの裏をよめずに風の中
 出たくても出られない涙頭張れ
 肉じゃがを焦がす戦は人を焦がす
 脱皮した子の抜けがらを残す部屋
 海鳴りの椅子で女の謎を解く
 忍も苦も春一番へ脱ぎ捨てる
 脱北の民切り捨てている狂気
 ふとしたことで強くなる長くなる
 都合よく相手に変わる一枚舌
 人間の臭味が抜けている平和
 旗色を変えて私が瘦せてくる
 柗榴弾けて少女の海が深くなる

城北川柳会

吉岡

鐘 造 高 驚 順 子 一 慧 英 子 奈保美 初太郎 扶美代 欣之 アキ 伸雄 奏子 紅紫朗 深雪 アキラ 夕子 隆彦 鬼焼 信子 淳司 萩乃 宏至 ひろこ ダン吉 森子 修報 たもつ

罪一つ雨にも洗う結願寺
 雨の日のデートも楽しひとつ傘
 七色の幸せくれる雨上り
 雨男来るから傘を持つて出る
 雨天決行借金取りがやって来た
 人事異動君も省かれそうな顔
 大相撲外人ばかり強くなり
 根回しを省いてことが進まない
 以下同文そんな賞状眠つてる
 省いたら嫌と弱者の声がある
 ひと言を省いて心疑われ
 相槌を打つてくれている茄子トマト
 相槌を打つから法螺を吹き続け
 ひとりごと相槌を打つ古時計
 戦争イヤみんな相槌打っている
 反戦の相槌天に地にひびけ
 相槌を打った拍手に飛ぶ記憶
 あれこれも優しい風に吹つ切れる
 あれこれと飲んだが薬より笑顔
 欲望にあれこれ迷う人の道
 やわらかい釘がおいおい効いてくる
 恐いほど幸せ一日が早い
 極楽のタイムカードはまだ押せぬ
 楽しいこと過ぎた後でも思ひ出に
 老夫婦この頃あまり笑わない
 憲法を記念する日の裏表
 その時はとっても楽しい無駄づかい
 心地よい風に出会った回り道
 雲の峰あれやこれやと師を偲ぶ

はじめ 倫子 ひさ乃 弘風 順三 春蘭 桂作 修 喜美子 利昭 集一 史風 千里 美智子 志華子 一步 静枝 典子 高栄 あやめ 千歩 和夫 達子 昭子 正 とし子 萬的 朝子

豊中もくせい川柳会 江見 見清報
 人間の証泣きまず笑います
 いっぱいの未来を握る孫の指
 僕の名が妻の手帳に載っていない
 試歩の杖ももう回復という若さ
 閨魔帳きつと真つ黒けだろ
 梅雨だった亡夫と最後の葛蒲園
 店屋の子小さい頃から愛想よし
 幸せを生きているぞと背を伸ばす
 若返る玉手箱ならすぐあげる
 若人も案山も減った過疎の村
 雨が降る童謡歌えば亡母の声
 愛想わるいがあたたかい人だ
 母になる喜びあふる母子手帳
 まだ若いつもりで句会梯子する
 年毎に減った手帳の住所録
 ミニトマトなる楽しさに話しかけ
 老人を立たせ漫画を読むヤング
 広重の眼で雨みてる橋の上
 着メロがうるさく私呼ぶのです
 若いから何でも描ける空がある
 愛想よい態度敬遠されている
 木石の目がうろたえる若い夏
 若いから地味な着物がよく映える
 雨の夜は女がひとりとりと木に
 被爆者手帳持つ友もいるクラス会
 黄昏の余白に夕日書き添える
 点滴がずらり討ち死にしたように

重人 啓生 則彦 庸佑 高栄 タミ 英子 和子 慶子 隆 寿美子 都代子 萬的 知香子 巴子 尚士 求芽 玲子 比ろ志 緑骨 幸雀 宇乃子 郁子 正坊 満寿巳 石舟

愛想笑い赤ちゃんの瞳は見抜いてる
ぶ愛想もイチローならば許される
強がりのプラス思考でまだ独り
寅次郎 蛙

川柳さんだ 北野 哲男報

シルバーの気持ちのわかる歳になり
嘘半分足して飛び散るスキヤダル
ツバメには少子化あるか聞いてみる
夫の寝息今日も元氣と安堵する
善行って妻に仕えることですか
ぬかるみに足をとられた朝帰り
半ズボン麦藁帽子夏を追う
パソコンのよく解らないわかる本
賓頭盧を光らせて来た手の重み
妻というぬかるみからは抜け出せぬ
ありがたく旨い朝飯たべている
哲男

うぶみ川柳会 小谷美ツ千報

うつぶんが松の廊下ではじけたり
イチローが打率更新ドル稼ぐ
羽ばたいてみよつか空がまっ青だ
まっ青な空が奏でる童唄
控えめな女が騒ぐと風が吹く
孫来たる廊下は走るものになり
騒ぐから余計火が付き燃え上がる
決断が出来ず往復する廊下
まっ青な海とん行の窓にある
異変かなねずみの騒ぎ聞こえない
針の糸通る確率二割なり
ひろみ

騒いでも喉の渴きは満たされず
狂わなない秒針といふ騒がしき
珍らしい事には騒がしい血脈
まっ青な海に向かって願いごと
荷物やーいロツカーさがす上野駅
お浄土がいままっ青な空にある
天上の青という名の花の種
葱畑からまっ青な応援歌

川柳エスポ 山本 三郎報

人生はいろいろあるさ橋の下
妻生還危ない橋を越えて来る
橋のない川の向こうに美男美女
橋かけて会わして上げたい天の川
八百八橋渡る千万夢や恋
橋の下今じゃ排気の駐車場
待ちあわせ二人で決めた淀屋橋
水上バス近く来て背をちぢめ
アマルベの鉄橋渡るのは不安
橋の名を残して大阪水の街
渡りたい虹のかけ橋一度だけ
太鼓橋水面に揺れる花筏
嫁ぐ娘が渡る棧橋鳴る汽笛
弁慶が橋の真ん中仁王立ち
助け合いながらみんな渡る橋
亡父母にひと目一条戻り橋
足腰が錆びぬ間は歩道橋
身もよだつ吊橋渡る自転車
虹橋に夢を託して道急ぐ

美ツ千
雄人
ひろこ
季芳
重忠
蛭
石花菜
宣子

三枝
さとし
団地
高栄
鈍甲
昭一朗
三郎
一幸
きち子
とし子
任宥
れい子
ゆき子
よねぞう
ルイ子
一炊
たたとし
恵美子
みさと

ときめきを秘めて彼待つ橋手前
大橋を見ながら進む船の旅
親と子の強い絆に橋かける
溪谷の吊り橋渡る軽快さ
聞こえくるときめき胸に花が咲き
幼な子がつくしないかと聞きにくる
幼子の昔に返りほたる追う
とよ子
はつよ
一歩
晩翔
文好
あや子
星花

◎川柳大会開催のお知らせの掲載を希望の場
合は、掲載二カ月前までに事務所まで。

柳界展望

▽日川協新役員△

□(社)日本川柳協会新役員が、6月12日の東西合同常任理事会および通常総会で承認された。会長は今川乱魚氏 理事長は塩見草映氏 副理事長は竹本瓢太郎氏。なお前会長吉岡龍城氏は名誉理事長に就任。

▽芳志御礼△

□有沢せつ子さん(鳥取市・同人)より金一封拝受。
□小玉満江さん(出雲市・同人)より金一封拝受。

▽出版△

□高瀬霜石氏(弘前市・同人)は、4月に川柳&エッセイ「青空もうひとつ」を発売。A5判174頁。エッセイを重点的に掲載。(100

表紙のきり絵作家

前田 尋(まえだ ひろし)氏

1949年 兵庫県に生まれる
70年 きり絵画家 加藤義明氏に師事
78年 第1回個展(大阪・東宝画廊)
日本きり絵協会創設に参画
79年 現代きり絵選抜展(東京)
81年 個展(大阪)以降毎年
85年 国際交流基金アメリカ・カナダきり絵展
きりえ作品集「丹波五十景」出版(絶版)
88・91年 南米アルゼンチン取材
96年 きりえ秀作シリーズ2人展(三田市主催)
99年 ブエノスアイレス日本大使館文化センター 個展
2000年 上斎原村教育委員会主催 個展
2001年 「関西歴史の道をいく五十景」出版

この間、全国きり絵コンクール優秀賞など
具現展、大阪市教育委員会賞、大阪府知事賞など
きりえ絵はがき集「美山の民家」、「アルゼンチン」I、II
現在、日本きり絵協会常任委員、大阪府美術家協会委員
具現美術協会会員

頁・101頁に紹介

□松下比呂志氏(尼崎市・同人)は、6月に「老春賦」を発売。B6判74頁(次号に紹介)

▽訂正とお詫び△

6月号16頁上段23行目、
……飛んでも荒地(アメリカ・カ2句)……飛んでも荒地アメリカ
88頁中段13行

新同人紹介

(前月承認)
喜田准一

千秀・保州・朱夏・和子推薦

山田葉子

求芽・楓楽・啓子推薦

鈴木木いさお

美代子・瑠美子・扶美代・志洋推薦

目、戒衣→戎衣 109頁中
段3行目、瑠美子→ルイ子
31頁下段13行目、18行目、
重複のため削除
7月号199頁下段3行目、
春嵐→青嵐 176頁常任理事、
穴吹尚士・鴨谷瑠美子・西
内朋月・村上玄也を追加
常任理事会11月7日 出

日程⑤その他 会計部・
同人推薦2名
次回常任理事会11月5日
(金)13時半、アウイーナ

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
高槻川柳 サークル 卯 の 花	18日(木) 正午から 乾く・不眠症・ひどい ベット・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1118 高槻市奥天神町1-26-17 瀧本きよし
岸 和 田 川 柳 会	20日(土)午後1時半から 短い・矛盾・恵まれる・元帳	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-307 長谷川呂万
川 柳 藤 井 寺	21日(日)午後1時から 天秤・波	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市藤井寺公団1-105 高田美代子
はびきの 市 民 会 川 柳 会	21日(日)午後1時から 果物・豆腐・ミス・「秋」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川 柳 塔 わかやま	21日(日)午後1時から 軒・調子・おしゃれ (よ「助詞」)	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
川 柳 ねやがわ	21日(日)午後1時半締切り 雲・救助・揺れる・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	21日(日)午後1時半から 芝居・情け・からっぽ	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川 柳 塔 みぞくち	22日(月)午後8時から 花火・ビール・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
南 大 阪 川 柳 会	23日(火)午後6時から 穴・きっかけ・戻る・ずるい	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳クラブ わたの花	26日(金)午前9時半から 裏・本音・短い・こっそり	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川 柳 同 好 会	27日(土)午後6時から 無事・ヒント・吊る・朝	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
八尾市民 川 柳 会	28日(日) 正午から 第52回 八尾市民川柳大会	8月号(P.55参照) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川 柳 ふうもん 吟 社	28日(日)午後1時から ざまあみろ・ゴキブリ・お化け	JR鳥取駅構内 シヤミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京 都 塔 の 会	29日(月)午後1時から 脂・しんどい・瞬間	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

8 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	7 月 31 日(日) 第23回 夜市川柳大会	7 月号 (P.58参照) 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
川 柳 塔 な ら	3 日(水)午後1時から まいど・活・蛇足	奈良市立中央公民館4F (近鉄奈良④出口歩5分) 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子
尼 崎 いくしま	5 日(金)午後1時から 脱ぐ・足・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川 柳 塔 ま つ え	6 日(土)午後1時から 争う・太陽・裸・ドラマ	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島崙丘
富 柳 会	6 日(土)午後1時から 半・写す・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
城 北 会 川 柳 会	6 日(土)午後1時締切り 合わす・色気・こってり 自由吟	旭区 老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮駅3番出口の左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
倉 吉 川 柳 会	6 日(土)午後1時から 蜜・心臓・垂れる	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
西宮北口 川 柳 会	8 日(月)午後1時から 参加・まだまだ・遺産・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南西出口徒歩3分 プレラにのみや 〒663-8202 西宮市高畑町2-82-308 西口いわえ
川 柳 塔 唐 津	8 日(月)午後1時半から 虫・まつり・祈る	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	9 日(火)午後1時から 折鶴・底・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺龐太
ほ たる 川 柳 同 好 会	9 日(火)午後1時から 梓・合掌・拾う	豊中市立堂池公民館 阪急・モノレール 堂池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
川 柳 塔 打 吹	13日(土)午後1時から 見栄・森・生きる	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0924 倉吉市河原町1879 高多博丈
川 柳 塔 みちのく	13日(土)午後4時から 太陽・さらす・土踏まず	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-0161 青森県南津軽郡平賀町杉館字宮元53-1 小寺花峯
もくせい 川 柳 会	15日(月)午後1時から 調子・さすが・歩く・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清

編集後記

☆7月号の当欄で、表紙の絵がかわることに触れておいたが、「あれっ」と思われた方も多いだろう。感想はいかがでしょうか。担当のきり絵作家、前田尋（ひろし）氏については17頁に経歴を紹介したのでご覧いただきたい。色も四色刷りとなり気分一新、9月号からは「樺様抄」もデビューするので、これからも『川柳塔』を楽しんで下さい。

☆「川柳塔」創刊以来、表紙を揮毫下さった直原主青先生には深く感謝し、今後のご健康とますますのご活躍をお祈り申し上げます。

☆二賞応募月になりました。78・79頁の選考規定を熟読の上、本誌とじ込みの応募用紙を使用して、資格のある同人・誌友の皆様は

金賞応募をお願いします。

☆広辞苑が5版ではじめて電子辞書になった98年、発売されてすぐ買い、以来愛用している。思えばその頃から字をよく忘れるようになった。ある人にその原因をあたかも電子辞書のせいのように話した。すると曰く「それは歳のせいや」。

☆その症状はどんどん進み、校正の折など同じ字や送り仮名を何度も辞書で引いて確かめねばならない。引いた記憶はあるのだが、肝心の内容をすぐに忘れてしまうからである。

☆これではならじと、近所の書店で買った「脳が若返るバズル」や、外国のお土産にももらった「十指を動かすボール」に挑戦しているが、効果のほどはまだ不明。がんばって若返りし過ぎ、三歳児くらいの脳になって困るなあ！。

(ふ)

ひとこと

川柳でセルフコントロール

句会でいちばん心に残るのは人とのふれあいです。諸先輩の句を通して、あるいは偶然隣り合わせた方のお人柄にあれて、今日はい日だったと思うことの嬉しさ。職業や社会的ステイタスとは無関係な交流の中で、新しい自分を立ち上げることさえ出来るのです。

自意識過剰で自分しか見なかった目に周りの景色が見え始める。

仮にその日が全没であつても、我が句で何を伝えようとしたのか、客観的に分析できます。

人間、だれしも高低の差はあつても躁と鬱の波に身を委ねております。川柳人とはその落差を冷静に受け止める人だと思います。そして句作により、明日になれば明日のことがわかる、という境地に達することができればセルフコントロールは大成。自分で自分をほめてやりましょう。

(柿花和夫)

○岐阜県博物館で「大八文庫による川柳展」を観る。平成4年1月15日の「おめでとう会」で大八先生は「室町時代の平均年齢一九・二歳、信長の死は四九歳」であり、ご自身は「八十近い人生、豊穠の過去であった」と言い切られた。

○大八先生は大戦で左腕を失くされた。「万歳とあげて行った手を大陸へおいで来た」鶴彬の作品そのままを体験されながら、「豊穠

の過去であつた」と言い切る強さの原点を、この展覧会で見せて頂いた。

○薫風名誉主幹が亡くなられて私に愛読書が増えた。「橘高薫風川柳句集」全句索引である。平成14年の川柳塔まつりに配布された、桑原道夫氏の力作。

○先生の作品が正しく読まれることを願って、全句にルビを振り、五十音順に整理された資料としても一級のものである。

○「うかうかと来た七十の顔がこれ」や「七面鳥その風格が聖者めき」の「七」には「ひち」とルビが打たれ、先生のはんなりした関西弁の息遣いがよみがえる。

○薫風先生は徴兵検査で第二乙種合格。戦争末期に秋田で訓練され、ビンタも経験されたとか。戦争体験を多く語られてはいないが、次の一句を残されている。

○「八月はまだ簡単な月でない 薫風」

(朱)

応募用紙

○印を入れてください。

路郎賞（川柳塔欄・同人）	川柳塔賞（水煙抄欄・誌友）
--------------	---------------

◎下段に掲載月と掲載頁を記載のこと。
◎裏ページの要項を読んで応募してください。

月	月	月	月	月
頁	頁	頁	頁	頁

地名

姓·雅号

応募要項

① 川柳塔欄・水煙抄欄に六カ月以上、出句した人に応募資格を認める。

② 平成16年9月号から平成17年8月号までの自分の入選句から8句を選ぶ

路郎賞——同人は川柳塔欄から応募

川柳塔賞——誌友は水煙抄欄から応募

③ 5句と掲載月、掲載頁を楷書で書き、8月10日必着のこと

④ P 78・P 79を参照して下さい。

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（10月号）地名

市 県
姓・雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



檸檬抄投句用紙

「順序」 (8月15日締切)

10月号発表

藤田 泰子 選 — 共選 — 仁部 四郎 選

B A

--	--

B A

--	--

地名

県市
雅号

地名

県市
雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい

川柳塔誌新規購読申込書

年 月 日

氏名	住所	電話	紹介者
	〒 —	— —	

○ ○

年 年

月から半年
月から一年

5000円
9800円

該当の方に○をつけて下さい

〒545-0005

川柳塔社

(電話 06-6629-6914)

大阪市阿倍野区三木町2-10-16 ウエムラ第2ビル202

振替 00980-5-33368

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい



作品募集

初歩教室 「蜜柑」(3句)
一路集 (3句) 「祈る」「まつり」「虫」
檸檬抄「順序」(2句)
愛染帖 (3句)
水煙抄 (8句)
川柳塔 (8句)
河内笑選
板尾岳人選
新家完司選
新部四郎共選
仁藤田泰子選
牧野芳光選
中崎深雪選
中宗明選
住宅保州担当

10月号発表 (8月15日締切)

11月号
檸檬抄「洗う」「霜」「お親戚」
一路集「收成」「金」
初歩教室

本社8月句会

とき 8月5日(金) 午後5時半開場・6時半締切り
開催時間にご注意下さい。
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
おはなし
兼題 「札む」「ほのか」「緑」「魂」「怒る」
席題 1題 当日発表(各題2句以内)
会費 1000円 投句料 500円
河内天笑選
江口美籠選
長浜能子選
黒田修選
吉岡正坊選
田中正坊選

本社9月句会 6日(火) 午後5時半から
「動く」「芯」「絹」
「浅い」「焼く」

第24年度 夜市川柳募集

第3回「牛」新家完司選
ハガキに3句 8月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

定価 八百円(送料84円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇〇五年平成十七年八月一日発行

編集兼 発行人 河内権治

印刷所 美研アト

〒545-0005 大阪市阿倍野区三好町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(〇六)六六二九六九一四番
振替 〇〇九八〇一五二三三六八番

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保健取扱 看護 2 A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪 (06) **6771-4861**(代)

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします。

美 研 ア ー ト

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178

FAX (06) 6372-1196

E-mail: bikenart@wonder.ocn.ne.jp